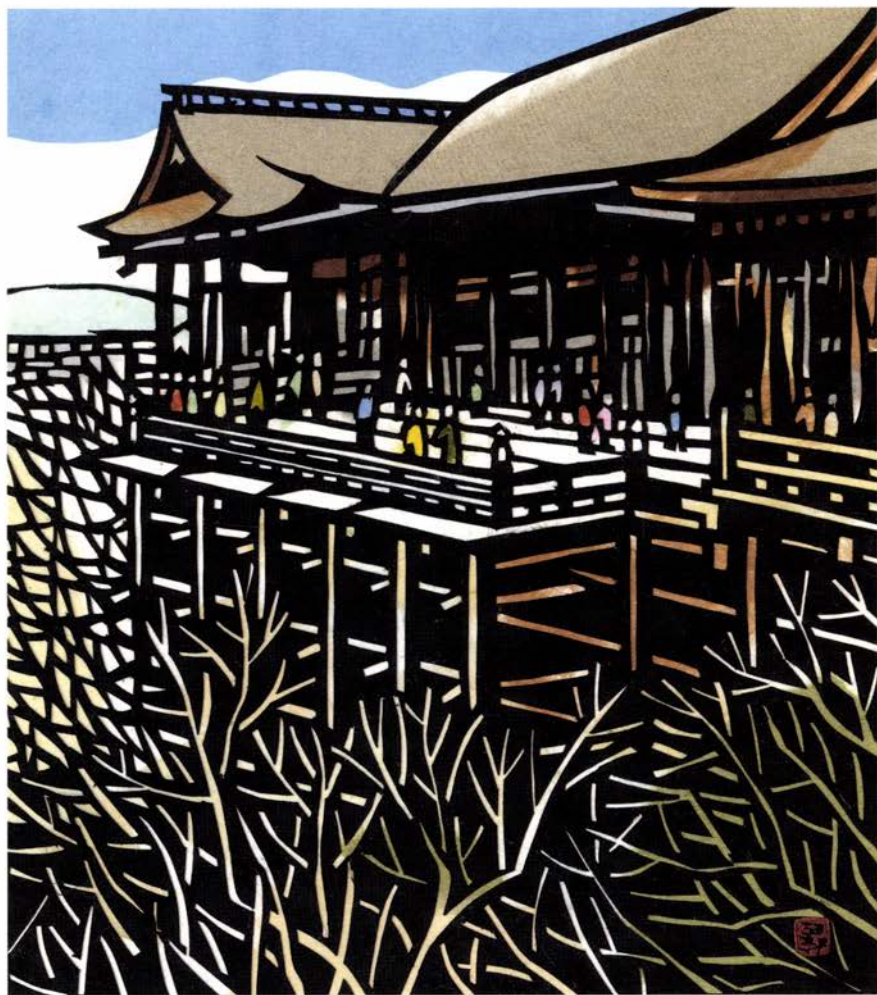


川柳塔



No. 955

十二月号

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十八年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九五五号

日川協加盟

寒中見舞募集

○本誌平成19年2月号掲載
○締切 12月23日

川柳塔社事務所 宛

平成19年大会予告

日川協栃木大会

平成19年6月10日(日)

鬼怒川温泉あさやホテル

第13回川柳塔まつり

平成19年10月8日(祝)

アウイーナ大阪

国民文化祭徳島大会

平成19年10月28日(日)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

凡愚の戯れ言

河内 天笑

今年も最後の巻頭言を書く時期となった。毎月さて何を書くかと思索していたら大野風柳さんから「先ず原稿用紙に何でもいいから書き出してみること」と教わったことを思い出したので、身辺のざれ言となった次第。

最近はお泡盛に嵌っている。それもアルコール60度の古酒だ。瓶の蓋をとると、類い稀ないい香りに先ず頷く。「君は何といい香りだ」とバラを愛でる如く誉めちぎりながらグラスに五分の一程そそぎ入れ、ポットのお湯を八分目まで入れる。これで準備完了。よほどでない限りはこれ一杯で打ち上げ。家内を心配させるほどは飲まないことにしている。それでも鏡をみると真つ赤つか。顔の染まり具合を見て「今日はこれで止めとこ」と満足できる。

晩酌をしなかったある夜、遅くなってからバレンタインを少し飲もうと思いついてコンビン二ヘチコレート等を仕入れに行つた。なるべく純粋カカオの多いチコレートを選ぶ。焼酎や泡盛はイカやタコの薫製、又はちくわ、かまぼこ等が合うが、ウイスキーのオンザロックはチコレートが私には合う。それだけの為に、日付けも変わりそうな時間にコンビン二まで走る。自分の好みに合わせ、すぐ手に入れたくなる他愛ない男と笑われても仕方がない。私の唯一のストレス解消法でもあるのだから……。

昭和42年に初参加した川柳塔社の本社句会は席題が三題、兼

題が三題であった。本社句会とはこういうものだと思つていた。今週調べてみると、兼題席題三つずつというのは昭和50年2月句会までであった。その後、平成2年3月句会までの15年間は席題2、兼題4の組み立てとなり、同年4月句会から現在に至るまで席題は1、兼題5という仕組になった次第である。

長い間句会部のお世話をして頂いたのも今はなつかしい思い出となった。

朝の連続ドラマ、田辺聖子さん原案の「芋たこなんきん」を見ていると、11月半ばであったが、親子川柳大会の優勝戦の審査員を主人公がする場面があった。ところが当日の出題が事前に漏れていることがわかり、主人公が憤慨して結局大会は優勝者なしで終わることになってしまった。

またこのドラマには、路郎、水府先生の句が取り上げられるシーンもあり、全国で放映されているだけに、この機会に川柳に関心が集まり、ひいては誌友拡大に繋がれば有難いのだが。……どうぞ皆様よいお年をお迎え下さい。

自選句

虫食いの野菜は神の食べ残し

天笑

音読をして脳みそに活を入れ

内閣がやらせのタウンミーティング

新庄が北の大地を突らせる

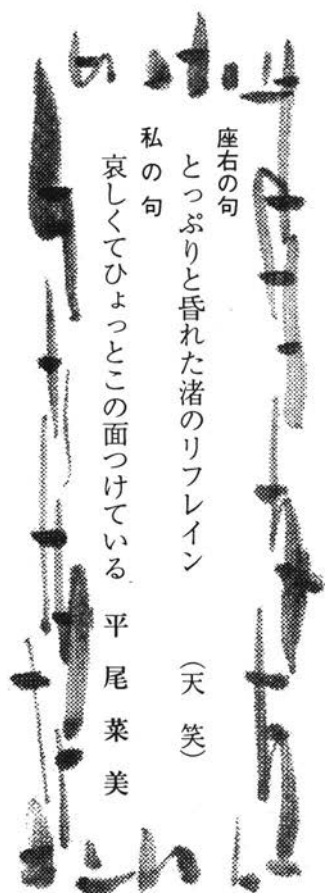
六十億円が松坂への答

ク

ク

ク

ク



座右の句

とつぷりと昏れた渚のリフレイン

(天笑)

私の句

哀しくてひよつとこの面つけている 平尾 菜美

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙さり絵・前田 尋「清水寺」

■巻頭言 凡愚の戯れ言

河内 天笑 …… (1)

青春の一コマ

桜井 千秀 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

河内 天笑 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (24)

木津川 計 …… (51)

自選集

奥田みつ子選 …… (52)

水煙抄

新家完司選 …… (56)

愛染帖

新 家 完 司 選 …… (78)

俳風柳多留 一篇研究 16

川上大輪・松本文子共選 …… (82)

檸檬抄「のこのこ」

川上大輪・松本文子共選 …… (84)

青春の一コマ

桜井 千秀

椿峠 (椿が道の両側に群生していてそう呼ばれていた)までは牛車も通う道幅の上り坂。そしてその道はそこから西笠取村まで続く下り坂。だが、私はその峠の横から細い抜け道 (けもの道) を通って、山の中腹の向こう側にある上の隠居へよくお邪魔した。山師の父は山の下道を一回りしただけで、その山の木材の産出量を見抜き、山持ちや材木商の売り買いには重宝がられていた。

上の隠居の離れ屋もその一つで長い付き合いである。前から頼んでいた猫の子が乳離れしたと言付けが届き、早速お訪ねして三匹の中で一番元氣そうな茶色と決めると早々に掃り支度。その家の幼い子供さんに慕われていて、もう選いからは是非泊まって行くようせがまれつつ、土産に頂いたかき餅を背中へ腰には懐中電灯を括りつけ、猫は布袋にいれ両手で抱き「おおきにー」と隠居夫婦、若夫婦、子供さん二人に見送られ元氣いっぱい広い田圃道を下り始めた。

やがて20軒余りの集落に出た。その真ん中に小学校が在り此処は小学三年生までで、四年からは校門前からあの椿峠越えをして往復三里 (12キロ) の大津市石山小学校へ通う。私宅の前の道路もその途中で児童達とは大抵顔馴染み

一路集
「時 計」……………伊藤玲子選…(86)
「大 人」……………丹後屋 肇選…(86)

初歩教室「やっと」……………録沢風花選…(87)

秀句鑑賞「同人吟」……………三宅保州…(88)
「水煙抄」……………播本充子…(90)

■エッセー 老 春……………北野哲男…(92)
「犯罪被害者の心情」……………高杉千歩…(93)

第21回国民文化祭・やまぐち2006……………山口光久…(94)

十一月本社句会……………(96)

各地柳壇（佳句地十選／伊勢八重子）……………(98)

柳界展望……………(102)

十二月各地句会案内……………(106)

■編集後記（ひとこと／坂上のり子）……………(116)

……………(120)

座右の句

空瓶のフタのないのは寒そうな

私の句

開発の音に混って蝉が啼く

松本 知恵子

（史 好）

である。

さて私が椿峠を越える頃はもう真つ暗闇で夜道は歩き慣れていても、猫がもぎ出し少々疲れ気味。と、突然はるか向こうで鬼火と覚しき光りがピカピカ。更に目を凝らすとやがて火の玉のようにふわりふわり。首から背筋へ冷水が浸たり落ちる。どうやら鬼石の辺りらしい。

鬼石は大きな岩石で昔はみんなが座り込んだ休息処、昨年村人が背負っていた荷物で後ろの蜜蜂の巣を潰し刺されて亡くなり、以来この石は誰もが避けて通る。その人の火の玉かな…。

一歩も踏み出せずにいたが、突如「影か柳か勘太郎さんか」怒鳴るように唄いながら火の玉めがけ飛び出す手段に出た。「女らしい、若い娘らしい」と近付いて来たのは五人の村人。手に持った懐中電灯が縦に横に光ったのが火の玉に見えたのだ。向こうは苦し紛れに唸る猫が、狼の鳴き声に似て腰の懐中電灯がガラガラと目の玉に見え前に進めなかったと口々に言う。顔

見知りの人もいて笑い話で別れたが、戦時中空襲の恐ろしさも知らずに過ごした京都の山里で、馬鹿らしいような怖い思い出。

後日談になるがこの鬼石で、ジープを止めて若い女性を連れた進駐軍の兵士が座っていたので、蜂の巣の話したら「オオコワッ」と大袈裟なゼスチャー。「ジープ止め進駐軍がコンニチワ」滋賀新聞に掲載されたこの句が私の川柳の走りだったような気がする。



河内天笑選

京都市 高島啓子

赤い空背に花札の月が出る

晴れた夜の月は地球を従える

お小言の途中ですけどよい月夜

月のない夜は脱走するチャンス

乱世を思わす赤い月が出る

満月へ未来の王を生み落とす

弘前市 高瀬霜石

血統書付きも雑種もお犬様

プレゼント貰った方は忘れてる

表札に恥じないように朝を出る

氷山の一角 みんな悪いこと

手を洗うラッキーマン泣いた日も

ふるさとは遠く縄のれんをくぐる

吹田市 山本希久子

握手した手の温もりがまだ残り（悼葉香先生）

老母訪ねるとさよならが言いにくい

奥様と言うは名ばかりトイレ拭く

ころがしてみる手のひらの結果論
なるようになるさ余生のあばら骨
生きている喜び何度でも転ぶ

河内長野市 山岡富美子

千羽鶴風を掴んだ退院日

句読点打って余生の空へ飛ぶ

一病を抱いて飛んでる古稀の翅

美しい国への一歩ごみ拾う

お二人の邪魔をしますお月様

満月が青いテントを城にする

堺市 村上玄也

性格が諸に出ている癖字だな

口下手というが上手に嘘はつく

下戸だけど宴会好きで芸達者

音読で脳の老化に待ったかけ

盃を伏せ今日は車で来ています

妻と旅いつもトイレで待たされる

出雲市 伊藤 玲子

残された余白やさしい色を塗る
穏やかな虹のカーブだ渡ろうか
芋もよし柿よし栗のもつとよし
里芋のころころ月も中天に
裏表うっかりみんな見せちまう
世知辛さ見せまいとして笑つてる

鳥取市 杉本 孝男

ご無沙汰の娘からの便り蟹送れ
ほんやりとしたいから行くひとり旅
宇宙から見るとちつぽけ今日のミス
地酒ほめ山菜愛でる旅つづく
大声を出して百まで生き延びる
うっかりとちやつかりが居てよく弾む

八尾市 生嶋 ますみ

年金があつて大事にされてます
曼珠沙華悪女の気配感じさせ
東大出ヒルズ族への夢を持ち
里へ来る熊にも森にある事情
お年寄り本気に遊びはじめたぞ
熟年の離婚女に羽がある

犬山市 金子 美千代

ゆつくりと効くお薬にほつとする
したくないしたい長生き金が必要
かかわつてしまいい眠れぬ夜が続き

似ていると言われた人が気にかかり
興奮をしている酔いがすぐ回り
段々とメッキ剥がれる逃げ支度

宇部市 平田 実男

妻が目で牽制球を投げてくる
景色より飲んで唄つたバスツアー
オーイお茶小さい声で言つて見る
合鍵を持たされてから火のドラマ
開発が美しい国切り刻む

湿布薬貼つてやつたり貼られたり

長岡京市 山田 葉子

そうかとだけ父の背中が寂しそう
軽くみたシグナル深い傷残す
言い訳はしない選んだのはわたし
カプチーノふうわりふたり包みこむ
病床の空気変えたい軽い嘘
訳きいても飛び立つ気持揺らがな

三田市 堀 正和

最初はグーみんな無心になれる時
あかんあプラトニックラブしかできん
指定席やはり富士山見える方
カタカナ語使い年寄り煙に巻く
お財布は持ったか孫にチェックされ
機嫌いい朝は薬を飲み忘れ

唐津市 井上勝視

持たぬから騙されようもない暮し

性格の不一致だから五十年

理を通す嫁には欲しい思いやり

手抜きする食事に慣れる年金者

かたくなに背を向けて来たクリスマス

唐津市 坂本蜂朗

ハハキトク ローカル線が遅過ぎる

惜しくない命ですけど医者通い

何事もなくておやすみVサイン

ちぐはぐな妻でなかなか飽きがこぬ

神様も笑顔小銭の願回事

唐津市 宗水笑

彼岸花俺の寿命はどのあたり

涙腺のゆるみ恥ずかし時代劇

怠けぐせDNAの所為と言う

雑草の伸びる早さよ老いの野良

最下位も優勝祈願してたはず

唐津市 樋口輝夫

がっぷりと猿に食われた俺の夢

血糖値気にはしてないバイキング

バイキング帰りに折に詰めるママ

飲んで食い喋りまくってバスツアー

学歴はないけど学のある男

唐津市 市丸晴翠

満ち欠けの月に重なる人生賦

満月を隠した雲を語る孫

ばろばろの軍隊手帳だけ帰還

放つとけと言う父が先ず口を出す

教え子が還暦となる元教師

唐津市 久保正剣

車座の中で沈んでゆく孤独

日めくりをめくれない日がきつとくる

まだ弥陀の誘いに乗れぬ作句欲

土石流恐いが故郷捨てられず

渡る世間鬼より怖い目出し帽

唐津市 山口高明

縦歩き偶にはしたい平家蟹

口説かねば失礼ですよ別嬪さん

ゴマ搦りが出来る僕なら困りやせぬ

ヨン様と妻が寝言を言いました

想い出はいいことばかり死に別れ

熊本市 永田俊子

柳聖相寄り開き給うか蓮華句座

ひもじさを知らぬ子供成人病

関係ないでしょに始まる親ばなれ

想定外でした熟年の離婚

そこそこの暮らしで心に花を植え

熊本県 高野 宵草

十和田市 阿部 進

ボケットが沢山出来て冬が好き
底辺も開き直れば楽でした
笑声に置いてきぼりの遠い耳
点滴よいそげ師走でござります
霊長の自負が競った核兵器

熊本県 岩切 康子

暫くは月と語って引くカーテン
親切な友に抱かれて至福感
ゴミ袋主婦の性格見えている
水中歩行波にふらつく身の軽さ
薬風呂亡父の思い出湧く香り

砂川市 大橋 政良

不精ひげ少し汚れた鏡拭く
この先にきつと見せ場があるだろう
神様のシナリオにないポックリ死
背伸びしてまた欠点が一つふえ
ボケットで遊ばせてある悪だくみ

黒石市 相馬 一花

ペナルティー怖くて止める浮気癖
半裸にもなれぬ昔の傷の跡
生真面目につける薬は売ってない
少子化を知らぬ農婦の腰の幅
女房の推理外れたことがない

落ちついて聞けば蛙は歌手ばかり
懐かしい地名が消えた大合併
なつかしい味の老舗が大繁昌
窓際でのどかに生きる古希夫婦
二十代迷い続けた日々でした

平川市 小寺 花峯

くもの巣へ首をつつ込む猜疑心
晩秋の囲炉裏の回り30度
保護色の形で今日を生き延びる
雑草も雑草として生きる知恵
湯豆腐が主役になって外は雪

弘前市 須郷 井蛙

温暖化北も野球が強くなる
十割は親の不注意シュレッダー
来年の土へしっかりと鋏を入れ
玄関に親の躰が置いてある
ポスターの美女とは違う観光地

弘前市 福士 慕情

朝晩の冷え込み山を紅くする
初雪が怖いタイヤは夏のまま
寒さには強いはずだが風邪を引く
鼻づまり妻公認の玉子酒
ストープをがんがん焚いて飲むビール

弘前市 櫻庭順風

さいたま市 八田 敏

素人のハサミとノコは藪の中
終わるまで何年かかる藪を切る
開拓を余暇で処理したたかさ
宇都宮へ転勤も藪切り止めず
藪切り八年別荘に支えられ

弘前市 岡本花匠

新発見百円バスの漫遊記
足裏に健康テープ身の軽さ
夢売りを探しあぐねている余生
錦繡の山で吟唱無上楽
限定品手にして増える嘆い皺

弘前市 高橋岳水

リンドウの色あざやかに秋深む
当事者でないから言える瑕の数
古い二人パントマイムの日が続く
強がりも最後は弥陀の掌に縋る
うれしくてやがて佗しい敬老日

弘前市 今 愁 女

野菜よりサブリメントが高くつき
蓮の実の飛んで静かな秋日和
茸とり山路を行けば釣舟草
遭難のニュースで埋まる行楽日
高年登山無理を承知で登ったか

八十路来てやとと長生き仲間入り
新人生踏み出すころ八十の朝
頸椎手術医師三人に断われ
十三年よくぞ続いた妻介護
今年までと決めた未練の菊作り

さいたま市 星野育子

秋の空核実験は似合わない
抜けない指輪に束縛されている
聞き上手三度もお茶を入れ替える
衣食住足りてる人は無関心
どん底を知れば優しく強くなる

日高市 根岸方子

耐震の不備問う法が後を追う
童画にも銃が画かれる世界地図
骨董屋人待ち顔の赤い文字
白髪染め井戸端会議盛り上げる
お仏壇義母好きだった花をあけ

柏市 永峰宣子

指名受けすぐに総理の顔になる
芽を出して半月で咲く彼岸花
今のうちハワイツアーに参加する
銀盤の汚職を時が炙り出す
赤とんぼ台風余波の風に舞う

東京都 長谷川 康子

整形のアゴで夫をこき使い

松茸は買うものと知る引退後

ビル風に必死で傘をすはめてく

都会にもあった秋には秋の空

肩パッドハヤリに合わせ取りはずす

東京都 小川 賀世子

夏瘦せもせずに実りの秋となる

秋風に君の噂を問うている

傷ひとつ頭もたげる秋の中

山野草活けてどつぷり秋の中

傷癒えたらしい一皮むけた友

東京都 岸 野 あやめ

十月一日以降関西四私鉄

もとの名は株式欄にもう出ない

亡父よ亡母よわたしは明日八十二

東京の敬語をとちる浪速っ子

セレブよりちよいワル婆さんなどが

東京都 清 原 悦子

介護する部屋の窓から見える四季

二世帯に明るい花のある平和

限定に何故か人間弱いもの

明日へのステップとなる散歩道

詮索が過ぎて孤独の中にいる

八王子市 播 本 充子

美しい国への税金が高い

ふつくらしつとりもお金にはシビア

たつぷりと銀杏の秋を嗅いだ靴

あれこれを拝んで参加賞もらう

了見がとっても狭いお金持ち

武蔵野市 亀 井 円 女

どっちもどっち母と娘の口喧嘩

隣席に唯居るだけで温い人

見た目より心のおしゃれしなかった

さみしくなると一人芝居をしてみよう

昔はなあと言うなり婆ちゃんまたかいなあ

国分寺市 野 崎 勝

平凡な幸せ酒も米もある

お見舞いに微笑む母が若返る

買換え期テレビ空調お前もか

彼岸入り僧侶のバイク快調に

甲子園金の卵は籤で釣る

佐倉市 岡 井 やすお

首相交代アジア嵐の前の静

政界では五十代まだまだ青い

美しい抽象論で人気取り

高校ドラフト野球楽しみです天

三つ子からボール蹴る国には勝てぬ

横浜市 菊地政勝

空っぽの脳にさせない好奇心
倍になる話に乗っていた不覚
夫から折れる我が家の無言劇
聖書閉じ寝る気になった一人旅
包装紙伸ばしてたたみ忘れられ

横浜市 小野句多留

コンバクト済めばメールと飽きさせぬ
予定せぬ入金すぐに使い道
セクハラの疑い二度は致命傷
なにもせぬ逃げも隠れも出来ぬ日日
馬籠宿秋を先取りするツアー

富山市 島ひかる

祖母に似た姿で紫蘇の実をほぐす
泥んこを互いに笑う野良仕事
ごめんねの一言にある妥協点
初冠雪仰ぎ間引きの菜を語る
身の丈の願いを神は聴き入れる

静岡県 藺田漠香

竹を割ったような男と潔し
原石を光らすまでの手間と金
言う事が光る頃には頭も光る
少女とは思えぬ筆の書道展
松茸とサンマ同時に届く秋

可児市 板山まみ子

喉もとにつかえたままの不発弾
何着よう女泣かせの空模様
生ビール三杯飲めば元がとれ
物騒なこと起きぬ間に食べておく
膨らんだ暮しにパンチ石油高

可児市 鶴留百合

強風に風船取られ泣き出す児
ジジババも運動会へゴザ広げ
片づかず月が真上にまだ職場
凶器です後を絶たない飲酒事故
ガンならばさよならかもね首のコブ

愛知県 早川盛夫

末席が性に合ってる爪楊枝
脂肪肝医者にも策はないらしい
美女の酌いや気持よく酔いました
年金の何処まで行けるいのちやら
定年の如雨露は水を遣り過ぎる

大山市 関本かつ子

坊ちやまの首相がつづく二世丸
ローカルな城で落着く旅帰り
名月を気づかぬ子等の塾帰り
コスモスの色とりどりが淋しい日
葬式の花輪で知った勤め先

大山市 吉田 幸子

大阪市 古今堂 蕉子

哀愁を帯びた音色へ衣替え
呆けたとは言わず互いに寄り添おう

健康で馴染みの医師のない不安

節々に根を張るツルのご根性

土地柄も働きもよし甘い栗

大津市 中 宗明

形見分け親戚中が顔そろえ

めきめきと本領發揮演歌みち

老人会弁当選ぶむずかしさ

形見分け性格分る得手勝手

殺人を平気でするも異変の世

京都市 都 倉 求 芽

相槌を打ちながら嘘より分ける

争いがだんだん些細になる夫婦

秋日和干し物ももう肩張らぬ

実用にするならニセモノでもいいか

いくとこまでいかんと行かぬ歯科医院

亀岡市 井 上 森 生

美しい棚田国土を崩さない

神々の山へ秘湯とハイキング (紅葉の大雪山 4句)

愚痴っぽい恨みは超えて夫婦風呂

雄大な北の大地も秋の翳

熱中に嵌りリュックの旅姿

優雅だな退屈だなと船の旅

絶海の孤島はいやだしやべれない

あみだくじ一本足したのは誰だ

手強すぎる取扱い説明書

煮えすぎた鍋のようですわたしたち

大阪市 川 原 章 久

針に糸通してと老いた妻

スピードの渦に吞まれて消えた駅

散歩には主人がお供マイベツト

包んでもすぐ捨てられるのし袋

脇役が主役のミスをそつと消す

大阪市 神夏磯 典 子

鈴虫よ精いっぱいの声ありがとう

晒しても無垢の真白さには勝てぬ

仏像のやわ肌撫でて撫でて無に

言いたいことありそう奥へ通される

三食を作って今日が暮れてゆく

大阪市 前 たもつ

十二月マンションやはり大掃除

ふるさとからみかんが届く十二月

去年より微妙に早い十二月

十二月ぴりつとできず暮れてゆく

来年があると気楽な十二月

大阪市 川 端 一 步

芸術の秋満喫へ無料パス

太陽と風がおいしい病癒え

身体髪膚修理代高くつき

恋人よ聞けば心が晴れてくる

無職にも勤労感謝と言う日あり

大阪市 鶴 田 遠 野

おしやれして躡く恋の副作用

ちよい悪の親父演じる妻の留守

寝たふりをして風向きを読んでみる

人生の脚本にある誤字脱字

ラブソング唄って窮地やつと抜け

大阪市 岡 本 久 峰

左巻き去ってそよ風吹き抜ける

働かにや人間早く死にまする

ありがたい人の情けにふれる老い

ちっぱけな四島返し詫び給え

奥方に巻かれて旦那よく動く

大阪市 岩 崎 公 誠

寒天で胃袋騙すダイエット

奥の手をどこで使うか思案する

エルメスのバッグを抱いて下駄を履き

五十年うたわぬ校歌クラス会

二人して老人力を競いあい

大阪市 井 丸 昌 紀

ごゆつくり言いつつ時計盗み見る

結果よしとスカタンやって澄ましてる

物言わぬ地球怒っているらしい

日曜日寝るまでずつと探し物

酔っ払い絡む相手を選っている

大阪市 奥 村 五 月

定年後優しくなった父の顔

変化球投げる女を持て余す

四コマのマンガのように生きている

社長よりでっかい腹で平社員

お見舞の客が長々嫁の愚痴

大阪市 大 川 桃 花

お隣の花束に鼻くすぐられ

母さんに内緒と父の義捐金

手秤で少し多目に貼る切手

いそいそと火の粉を浴びに行く修二会

好物に仏壇の火がふつと揺れ

大阪市 野 田 栄 呼

飽きるほど靴のへらないカー時代

息子の定年見たくて命磨いてる

応援の党首と握手気も新た

秋の夜睡眠薬になる読書

裏山でやけにとんびのピーヒョロコ

大阪市 近藤 正

蹴落した後でチャレンジせよという
核の危機じわりじわりと身に迫る
温泉はちよつとぬるめのフルムーン
白い目がとみに気になる長寿国
靖国へお忍びで行く安倍総理

大阪市 中村 叡子

愛ちゃんと佑ちゃん夢の同級生
鯖がよい秋刀魚が好きと老い二人
実感はないのに景気よいらしい
安倍総理修羅の嵐に立ち向う
新庄が北海道を盛り上げる

大阪市 福岡 末吉

今日の無事洪茶を添えて亡母に告ぐ
足早に公園よぎる塾帰り
比喩格言折りまぜ親の威を保つ
寄せ鍋に家族の絆盛って煮る
控え目な言葉に芯の強さ見る

大阪市 津村 志華子

絡ませた小指平気で嘘をつく
目のうろこ落すと視野が広くなる
他人の花みな幸せな彩に見え
正論を通して杉は天を突く
夕暮れの富士に寄り添う丸い月（紀行）

大阪市 池上 清治

喫茶店紫煙燻らすギヤルが増え
海の幸焙る煙に呼び込まれ
金槌の身には避けたい海の旅
いたわりの料理体にやわらかい
SLの煙も見せるJR

大阪市 小泉 ひさ乃

吹く風に初冬感じているうなじ
回復期あれやこれやとプラン練る
丹精へ花は咲いての恩返し
平熱にもどって洗う箸二膳
消しゴムと辞書を味方にするいのち

大阪市 榎本 日の出

カラフルな下着が並ぶ邪魔な歳
好きだから何を言っても許せまず
逃げ道を知っているから強く言う
名医でも自分の病気後まわし
財産がなくても子供育つてる

大阪市 榎本 舞夢

長かった暑さ脳まで喘いでる
どら息子財産使うためにある
最高のプレゼントですスベアキー
トップの座降りてやさしい父となる
生き甲斐に人の世話して疎まれる

大阪市 西川 更紗

義理で来た友の個展で絵にはまり
見舞客笑い袋をさげて来る
医者の手を離れた命慈しむ
よろけると影もよろよろけ出す
魂は夫の影を追いつづけ

大阪市 升成 好

コメディアン色紙の文字も笑わせる
目を皿にしても見落すことばかり
鬼がわらビルの谷間で馴染めない
手料理の指の先から出るうま味
助っ人に孫まで呼んで妻強し

大阪市 中村 れんげ

この辺でお茶にしましょう句読点
喜びの美学で生きる八十路坂
退屈な七十路女の愚痴を聞く
ユーモアのセンスで沸かす同窓会
傘寿の恋実らせようか思案中

大阪市 熊代 菜月

雪虫が冬も近いととび回る
山寺はカラスの声で夜があける
風鈴が季節はずれに亡母の部屋
お若いと言われて無理をしてみ
アルバムに若さを置いてきてしまい

大阪市 伊藤 博仁

上がり降りたびに数減る吊し柿
まだ意欲杖の先ゴム二個も買う
歌われてつい火がついたハーモニカ
DVD大和が涙つれてきた
忘れ場所思い出すだけまだましだ

大阪市 津守 柳伸

ホップステップ温泉めぐり生き甲斐に
あの街この町どちら向いてものつぽビル
衣更え手つかずのまま入れ替える
美しい国美しい和会席
協力をさせる天引き介護料

大阪市 津守 なぎさ

台風といつも重なる三朝の湯
ニガウリを片付け秋がしのびよる
盛塩はトルコ岩塩だった店
旅プランやつと煮詰めた三姉妹
CMの長さ雑用する時間

大阪市 松尾 柳右子

お隣の元気な声だ回覧板
大根の白に煩惱吸い込まれ
せせらぎの音聞く湯宿命延び
御堂筋いちょう並木に夕日燃ゆ
道祖神カラスの声は子守唄

大阪市 川久保 睦子

少年の悲劇が降ってくる朝刊
どちらとも取れる笑顔でよみづらい
ベランダで飼った鈴虫鳴きすぎる
墓参り無口な石に語りかけ
夢の木がまだまだ伸びる古希の坂

大阪市 板東 倫子

職業欄親がバイトで子がパート
スーパ―へすすきを買に行く月見
着飾られ迷惑そうな七五三
期待せず起き何事も無くて寝る
カナダでも韓国でも良し松茸飯

大阪市 小糸 昭子

真夜中にそつと置いとく野良の餌
ごめんねと言つて生魚料理する
退職を目の前にして油断する
彼岸花律儀に彼岸の日に咲いた
炊きたての新米卵一個で良い

大阪市 清水 絹子

力まずに弛まず今日の朝歩き
聞き違い思いちがいの老いの所為
差し出口大きな川に音はない
花談義誘いさそわれ裏長屋
独り舞台の老いも苦手は稲光

大阪市 小谷 集一

ケイタイへ一―九をセットする
年金で種も仕掛もない暮し
胡蝶蘭美人姉妹のように咲く
薄化粧菊一輪の美しさ

墓碑開眼土に帰って行く命(弟の墓地で)

大阪市 町田 達子

それなりの元氣出ました秋風に
弱った足がどうも氣になる散歩道
家いえのブランターの花眺め行く
香煙が絶えぬ堤の地蔵さま
千人塚の由来を今日も読んでいる

大阪市 渡部 さと美

引越しもよかったおもう捨て上手
お酒からチュウハイ刺し身ほしがらぬ
星に裁かれているのか眠れない
離婚多多母性愛まで捨てないで
北のカニだったんかいな旅みやげ

和泉市 西岡 洛醉

秋空の晴天少し腰伸ばし
まだ夢を追いつけようぞ八十路其処
多数決唯好きという票も有り
青春の欠片残して遅々進む
細々と余命薬包友として

和泉市 横山捷也

のどあめをコロコロ鳴らす伏した母
長ぐつと軍手で夕日をあとにする

無農薬野菜育てる老いの意地

古門に狂ったように絡む鳶

やさしさに早合点した独り者

泉佐野市 山本蛙城

誰が何と言おうと性善説でいる

和の国のせいか談合消え去らず

カラオケのマイク軍歌にや回さない

ダイエットキャベツ噛む顔虫に似て

猫舌へたこやきの舟軽く着き

茨木市 藤井正雄

左遷地の孤独地酒に癒される

残念会皿に反省てんこ盛り

作られた笑顔の裏にある嫉妬

解釈を変えて身内に甘い処置

二度の職泳法変える菜っ葉服

大阪狭山市 矢野梓

栗ご飯二人の秋を食べている

ナツメロをしんみりと聴く秋の夜

秋の空妻の機嫌もよく変わり

クラス会モノクロ写真語り合う

明日がまだであると命を疑わず

交野市 田岡九好

嬉しさは親王様と呼べること

冥王星かめへんもとと拗ねている

持つて逝けぬは貧乏人の僻みなり

おばあちゃんちよこんと乗った専用車

買い置ききのポマード要らんようになり

交野市 山川日出子

先ず政府美しくして安倍首相

初恋の花言葉です金木犀

ケイタイで漢字にがての若い脳

古い本分っちゃいるけど捨てられん

杉の葉が風呂の焚き付け山の寺

交野市 森本弘風

ストレスへ昭和メロディー聞いている

シニアには時流に乗れる服がない

医療費の負担増えても待たされる

手を組んでタラップ降りる安倍首相

核はいや松茸あさり我慢する

河内長野市 村上直樹

骨の髄搾ればきつと酒の汁

年金が絡んで夫婦もめだした

泣くときは羽二重餅の母の胸

吹けば飛ぶ歩に成金の意地がある

雪も耐え日本一の高野槇

河内長野市 坂上淳司

目の前は幸か不幸か臍ルック

目の前のお臍が僕を睨み出す

見てならぬもの見たような臍ルック

これ以上見てると罪になるお臍

雷公も食傷気味の臍ルック

河内長野市 井上喜酔

秋日和ほくほくしてる稲の波

サンマ焼く匂いうれしい秋の風

言い訳をやつとこらえたのど仏

少子化の村で淋しい曼珠沙華

足が出て財布びっくり美味しい酒

河内長野市 水谷正子

どないしよう返事に返事またくれた

水溜り飛ぶ事もなく子ら育つ

金木犀君の出番を待っていた

ばんばんの総理を守る古議員

土壇場で夫の戒名出て来ない

河内長野市 植村喜代

潮騒に浮輪をもつて走った日

沈むまで見ていた夕日泣きながら

ゆつくりと花は開いてこの世見る

病院で待った時間に寝付きよい

風呂敷包み提げてる人は見掛けない

岸和田市 井伊東吉

秋ですと金木犀が念を押す

出展に追われ追われの文化祭

ナイターが終り喜ぶ妻がいる

補充せぬ不安の中タイガース

美しい国呼ばわりに策が無い

岸和田市 岩佐ダン吉

万歳をしながら謀反考える

右左器用に泳ぐ舌を持つ

九条を守るスタミナ厭わない

惚けてきた丸くなつたと言われてる

汗だくの日だった丸をやる

岸和田市 原さよ子

母の歳越えても母を恋うている

萩咲けば回り道する女連れ

医療高ひびく余生に増す不安

すかたんを笑いすかたんする私

名月に背中丸い影二つ

岸和田市 土橋房枝

拝啓もかしこもメール書いてない

一行詩短い中に愛がある

昔ふうと言われた祖母の良い羨

落ち椿枯れることなく命たつ

サロンパス仁丹匂う川柳会

岸和田市 森 元 ふみよ

山坂や嵐も耐えて喜寿祝う
目を覆う惨事の並ぶ朝刊よ
感謝する亡母の口癖身に沁みる
身の丈に合った暮しを心掛け
幼児期の躰が大事親を見る

岸和田市 堤 梢 代

適当にやきもちやかせる夫が好き
名案はすぐにしなけりやすく忘れ
やわらかく包んでくれる人がいい
奥ゆかしやつぱり育ちあらそえぬ
遊ぶことやさしいようでもずかしい

岸和田市 雪 本 珠子

野良猫といつもの場所で待ち合わせ
雑学で自分の世界広げて
ほめ言葉人に元気を与えて
鉛なめておばちゃんの輪に仲間入り
無理せずに泣きたい時は泣けばよい

堺市 加 島 由 一

携帯をマナーモードで乗る電車
本日はダイヤモンドを贈りたい
息子まだ判のこわさを理解せず
神は気まぐれ油断めさるなロスタイム
一年が静かによぎる除夜の鐘

堺市 近 藤 豊 子

あさがおの棚のあいまへ月がでた
駆けてくる鞍馬天狗へ拍手した
勝海舟父と添い寝の幼き日
毬をつく良寛さんへあつまる児
山上憶良にきけば子は宝

堺市 柿 花 和 夫

鳩尾で男は過去を飼い慣らす
ピエロでも鬼でもすぐに出せますよ
妻と嫁の談合らしい模様替え
としよりを真綿でしめる美し国
車椅子を親守歌で押してゆく

堺市 齋 藤 さくら

結婚かひとりが楽か答え出ぬ
すつびんの時に限ってチャイム鳴り
思うほど誰も私を見ていない
遊んでも夫婦のルール破らない
ステッキが白いお皿で畏まり

堺市 源 田 八千代

運動会の花形である六年生
太った子も痩せた子も皆力出す
応援の祖母にあげたい金メダル
仏壇へ御萩と御茶のおもてなし
空海の御霊と会いに奥の院

堺市志田千代

お節料理歓喜の歌を聞きながら
碁敵の住職さんが来てくれる
妻にするには美人すぎると諦めた
御身大事に茶断ちなんかはもうしない
ごゆっくりと言われゆっくりしてなさる

堺市和田つづや

素朴だが妻の料理は口に合う
口癖はごめんなさいとありがとう
鏡台の前が一番くつろげる
弱味見せ合って夫婦の和を保つ
感謝して生きて生まれた価値を知る

堺市宮本かりん

ほんわかと漂う空気あったかい
緊張が解けて頬つべもゆるみだし
兄弟の中ほど辺り皺がより
気合い入れてもやはり変らぬシルエット
今更にこの世だんだん早送り

堺市矢倉五月

古傷があつて親身に助言する
年の差があり過ぎ恋と気がつかず
まだ演技してます結婚七年目
白無垢でなくても君の色でいい
球場の青いハンカチからドラマ

堺市奥時雄

言われてストレス言えないでストレス
ストレスの種が夫婦を往き来する
あの人のどこが堅物なんですか
パソコンの奥に潜んでいる悪魔
白旗はいつでも出せるようになり

堺市石堂潤子

盆よりも真珠のような今日の月
薔薇の香はデザートおむすびが旨い
天寿とは何小さき子等遺されて
高層のビルより都会明け初むる
米食べて下さい米が叫んでる

堺市山本半銭

絵手紙を飾るスペース拵えた
不意の客へ奥の手があるお母さん
現実を直視ばかりで生きたらぬ
ちちははを近くに思う昼の月
チャンネルを独り占めして秋更ける

堺市西村りつえ

彼岸参り帰りは旨いくるみ餅
美人でも心のブスが許せない
突きはなす自信がなくて重い肩
腹立ちを酔えば言いそで席を立ち
何万の御節手が出ず作ります

四條畷市 吉岡 修

家中の明るさ持つて孫嫁ぐ

冗談でこんなこと言うわけがない

三代目他人が継いだ方が無事

ほどほどにやめてよかった趣味もある

切った腹見舞に行つて見届ける

吹田市 穴吹 尚士

安かったと妻が言うてるニューモード

妻だけはずつと味方と思ひ込み

お絵描きのように美人に塗り上げる

はじめての浮気に妻の起訴猶予

居酒屋の軒に真つ赤な誘蛾灯

吹田市 瀬戸 まさよ

何千回見てもいいねえ秋の空

ほくほくの芋味わつた懐かしさ

美味という蕎麦屋時間のかかること

広告のモデル外人多すぎる

ベストセラーが残るとは限らない

吹田市 大谷 篤子

うちの音うちの匂いで旅終る

番傘がしつぱり似合う旅の宿

靴のひも締めてしゃきつと旅に出る

ぶつかった良心抱いてふて寝する

おしゃべりで癒されていく気の病

吹田市 早川 棲世

英雄が欲しい世だけど民主主義

DP屋式までもめたこと知らず

男四十評価結局マネー力

戦前の思い出に路地子があふれ

シャンソンの歌詞を訳せばほほ情痴

吹田市 太田 昭

生温いビールに今日も裏切られ

しがみ付くために握力強くする

臆病な舌が沈黙ぶち破る

あほな大臣就いて役人つけあがる

振り向けば裸身の月がついて来る

吹田市 木下 敏子

切り替えた頭で嫁の知恵借りる

無理せず嫁姑のティータイム

誕生日歳は忘れて切るケーキ

誘われる内が花よと秋の蝶

平凡に生きるバランスよく食べて

吹田市 須磨 活恵

味方だと勝手に思っていた不覚

ヴィオロンが聞こえてきそう秋日和

秋茄子の田楽娘婿も孫も好き

平凡も幸せのうち栗ごはん

夫の背の丸み心のまるみかも

吹田市 野下之男

さりげなく毛並みの良さで勝負する
マスコミが美味しく食べるスキヤンダル
赤い糸手繰り寄せたら今の妻
面影を見ればあちらも振り返り
カルガモも親の背中を見て育つ

高石市 浅野房子

歯医者さん前歯二本も抜きはった
カード破棄この世の未練断つように
お二人にピタリ差引ゼロの過去
口だけの男に合わす事はない
個性的少し変っているらしい

高槻市 瀧本きよし

姿見が我慢できずに笑い出す
子の顔を見るとかあさんすぐ判る
天命がまだ聞こえずに生きている
いよいよが来たのか間魔機嫌よい
兄ちゃんと言われているがひとりっ子

高槻市 左右田 泰雄

真実を語る瞳は生きている
ふんぎりがつかず来た道引き返す
凜として姿勢を正す自負の顔
一言を言えず未練の別れ際
飲み込みが早い男の勘違い

高槻市 富田 美義

こだわりを破る暮らしが来る老後
これしきを喜ぶ妻の指ひかり
漂えば他人の裏側見えてくる
義理ひとつ欠いた一日長かった
生き下手が小さい正義抱いている

高槻市 西谷 治三郎

ヘルパーは掃除機ばあちゃん雑巾で
ワンちゃんの協力を得てウォーキング
百薬の長のお蔭で生き延びる
クジなんぞ当たたらぬ俺に役当たる
訃報欄見てわが歳と比較する

高槻市 生田 義一

数々の迷言残し総理去る
国技だよ見ちゃいられない日本勢
ゴール前猛虎のダッシュ竜とらえ
むざむざと逝ってたまるかこの病
人という字で支え合う老い二人

高槻市 執行 稲子

正直に塗れば佗しい雨の画帳
無愛想はストレスらしい堪忍な
あいつには上等過ぎる妻がいる
皇室もじいじばあばの皴と笑み
忘れてた腹八分という薬

高槻市 佐 甲 昭 二

梅雨ごもり妻と始める無言劇
くたびれた仮面を洗う定年日
がぶ飲みのラムネ昔の音がする
雨の音疑い深くなる予報
もの言わぬ妻の背中が怒ってる

高槻市 井 上 照 子

精霊を流し私の夏がゆく
心変り学ぶと決めた十七歳
面接へ容姿端麗鏡みる
理解度が浅くて文書読み切れぬ
身銭切りだまって幹事役果す

高槻市 傍 島 克 治

一聞いて十知りやこんな苦勞せぬ
嫌な奴嘘と知りつつ誉めちぎる
席譲られることが増えだし老い進む
病床の夢酒池肉林でご満悦
若返りの本を読むのが遅かった

高槻市 大 崎 侑 子

温暖化日本沈没あり得べし
政治家は煙幕かけた資産見せ
失言を取り繕って煙に巻く
熱心な父兄教師は煙たがり
竹島も油田も日本後手ばかり

高槻市 杉 本 義 昭

流れ星あんなにきれいに終りたい
ベルシャ猫見向きもしない安い餌
言い過ぎて悔やむ心が和を作り
面接に母親やけに厚化粧
淡い恋潮引く音に傷ついて

高槻市 乙 倉 武 史

核実験狂気の沙汰は金正日
謙譲の美德健気なハルウララ
ハルウララ似たりよったりだぶる吾
ハンカチの王子さわやか女の目
笑わしてなんば愉快な職もあり

豊中市 安 藤 寿 美 子

誕生日回転寿司に孫集め
幸せやねえと小馬鹿にされている
八十過ぎ同窓会もとんちんかん
この会は認知症らのリハビリか
秋風に涙阪神最終戦

豊中市 吉 田 あ ず き

澄みきった秋を汚すなミサイルで
秋の味覚何はともあれ菌の治療
駅弁展また郷愁が沸沸と
懐手ほどいて迷いから覚める
友の輪で笑い袋を満タンに

豊中市 江見見清

眼が泳ぐ隠した事があるらしい
立ち泳ぎして日和見に徹してる
登りつめた先に待ってた詫びの席
それぞれのアングルに住む坂の街
半月のドラマは実話甲子園

豊中市 藤井則彦

戸が開いたままのトイレに猫がおり
細腕に飼い馴らされて走る驚馬
寝そべってみたいふんわり雲の海
気紛れな煙を寄越すどんど焼き
定年になって玉子を割れました

豊中市 山門タミ

七十年昔の歌を思い出し
我が影と欲の皮だけついてくる
赤ちゃんの百面相を見て飽かず
浮き雲はいつの間にやら別れてた
雲間から祭り囃が聞えくる

豊中市 岸田知香子

大声で二度言う老いの耳険し
二人して足して二で割り一人前
八十路でも現役通す店の顔
あれこれと身辺整理バザー行き
歩けぬ身ツアーのチラシ素通りす

豊中市 水野黒兔

聞き上手相手の気持わかまえる
お互いに惚けたふりしてほけを聞く
週末のオフィス街に月ぼつん
改革はどうあれポスト赤のまま
高階の風は下界と別のもの

富田林市 藤田泰子

気休めに鰯のあたま拝んどく
秋風が詩的気分にしてくれる
体調のいい日はジツとしておれぬ
雷が落ちてすつきりした心
聞かれてもないのに喋るブライバシー

富田林市 中井アキ

狙ってるズボンにサイズ問われてる
迷い続けて仰山皿を割っている
白百合のエロスに負けてばかりいる
住み慣れた町にも飴と鞭がある
もろもろを許し大きな川になる

富田林市 大橋鐘造

好き嫌いなくて淋しい舌音痴
被る気はないが抱いてる鬼の面
晩成を果せば変わる風の向き
分の厚いカルテ私の日記帳
いい話落ちが後からついてくる

富田林市 片岡 智恵子

よく笑った日は夕食に手間をかけ
愛憎を綴る夫婦の五十年

悪い平和もよい戦争も世には無い

雨で延びた運動会は気合い抜け

声変り孫はお喋りしなくなり

寝屋川市 江口 度

また買って百円ライターばかりため

集会の帰りにまた僕の靴がない

何してるのか時々息子帰らない

犬逃げてまた保健所にとりに行く

夜道行くいつもの道でまた転び

寝屋川市 平松 かすみ

ギネスまで約束したに黄泉の国(紫香先生を偲び 5句)

指の骨折れてやんわりする握手

バイキングご一緒させて戴いた

手土産を提げて寝屋川句会まで

葬送は奇しくも私の誕生日

寝屋川市 森 茜

戦止むつかの間子等はボール蹴る

明日こそ待ってた新芽ついばまれ

ばつちりと老眼見開くことにする

実年齢より白髪上に見られてる

運動会の太鼓ひびいて小雨降る

寝屋川市 籠島 恵子

爪を切るテネシーワルツ聞きながら

その内に外出禁止令の酒

抵抗をすると話が長くなる

鏡見るたびに年輪刻まれる

秋茄子や人の話は聞いてみる

寝屋川市 坂上 高栄

炎天に河童の皿も干上がつて

一病に先を越されて踏み迷う

点滴で河童の皿を潤わす

秋晴れに稲穂ますます頭垂れ

持て余すほどのやんちゃが頼もしい

寝屋川市 富山 ルイ子

百までの祈りかなわず師の逝去

隠岐しかの和歌山香川師のお供

昼食は何時もうなぎをお相伴

お別れの焼香写真何時までも

塔の句座あの世でわたしお茶係

寝屋川市 太田 とし子

日本海風いで無気味な風が吹く

世界は一つ五輪の旗は見栄を張り

幾年の不幸を詫びるうす煙

大衆の中に響かそ雑魚の声

紅葉に酷暑忘れた汗を拭く

羽曳野市 吉川 寿美

女は海ときに男を溺れさす
他人だな後で鍵のかける音
小ざかしい舌の先から冬になる
なりゆきで傘さしかける羽目になり
抽出しの奥に過去形つめてある

羽曳野市 徳山 みつこ

この星の核よイチニのサンでゼロ
この先はいわずにおこうアドバイス
いつとんでくるかも知れぬ流れ弾
愛してるけれど命はあげられぬ
つっぱった欲あざわらうハズレ籤

羽曳野市 安芸田 泰子

翔んでいる目には見えないかすみ網
死後の見栄少し貯金を残さねば
頷いただけで味方にされている
眠られぬ耳に朝刊配る音
車椅子足の歩幅を恋しがる

羽曳野市 酒井 一壺

心境の変化があつて夢を変え
音楽へ国境のないすばらしさ
抜擢へひとりでそつと前祝い
披露宴決まり文句が多すぎる
芸人の子供一つも芸がない

羽曳野市 三好 専平

コスモスの花に愛され無人駅
コマクサに狂い恋した山男
臍まがりの胡瓜も愛に飢えている
毒虫に刺された首を草が愛で
甲乙丙丁愛の温みを忘れない

阪南市 森村 美花

紅葉に魅せられ年金はたいてゐる
半生が過ぎた今でもまだ悩む
温泉に元気の素が浮いている
蒸かしたての芋がお隣から届く
青空に癒され元気もらう朝

東大阪市 谷口 義

夜だから眠くないけど寝る姿勢
NHKばかり見ている昼の月
溜飲が下がると血圧も下がる
昨日よりちよつと気が急ぐ十二月
押入れの掃除している文化の日

東大阪市 笠井 欣子

あれやこれ揉めごと聞いて胃が痛む
年金に寿貧乏続く秋
八十年離れずついてきたほくら
朝ドラの市電懐かし通学路
自転車に颯爽と乗りこぶ作る

東大阪市 北村 賢子

柿の実が熟れて漂う赤トンボ
人としてプライド捨てず生きている
今更と思えど顔のマッサージ
セピア色の家族の写真あたたかい
嬉しいことにまだ忙しいカレンダー

東大阪市 安永 春

訳ありの本ずらり並んで御座候
イオンいっぱい身に浴びながら木曾の山
蹟いた石に苦情は言いまへん
お芋さん大好き昔思ひ出す
カリスマのカットに通う美容室

東大阪市 米田 水昇

ドラフトで金の卵が売れていく
人が皆怪しく見える夜の道
魚拓でき釣り手も鯛もいばってる
満月の光煩惱消えていく
月見酒私は乙女になりました

東大阪市 佐々木 満作

使用中なのに何度もノックされ
仲間から外された星しよげている
長男の特権重荷相半ば
ぶつかって思いの総て吐いてみる
名月も地球の病憂慮する

枚方市 海老池 洋

印相はよいがお金が貯まらない
掘り返し疲れた土を喜ばす
クモの巣に強度偽装の見当たらぬ
夢の字もだんだん薄くなる老後
相傘で一寸拌んで法善寺

枚方市 宮川 珠笑

わが母はホームに任かせ島の女医
それぞれが空気のように大家族
退院をしたらごろごろせんといて
蝶になるまでを毛虫につらい日日
血管が皆萎縮する注射針

枚方市 寺川 弘一

人生ドラマ悲劇は誰も選ばない
ジंकスを無視した夜は眠れない
満月の夜だが僕は眠いだけ
仏壇の奥ご先祖様が生きている
ばあちゃんの財布筆筒の奥にある

枚方市 安達 忠央

海鳴りに特攻隊の鳴咽聞き
釣り三昧海の魔性も友にする
潮騒に夕日メルヘン語りだし
海原に心の広い母偲ぶ
湯煙に皆善人の顔になり

枚方市 伊達郁夫

許すのが疲れ果てたという別離
あの名医癌になったという寒さ
ストレスを捨てに来たよと戸を叩く
お互いが周りを見てる多数決
善人にされた仮面が重くなる

枚方市 二宮山久

幸せを祈り元気に衣更え
年金へやつと慣れたと愚痴が出る
食卓に並んだ秋へすすむ酒
夫婦して元氣そのもの趣味多忙
過去などは振りかえない六十坂

枚方市 丹後屋肇

名月がビルの隙間を這い上る
アイデアを公募している遊休地
もうあかんまだいけませ古希談義
はたかれて死んだ振りする虫の知恵
嘴が小分けしている岩の驚

枚方市 森本節子

菊人形消えて淋しい菊の町
悠悠と深夜の線路狸行く(東京)
コレステロール数値が下がり卵買う
戒名と俗名まぜておがんでる
出ぬ月にお団子だけをそっと供え

藤井寺市 高田美代子

競走馬ゆつくり歩きたいだらう
時々は吠える忘れていないかと
満足が続くとお祈りをわすれ
診察券持たず主治医へフリーパス
リタイアを奨めるもう一人のわたし

藤井寺市 鴨谷瑠美子

石ひとつ沈めて亀を飼っている
無防備な鳩がわたしの前歩く
すぐ好きと嫌いに分ける癖がある
息抜きの旅でひとつの区切りつけ
紙吹雪たかが番号一つの差

藤井寺市 太田扶美代

駐輪場ここから仰ぐ月が好き
何の毒こんなきれいな彼岸花
新聞のチラシは秋のプロローグ
アイスクリーム泣きたい時によく食べる
山は今赤い実青い実黄色い実

藤井寺市 鈴木いさお

まだ欲があり過ぎる身をもて余す
正信偈空んじている認知症
通リゃんせ怖い鬼など居ぬ彼岸
最初はグーそのあと君はいつもチヨキ
玉手箱開けた煩惱責められぬ

藤井寺市 中島志洋

八尾市 宮崎シマ子

背伸びして生きる人生肩が凝り

若作り女心に歳はない

私には過ぎたお方と断わられ

道ならぬ恋信号は黄のまま

正直に映る鏡が氣にいらぬ

藤井寺市 若松雅枝

真心が通じたらしい笑顔湧く

やわらかい笑顔で敵を作らない

不器用な人だが心真つ直ぐだ

安心のために保険に入ってる

カルチャーに生き甲斐見付け皆勤賞

箕面市 出口セツ子

姉よりも優しい人に助けられ

手のかかる夫で子らが耐えている

粗大ゴミより面倒な夫です

人が好き生きるパワーになっている

明日だけを見つめて迷い振りはらう

守口市 井上桂作

恙なくゴミは今でもよく溜る

コスモスの匂い漂う休耕田

エンピツで古典をなぞるもどかしさ

倫理観子供の陰に親があり

まあまあとお咎めなしの老い侘し

彼岸花砦のように田を守る

さわやかな秋を落した青い空

田を割って蝗とびだす耕運機

降るほどの縁談なんてなかったよ

田の神にあげる地元でできた酒

八尾市 高杉千歩

そつと置くひとりぼっちの箸の音

自販機のおつういお茶をボケットに

銀杏の黄秋は明るい御堂筋

風と肩組んで師走のネオン街

台風の進路逢いたい人がいて

八尾市 長谷川春蘭

たち切れぬ想いが咲かすまんじゅしやげ

枝豆が届いて里の兄達者

缶ビール冷やして聞いてほしいこと

七夕の雨にぬれたる娘の願い

約束を破って秋の空青し

八尾市 吉村一風

甘くみた雑魚に本音を叩かれる

残り火を抱いてじつくり妻と酌む

新聞もむずかしくなるカタカナ語

恨みっこ無しのジャンケンいつも負け

暮らしむき中の下でいい気が張らぬ

八尾市 山本 宏 至

決心が唇へんでふるえてる

スランプを抜けた男のいい笑顔

金婚の夢はハワイで結びます

侘しきは埃をためて咲く造花

出鱈目な鼻唄が出る上天気

八尾市 村上 ミツ子

敬語見直し頭こんがらかつてくる

ファンサービス青いハンカチ汗を拭く

夢でよかつたがぶりと猫にかまれ

疑うと周りにひとがいなくなる

スランプの時にバタバタ動かない

大阪府 初山 隆盛

季はめぐり笑う山から燃える山

彼岸花多情多恨の色に燃え

ドラフトも戦力外も載る活字

ダイエツト秋の味覚と相撲取る

センセイと素直にお呼びできる人

大阪府 米澤 俣子

恥じらいという美しい日本語

他愛ない噂ふりまく風媒花

きれいごとつまるところは金でチョン

情実が絡み判断定まらず

ここは今わたしが退けばよい話

大阪府 澤田 和重

根分けした花から恋が生まれそう

ユーモアに乗せた忠告アリガトウ

酔ってない時にくださいその言葉

頭数のひとりだったと後で知る

ライバルの拍手みせかけかも知れぬ

大阪府 桑田 ゆきの

猪鹿も垣跳び越えるパワー持ち

秋霜に終日飯場ジャズ掛かる

札節を教えた国が疎ましい

限定の牛井列に気が滅入る

人権をばろばろ零し臓器売り

神戸市 山口 美穂

とりあえずすることをして考えよう

老犬にひかれいつもの散歩道

肥るのにもつたいたくなくておいしくて

家庭菜園大方虫にあげている

犬も私も年相応の歩きよう

神戸市 田中 章子

長話待ちくたびれて犬の乱

ゴッホにもピカソにもなる秋盛り

ほほえみを返されなごむ畦の道

掘りたての葱の白さは裏切らぬ

パンダにもいのちをつなぐ野性の眼

神戸市 伊勢田 毅

同じ趣味持たぬ夫婦で仲が良い
欠席の友を組上にクラス会
影武者が叛旗を秘めて従いてくる
ハイハイと二度の返事にだまされる
誕生日赤飯チンで過ぎてゆく

神戸市 山田 婦美子

弱そうに見えて柳の枝折れぬ
高級車降りて買い込む値引品
閉店前紳士が弁当買いに来る
一戸建新車並べて火の車
引っぱられ犬が主人の散歩道

神戸市 山口 光久

子育てにやっぱり欲しい火の怒り
石垣は丸い石では務まらぬ
招き猫客を見送ること知らず
じゃじゃ馬の娘にも主婦業板につき
寡黙な父いつも背中タクト振る

相生市 中塚 礎石

ジャンケンポン少し遅れて負けてやる
音痴にもピアノの乱れ聞こえます
嘘みたい八十路楽しく手をつなぎ
雨の日を陰で待つてるカタツムリ
残り火にちよろちよろ風を送ってる

芦屋市 黒田 能子

穏やかな水の流れに油断する
ゼロからのスタート軽い軽い靴
くり返し情け容赦のない豪雨
ボールペン強く握ってサインする
ぼんやりと雲を眺めて小半時

尼崎市 春城 武庫坊

午後まで曇り芒飾って満月が
晴れた十六夜少年時代懐古する
金木犀にふらふらの秋蝶がまとう
常識の姿崩れる世の変化
落花落葉大地は人の温みもつ

尼崎市 春城 年代

定休日ここも倒産かと思ひ
頭のどこかが痛いと言げるギョツとする
耳鳴りが昼夜を問わずなやませる
構っていらぬかまって欲しいお年寄り
いちにちの食事段取り惚けられぬ

尼崎市 長浜 美籠

さて秋よ有情無情を秘めたまま
気の滅入る話は避ける秋の空
愛なんてはらりと橡の実が落ちる
エアポート人混みに入り旅気分
あす何があるかも知れぬ彼岸花

尼崎市 田 辺 鹿 太

弱ったな僕も傘寿の仲間入り
くすりとは縁を切りたい歩数計
草に寝て流れる雲を見るゆとり
梅地下で迷い子になる二度三度
花道はないが父権の座を降りる

尼崎市 松 下 比 ろ 志

夏は花火秋は祭りの笛太鼓
稔り田の案山子は秋の道化者
多勢に無勢言葉選んで逆らわぬ
居酒屋が並ぶと歩調乱れだす
約束は約束ですと譲らない

尼崎市 林 昭 三

解決の秘策を胸に特別機
咲く場所を律儀に決めて彼岸花
気遣いの言葉嬉しくまた寂し
丈夫な胃公共工事食った人
離婚にもこんなに多く記者が来る

尼崎市 軸 丸 勝 巳

長浜城大河ドラマに人溢れ
一豊の気分見下す城下町
千代の功買った馬市この辺り
美しい心も欲しいにほん国
飲んだら乗るな憤怒の仁王辻に立つ

伊丹市 山 崎 君 子

笑い声がん病棟のアイウエオ
窓あけて秋風さやか病棟に
その昔お米とかえた三面鏡
宅急便初生りの柿里の温み
顔の好い柿は甘いと走り書き

川西市 西 内 朋 月

千円になっても煙草ふかしてる
カーテンが黄色くなっている茶の間
押入れに封を切らない引出物
奥さんと呼びあっているおばあさん
熱爛が恋しくなってくる夜長

川西市 米 原 雪 子

トキメキはしっかり胸にたたみ込む
慎ましく生きて贅沢受け入れず
誉め上手自信持たせて送り出す
青田刈りされた世代も定年期
更衣すませて暑さ我慢する

三田市 北 野 哲 男

頼りない放っておけないお方です
煩惱は千里寄せ来る波のごと
悪筆を直す気のない診断書
買ったのと違うお焦げのにぎりめし
カロリーは書いても味は別なもの

三田市 久保田 千代

西宮市 山本 義子

もくせいの香りに小さい秋を知る
追い風に乗ってチャンスを物にする

四時代生きた白寿の証言者

この先は凭れかかれる椅子が良い
行間に心の奥が滲みでる

三田市 石原 歳子

手探りでなすび育てた貸し農園

眼が治り夫は月に見入ってる

殊の外明るく見える今日の月

笛の音に怖くなるほど鹿が来る

面白い駅名旅をもちあげる

西宮市 西口 いわゑ

人間でよかった酒のおいしい日

花も人も蕾の内が大事なり

コスモスと遊びごころを競い合う

丁度いい距離が平和を保ってる

彼岸へはゆっくり花を摘みながら

西宮市 門谷 たず子

ゆっくりと食う嫁のなさけの栗ごはん

まだ歩ける足よしばらくたのみます

生き延びるための布石を考える

くよくよはしまいわたしに歌がある

生きざまは神にまかせて秋の月

うかうかと来てうかうかと年を越す

歳時記からこぼれ落ちたる花もある

カレンダーノルマ満たさずまた明日

年暮れてやたらとくぐる寺の門

遺伝子とはつきりわかるお人好し

西宮市 亀岡 哲子

紫の名残り朝顔咲く別れ

百歳の手作り独楽をひい孫に

大根は葉っぱまで食べ元気です

うかうかと生きた私の過去惜しむ

美しい国美しく老いんかな

西宮市 牧 渕 富喜子

秋彼岸墓へとんばが来て止まり

バス降りる乗せてもらった礼を言う

街過ぎて刈田が続くほつとする

お地藏さん合併前のよだれかけ

どんぐりの落ちる音あり坂の道

西宮市 秋元 てる

靖国が政治を決める変な国

知らなんだダイオキシンの枯葉剤

おしゃべりも腹八分目も難しい

清濁を併せ呑むとは言訳だ

跳ねて見てどたりと腹を打つ鰯よ

西宮市 菊池 トミエ

萩ききよう静かな池に映つてゐる
ひっそりと世代交代夏がゆく
ぶどう園甘い香りをただよわす
爺ちゃんが孫に甘くて叱られる
無人駅見送る母は無事祈る

西宮市 片山 忠

好きなのに臆病だからツンとする
ひとりより二人のほうが全てよし
親の脛かじつて小銭ばかにする
なれ初めを女しつこく言いたがる
見に覚えあるから貝に成り済ます

西宮市 坪井 孝一

自炊の朝職場で葱の臭い消す
唯今も紙ヒコーキは自信ある
図書館の寝ている膝のスポーツ紙
根性が据つた妻と冷やの酒
酔つた夜は後悔で出るわらべ歌

西宮市 緒方 美津子

日本の秋をホクホク栗御飯
甚平の日がなごそご飯うまい
ヘルスメーターと睨めっこする秋
こわいこわい水をしっかりと飲んで寝る
ねむりたい活字詰まった本を見る

西宮市 井上 松煙

乾杯の音頭を取る年長に
八十路坂浮世に背中向けられず
D51の勇姿に老いが鼓舞される
腐葉土に生けるものみな感謝せな
五衛門風呂の煙にむせる母の影

姫路市 古川 奮水

茸類集め気楽な鍋料理
霧囲氣に負けて朗読行飛ばす
理解力だんだん落ちる認知症
靴の紐取り替え峰の霧睨む
星が降る里で紅葉の歌うたう

兵庫県 大谷 幸次郎

安い梨傷少々は我慢する
ライバルのミスでチャンスが転げ込む
乱世こそ出世のチャンス神代から
強運でピンチチャンスと入れ替わる
天命という運勢に逆らえぬ

奈良市 米田 恭昌

スペアキー返すと決めた遠火花
三浪の親の轍踏む遊び好き
年金だけの所得と知られふられてる
お互いにもたればなしで来た夫婦
サヨナラの殊勲袋叩きにあつてゐる

奈良市 天正千梢

橿原市 安土理恵

母の待つまつりに錦などいらぬ
空白を埋めるか波は打ち返す
脳みそを少し晒してみなくては
米を研ぐ良妻賢母のつらがまえ
親ばなれ落し穴には氣をつけて

生駒市 飛永ふりこ

テキーラが恋の泣き言吐き出させ
熟睡をしたら根氣が戻ります
疑うと眉間にしわが寄ってくる
鈴生りのマスカットから秋日和
伊吹山共に登った友の葬

香芝市 大内朝子

夕茜遮二無二生きた日が恋し
独り居も芋たこなんきん見て笑う
涙そうそう心きれいにしてくれる
真つ直ぐに生きているのに疎まれる
幾つもの角を曲ってつく度胸

橿原市 居谷真理子

怒らせて妻の本氣の美しさ
新しい言葉が僕を変えていく
生まれてきた甲斐人間になる戦
神さんにひよいと摘まれた突然死
ひっそりと朝刊入る通夜の家

それ以上ふくらまないでほしい嘘
片方の耳で相槌打っておく
友達以上なのになれない深い仲
老眼鏡敬遠してる厚い本
夜更しの茶漬ほろほろほぐす鮭

大和郡山市 坊農柳弘

灰汁のない言葉で世間丸く生き
反核平和レッドカードの北朝鮮
エビローグ燃えたあの夜の遠火火
八起き目でやつと本氣の靴を履く
逆らえぬ位置で氣を吐く日のピエロ

奈良県 渡辺富子

タカの爪隠しにつこりする総理
ちよい太の健康法で妻元氣
がんばらない生き方になる缶ビール
火の車押してさすらう暮れの街
運命に翻弄された母のしわ

和歌山市 木本朱夏

電子音に指図をされているようだ
猫逝つて手もちぶさたなネコジャラシ
季語のない野菜に温暖化すすむ
夕暮れになればまぶたを閉じる花
父に似た仏像に遇う秋の旅

和歌山市 川 上 大 輪

仏壇へ走るいい事あったから
一目散に逃げる私の得意技

よく動く口へ体がついてこぬ

コンビニの灯にピラニアが群れている

自由ですだから退屈しています

和歌山市 喜 田 准 一

ジャンケンでケリをつけたい時もあり

腹括り開き直っている強さ

死んだふりするから油断ならぬ人

急いで来るから生煮えで出す答

むずかしく考え過ぎて縫れ出す

和歌山市 楠 見 章 子

口下手と口下手きようも笑い合う

冗談でもちよつと芥子が効きすぎて

泣き虫を布団で飼ったことがある

とんでもないこと考える二十五時

シャルウイダンス星がわたしのパートナー

和歌山市 福 本 英 子

団塊定年日本中が濡れ落ち葉

宗教があるから世界中もめる

ケイタイで申し込まれて冷めてきた

賞罰なし噂にのったことも無い

解らない字も混ってる柳友卒寿

和歌山市 古久保 和 子

断水へ今日一日のスケジュール

フランスパンで素振りしてみる天高し

ネイルアートの指が女の発火点

久々に訪ね金木犀かおる

秋らしくしようシャツの襟立てて

和歌山市 山 口 三 千 子

気紛れな風に翻弄されている

虚と実の狭間で風の音を聴く

こつこつと貯めてとんびに攫われる

子規堂でガイドの声についていく

坊ちゃん列車乗ってはるかな日を偲ぶ

和歌山市 上 地 登 美 代

持ち前の笑顔で越えて来た苦難

陽の当る方へ向きたい虚栄心

ヒロインを演じてみたい泣き上戸

自動ドアの前で直立不動する

B面に涙の雫垂れている

和歌山市 堀 畑 靖 子

話し合ううちにケンカになりました

団塊のシニアあふれている釣り場

文系のあなたに贈る図書カード

晴れた日のソーラーハウス誇らしげ

しがらみは逃れられないクモの糸

和歌山市 玉置当代

脳細胞へ刺激与えて若返る
頭の体操孫とメールの秋夜長
受賞した喜び分ける秋の天
ストレスを溜めて飛べない迷い鳩
溜め込んで苦しくなった皮下脂肪

和歌山市 田中みね

赤鬼に出迎えられて登別
久しぶり乗る飛行機へもう子供（柳友と北海道へ）
飲酒運転なぜよと聞いてみたくなる
しゃべる飲む妻のパワーには勝てぬ
どんな気でお過ごしだろう雅子さま

和歌山市 福井桂香

若さの秘訣はときめきと感動と
娘と嫁にたつぷり食わす秋なすび
動かない冷たい左手ハグしちゃう
車椅子で世界遺産を見て回る（淡路島おのころアイランドにて）
欲捨てて心はいつもクリスタル

和歌山市 武本碧

低血圧朝をボチボチ目醒めさす
懲りもせず朱に交わって生きている
中退も出世頭で華になる
自画像へ少し画き足す手前味噌
森病んでこだまは歌を返さない

和歌山市 細川稚代

運動会主治医もパパの顔で会い
ばあちゃんのパワーではずむ道の駅
山海の珍味ならべて道の駅
思いつきり喋りストレス消えていた
一昼夜たてばなんでもない話

和歌山市 松尾和香

緞帳が上がる一世の鼓打つ
生かされる暮しにゆとり思い遣り
手加減はしない態度に母の愛
そわそわとさせるひと日の好奇心
ふるさとの夕陽が包むひとり旅

和歌山市 宮本三喜夫

親王の誕生明るい未来みえ
公約を守るつもりで検討す
少子化に追打ちかける子を殺め
酒気帯びの公務員等跡たため
話しあい美しい国願います

海南市 三宅保州

忠臣蔵今年もやはり観てしまふ
ゼニカネじゃねえと大見得切りたいが
消印有効その消印がわからない
誤って斬ってしまった斬られ役
抜き差しのならぬところへ内視鏡

海南市 堂上泰女

活火山今日も休まず燃えている
早寝早起き夏の疲れを整える
放し飼いのコケコッコーで覚める旅
西郷の気概と情を追う旅路
朝食は玄米昼を抜く旅路

鳥取市 下田茂登子

古希過ぎて三猿になる道選ぶ
言い合つて持つて行き場のないところ
出したい人に書けぬ手紙が胸にあり
仲の良い夫婦も腹の底見えぬ
正直で他人の言葉すぐ受ける

鳥取市 武田帆雀

牛の角正すに似たり菊を裂く
めしは忘れて酒は飲む菊の虫
猟銃会会長熊のような髭
政治家のアクセサリーか赤い羽根
切り口を変えて詰める野党たち

鳥取市 植田一京

よろしくと任せられ戦はじまった
一つ山越せばも一つ山があり
活気ある貴方の後を従いてゆく
食欲の秋食べるもの皆うまい
半生を語ればドラマめいてくる

鳥取市 福西茶子

来客を帰し質素な膳づく
ジャジャ馬の妻が最近おとなしい
猛犬にされてしまったマルチーズ
引継書渡しすべてを忘れます
壁飾り亡母の着物が甦る

鳥取市 有沢せつ子

二世帯をつなぐ廊下がよく光る
気が付くと十三歳に背を越され
あつさりと捨てて押入れ軽くなり
苗植えて夜半にやさし雨の音
まず犬へ挨拶をしてチャイム押す

鳥取市 平尾菜美

マンネリの目覚し孫が起きてこぬ
逆らえぬ暑さただただうなだれる
台風へよく泣く虫の習慣病
嬰鏢と生きて私が逝ったなら
落ちこんだ我慢かかえて笑つてる

鳥取市 倉益一瑠

鼻の先こすただだけの青い鳥
クレオパトラの鼻には男運がない
決断を促すように茶柱よ
一徹な父です暗示など効かぬ
金運の鼻です胡座かいてます

鳥取市 奥谷彩子

遍路旅重ね人間丸くする
楷書から草書へ生きざま考える
婦巢性老母待つ里の土橋行く
一つ覚え一つ忘れて今日終える
追い風に走り続けている余生

鳥取市 近藤佳子

人恋うる彩よ華麗な彼岸花
彼岸花生きよ生きよと燃えている
八十路坂歩むも神のお導き
今生のお願い神より向いて
閻魔帳に私の逝く日書いてあり

鳥取市 岸本孝子

運のいい奴だと努力認めない
芋粥が昔話に顔を出す
惚けるのを怖がるうちは大丈夫
長生きも二人ならこそ喜べる
上を見ず分相応と決めて生き

鳥取市 岸本宏章

手と口で治す名医が混んでいる
空腹のときの思案に刺がある
お節介勝手に恩を売りがる
年金が我慢がまんと言ひ聞かす
医療費を思うと病気にもなれぬ

鳥取市 永原昌鼓

約束を果たしに鶴はやって来る
心配の種あちこちに撒いてある
頑張った汗には結果ついて来る
下手な字に心こもった祖母のふみ
ごめんねの一言氷とけて行く

鳥取市 太田幸枝

老化防止食事大事とおもいきり
庭木屋が真夏ばつさり持ち去つて
ジंकスを南無阿弥陀仏追い払う
藁葺き屋根昔ばなしを思い出す
子育てと野菜づくりも愛情と

鳥取市 小谷孝美

思春期の子は親よりも友求め
着メロが鳴らず孤独に生きている
子の前で母は悲しい顔見せぬ
移りゆく季節心は置きざりに
心から笑うとお腹すいてくる

鳥取市 山本益子

お愛想にまた万札が消えて行く
尻込みに出番を逃す甘えんぼ
いつまでも子供扱い抜けぬ母
平和の中悪戯風は忍び込む
まばろしの恐竜を追う日本人

鳥取市 西村 黙光

腰痛が散歩をせよと唆かす
腰痛が運転免許取り上げる
腰痛で疎遠になった縄暖簾
腰痛へ愛想の悪い汽車やバス
テレビ見て腰痛体操やって見る

鳥取市 吉田 弘子

一服の清涼剤に空の青
涼雨からいつの間に長雨へ秋
燃えるもの未だ抱えている古希の視野
揃い踏みする土俵にも多国籍
国宝が観光コース担つてる

鳥取市 埴 寛子

描けども書けどひねれどこんなもの
絵と句と書よりそう道の遠いこと
お元氣ねホントにまでは余計です
取材受け載った女性史これワタシ
いつだって腹の底からどっこいしょ

鳥取市 録 沢 風花

日本を壊してしまいたいそんな風
ふる里の友から届く秋の幸
飼猫に定期検診はがき来る
気温差の我慢が辛くなる老後
未来よりあすの我が身を考える

鳥取市 福田 登美

人間のよろさ明日が読みきれぬ
緑内障眼圧上るのが怖い
世相には疎いが丸く生きている
長生きの秘訣と聞けばメモを取る
夢買って夢がうら切る宝くじ

鳥取市 中村 金祥

シングルの老母を氣遣う秋になる
バーコードみたいな髪を整える
同じこと何度も言うなカーナビよ
金婚へ妻のカーナビまだ錆びぬ
凡人で良かった今日も生きている

鳥取市 富山 檳榔樹

木枯らしが冬の前ぶれ流し歌
ワンチャンス見事活かして花開く
もう飲まぬうっかり言つて昨日ごと
幸せの余生伸よく土に生き
幸運は努力が結ぶクローバー

鳥取市 西川 和子

夕べ見た夢と同じ事に遭う
コマーション画廊に足を向けさせる
古希の坂まだ世渡りに蹴躓く
叩かれても跡は見せない塗り上手
要介護からまれ地域に見守られ

鳥取市 加藤 茶人

犬だけが迎えてくれるすきま風
見なければ腹も立つまい冷えた仲
弱り目に祟り目おできまで潰れ
美味いなら美味いと言っておとうちゃん
子の電話良からぬ事がふとよぎる

鳥取市 夏目 一粹

生き直すために心を入れ変える
僧にでもなつてあの世を知つておく
三十秒祈つた君の胸のうち
やさしさに弱いわたしはちろろ虫
心配があると感動などむなし

鳥取市 田村 邦昭

寿の群れが少子化考える
もはや喜寿足跡だけは残したい
年金に飼われていても妻の旅
いい人と言われて見れば好きになる
選択の自由が道を迷わせる

鳥取市 土橋 睦子

短くてピリツと味のある祝辞
風やんで私の個性弾け出す
老人が誇大妄想して困る
二の足を踏んでいるのは私かも
帳尻をひねくり回す年の暮れ

鳥取市 土橋 はるお

紅白の餅搗くチャンス早く来い
花よりもだんごの方にあこがれる
あこがれの男大酒飲みだった
タツチの差チャンスを掴み損なつた
太陽を食べたフルーツおいしいよ

鳥取市 福島 庸二

君だけとそつと耳打ち皆知る
百円に山ほど願ひ鈴鳴らす
休日は何故か脳が活発化
今の子は送り迎へもVIPなみ
生き方を大きく変えた良き出会い

鳥取市 山宮 愛恵

ジョギングのコースに捨てて負のかけら
後悔の涙夜中に起きてくる
趣味多忙七十歳もひた走る
最終のバスに今から乗るところ
ラストダンスやっぱりあなたしかいない

鳥取市 上田 俊路

核もてば天下をとつたつもりらし
飽食がもつたいないを死語にする
天皇と同じ病といわれても
この激痛お医者様でもわかるまい
まだ死ねぬ入院で絶つ酒煙草

鳥取市 鈴木 公弘

コスモスのとりこになった小半時

二千円札たまに回ってきても困り

初対面みたい素顔の歯医者さん

舞い終えたものあり秋のお葬式

お隣はいいな花嫁さんが来る

鳥取市 田中 瞳子

錆びぬ間に脳細胞を研いでおく

約款は後ろめたさか小さい文字

ケイタイも一服したい電池切れ

お日さまを空と海とで半分こ

悪さする子供はみんな目立ちたい

鳥取市 宮脇 道子

彼岸花並んで咲くと秋の風

萩咲いて母の命日教えられ

さわやかな秋風共に痛む足

秋口に山の草木も色気付く

草花に認知症なくチャント咲く

鳥取市 春木 圭一郎

正直に自分認めて楽になる

ほしいもの相手になって考える

損得を抜きにやさしくしてあげる

優しさと醜いところ併せ持つ

やさしさと強さに今もあこがれる

倉吉市 米田 幸子

鳥になり故郷の森に舞い戻る

姑をへこますことはもう止そう

服装は豪華財布はスカンピン

恩返しするのを鶴に教わった

泥棒が密かに家の下見する

倉吉市 松本 よしえ

ケイタイは便利だねえと蝸牛

終身保険子等にはちゃんと見せておく

保険屋がいい事ばかり並べ立て

ポーナスが出たかと孫にそつと聞く

造花かも病院の花のぞき込む

倉吉市 牧野 芳光

老人の容れものがない大都会

絵に描いたような並木がある都会

人間を見下ろしている町の鳥

人を恋うと天はますます高くなる

恋という万能薬を探している

倉吉市 猪川 由美子

損得が一瞬間かすめゆき

切り換えが遅くストレス溜まり込む

物心のバランス狂い道迷う

むかし赤いまハンカチは清流行り

飲め飲めと水摂り過ぎも毒だとさ

倉吉市 山本玲子

世代交代華やいできた台所

見せたくもあり見せたくもない厨

大安吉日何をしようが太平楽

ご免ねといいつつ萩の枝くくる

マニキュアの指ためらわぬつまみ食い

倉吉市 山中康子

告白をこころ静かに聞いてやる

盲点をつかれ力んでいる拳

奥さんがやさしく酒を注いでいる

薬より摩る情けが堪らない

ナマケモノわたしの檻と似ています

米子市 政岡日枝子

平野の下に卑弥呼の刻が眠ってる

先祖いて無視の出来ない小さい杜

野仏に守られ村は深く寝る

のこのこと世過ぎ身過ぎのやせ蛙

ぐらぐらを持ちこたえてる祖父の釘

米子市 門脇晶子

大腦がまろやかになるボケの花

ふとん干すみじかい秋にせかされて

青空は私を洗う洗濯機

毎朝の鏡 私に訓示する

夕立にあった背中を干してやる

米子市 青戸田鶴

満天の星には祈ることばかり

頑迷やもろさ哀しさばかりもつ

袋小路ぬけてやさしくなっている

難病をのりこえた友励まそう

コスモスはゆれず秋空高く澄む

米子市 木村春枝

掛軸をまた巻き直す床の四季

裏表知り合う友が遠くゆく

童謡に昔を追って歌う会

憂さが晴れ新しい憂さしのび寄る

核実験魚気になる日本海

米子市 中井ゆき

空港で心はすでにエトランゼ

空の風どんな出逢いをくれるやら

どん帳が下りてしばらく無我の境

赤道の夕陽ボロボロ涙でる

ころばぬようそれが主治医の口ぐせに

米子市 林瑞枝

雪踏んで遠い民話を手の平に

運氣上昇ラッキーカーラーは金色に

葉が散って愛のあかしの芽が覗く

大山の御蔭でそれたハリケーン

涙の川幾度か渡る人生譜

米子市 白根ふみ

鳥取県 竹信照彦

町内会御輿のことが決まらない

コスモスに隠れてイヌと鬼ごっこ

旧道は栗も柘榴もいち早い

白鳥がやがて湖輝いて

秋風がすすき一斉波にする

鳥取県 谷口次男

無医村の僻地は意地で医者要らず

隕石がぶつかり僕も生亨ける

横道を諫めてくれた童唄

運動は畳が二枚あればいい

妖怪も腰抜かすほど妻化ける

鳥取県 蔵本悦子

線香がやがて仏にしてくれる

まずい顔作った神は許せない

焼くたびにサンマが秋を深くする

だんだんと秋が私を肥えさせる

コスモスを見てコスモスになる私

鳥取県 深田俱久

間引き菜の苦言を耳に日記閉す

GGの秋日に老いの八百人

少子化に運動会の輪がほそり

限度まで我慢しましょう格差の世

もう我慢ならぬと北へ物申す

神主の祝詞は日本語でわかる
秋まつり年寄役が姦しい

稲刈りも脱穀もするコンバイン

一年中食えるさんまも今が旬

北の核平和の鳩を追っ払う

鳥取県 佐伯やえ

青い空二度と汚すな北朝鮮

幸せに生きる要だ一步ひく

泣かされた橋を二度とは渡らない

いい過去を胸の袋につめておく

くよくよすまい天に梯子はもうかけた

鳥取県 山下節子

母さんの暗示痛いの飛んじやった

ジंकスを笑いとばせる器量もつ

怨念を捨てると丸い顔になる

怨念を鎮める術を探してる

肥えたいがやせる広告ばかりです

鳥取県 石谷美恵子

名の由来聞いて見直す花の顔

筋書きを変えて反応待っている

自分でも古いタイプだなと思う

サーカスで稼ぐ獣の悲しい目

金木犀足をゆるめて深呼吸

鳥取県 山本正光

花回廊晚景いつか夢の彩

父母を越えた歳の身ただ感謝

健康を土台に八十路趣味多彩

まだ力残つてゐるぞと足のうら

魂胆が解せない核をくすぶらせ

鳥取県 盛田夢路

先細りせぬよう今を輝かす

孫に説く勿体ないという言葉

梅干しの味には亡母が生きていた

恋の火を絶やさぬように古希登る

バランスもちから加減もいい夫婦

松江市 松本文子

一本足で立つ練習をさせられる

痛いいたいと泣かなくなつてから不幸

枕の下で聞く耳鳴りかさざ波か

補助金が消えてしまった合併後

キラ星になつて子供ら出て行つた

松江市 川本 畔

ちちろ鳴く自問自答をくりかえす

医者にも行かずおはぎ三つも食べている

仏飯をお椀に移し秋の水

柿の実もたわわイナバウアーをする

言い訳はしないゴーンと鐘鳴らす

松江市 安食友子

お人好し宥め賺した腹の虫

待合室とつてもまめなべちやくちやよ

不快指数忘れたように虫の音が

本当に偉いロボット威張らない

日記にもタブーになつていく符号

松江市 佐野木 みえ

秋桜が揺れて台風北へそれ

娘が誘ういつか行こうねハワイ島

秋海棠ひっそり咲いた庭の隅

もういいよでも母さんの肩たたく

棚田から黄金の恵み揺れている

松江市 松本 知恵子

虫の音とススキで足りる月見酒

空弁当大儀なく夫持ち帰る

米寿の目光る戦争語る時

秋風も冷たし風の吹くままに

とつておきの酒が客間で待つ出番

松江市 小川 注湖

カレンダー予定半分川柳会

並んでる人が全員カード処理

壁の魚拓自慢話を聞いている

特産のしじみの貝が砂を吐く

カタログはほんまに美人ばかりいる

松江市 三島 淞 丘

抒情歌の中に亡父母生きてゐる

縄のれん街の噂に聞き飽きる

拝復の優しい文字にある謀反

も一人の自分を晒す旅日記

柔らかい言葉の裏に蹴躓く

松江市 銭山 昌枝

やわらかいものに触れると透き通る

白髪染めと化粧で五歳鯖をよむ

フォアグラの味沁み込んでゐる奥歯

脇役に徹した母の助演賞

もう会わぬつもりで渡す空手形

松江市 津川 紫晃

殻破るいのち生まれる火よ水よ

湯上がり浴衣絵になる遠花火

核弾頭滅びの方程式を詰め

水の音火の音妻にない休み

雨垂れの音が未練をかきたてる

出雲市 城 多喜

絵の具皿秋の色など溶きましよう

風が舞う落葉のダンス見せながら

どの靴を履こうか足に聞いてみる

身の程を知ってだんまり決めておく

真二つに割ってみせよう胸の中

出雲市 佐藤 治代

良妻の仮面をかぶり従いてゆく

友達がくるので惚ける暇がない

淋しんば友達呼んでワッハッハ

こっそりと逢いたい人が胸にすむ

言い訳のたびにこぼれてしまう嘘

出雲市 吉岡 きみえ

もう遠く離れて行つた影法師

枯尾花秋はじっくり深くなる

かまどには火の神様が降りてくる

手をかざし焚火囲んでわらべ唄

もやもやをいつ氣に晴らす酒呷る

出雲市 小玉 満江

山いくつ越えたかここは鹿兒島県

山道を走れば廃屋二ツ三ツ

特攻隊偲ぶ桜の返り咲き

椰子の木に夕陽が沈む桜島

月光に照らし出されたゴミの山

出雲市 多久和 敬子

単身に慣れて料理もうまくなる

不用品いっぱいあつて狭く生き

真つ白いワイシャツいつも自己主張

やわらかなほつぺにチューをしてみよう

奥様と呼ばれようずに利用され

出雲市 持田 多輝子

虫しぐれ青の洞門月あかり
インフレとデフレにゆれる不安感
老いたとてときめく日あるうば桜
ベット飼うルール守らぬ人が増え
妻にだけ分るウインクしたつもり

出雲市 岸 桂子

仏飯を高くもり上げ亡母を恋う
カレンダー余白に明日を組み立てる
プラスマイナスゼロで得るもの何もない
習慣は悲しいレモン薄く切る
物干で一息入れる赤トンボ

出雲市 小豆沢 歌子

おはようと今日のドラマが始まった
やわらかいみすゞの詩に蝶が飛ぶ
ころころと遊び上手なゴム手毯
約束を果して飛んだ鬼やんま
私の海からひとり出た小舟

出雲市 小白金 房子

カラクリの技法は見せぬ舞台裏
無人駅私とおりの秋の風
公園の遊具へ秋の陽が急ぐ
張り替えた障子影さす赤トンボ
七転び八起きダルマと手をつなぐ

出雲市 石倉 美佐子

観光の森の水車はよう回る
森の奥悲恋の池は紅葉散る
紅葉に見とれてぎっくり腰になる
美しいお姫様が住む森の奥
私もおつうも帰る遠い森

出雲市 富田 蘭水

ごみ拾う先ずボランティアすがすがし
恋らしく書くと相手が身構える
記紀神話いずもの私を温くする
殺伐なニュースひろって事欠かぬ
余生まだ睨んだ空に虹がでる

出雲市 園山 多賀子

百歳に届く命は後五年
潔白で煎じる爪の垢もなし
変化球躲して卒寿サバイバル
堪忍ももうこれまでと酔芙蓉
秋刀魚から精気を貰う秋の贅

出雲市 森 茂美

もの言わぬ仏に留守を頼んでる
少子化へ拍車をかける医師不足
漁火に日本海が昏れてゆく
秋風がさみしい詩を連れてくる
彼岸花暦のように咲いて出る

雲南市 毛利 幸

こそそと探して歩く里の秋
名月に見とれほんのり美酒に酔う
温かい風が私の背を押す
手をこすり次の秘策を練っている
独り住む過疎の町にも四季巡り

島根県 伊藤 寿美

自画像を描いては消してばかりいる
絵本から飛び出してきたユリカモメ
私を振るい落した選別機
私を斜めに切った流れ星
弟がくれた優しいカシオペア

岡山市 井上 柳五郎

こぼれ種咲いた朝顔花数え
無為徒食こんな暮しでよいのかな
度忘れでなくて呆け進行を悟り
米寿にて免許更新友迷う
敗戦後のハルビン語る老い二人

倉敷市 撰 喜子

明日があるきつと来るから今日は寝る
誤った筆順孫になおされる
誤りがばけかわからぬ銭勘定
超過保護根ぐされ起こす花も子も
赤い糸自由うばった五十年

真庭市 福岡 智恵子

何はともあれ親王誕生国平和
名月の醍醐味過疎と酌み交わす
荒れた掌に生命線が太く伸び
変人と言われ独断舞い終わる
木の葉舞いやがて浄土の地に還る

真庭市 国米 きくゑ

流れてる雲が記憶を連れてくる
どん底で助けてくれたあなたの掌
引き出しの底にコトリと秋深む
旅立つた友を偲んでいる夕陽
膝が痛むやつぱり今日は寒露の日

美作市 小林 妻子

ころつとは死ねぬ介護保険がある
八十を越え保険屋も寄りつかぬ
老人会が牛耳っている過疎の村
階段があるから汽車の旅ご免
飛行機と新幹線の競争だ

美作市 山本 玉恵

命ある限りは善を積んで行く
折折の楽しさに遇う赤い靴
風雪に耐えてほほ笑む辻地蔵
一切を仏に託す花遍路
自転車をつたより米寿の道を行く

美作市 大石 あすなろ

竹原市 時 広 一 路

軽い気でした約束に責められる
毒舌をぶつつけ合っているパワ
ーサープ権今度も妻に握られる
面取りをすれば言葉も丸くなる
わたくしがまさか噂のターゲッ

美作市 福 原 悦 子

歳月の重みを語る写真帖
とまり木で聞く遠い日の裏話
古傷を癒してくれた夫の愛
回想の節目の中に亡父が居る
絞っても返事の出ない知恵袋

竹原市 岩 本 笑 子

よく切れるハサミで封をそつと切る
何事も初めてがある電子辞書
休肝日大親友が来るという
長女にも次女にも似てるコスモスよ
いきいきと脳喜んでいる秋だ

竹原市 森 井 菁 居

着ていないようにも見えるクールビズ
食欲があるから店に寄りがる
口笛は無視して歩く血統書
それにしても飲酒がらみが多すぎる
Y S I I お疲れさまという笑顔

孤独だと言わぬ一輪挿しの花
飲むだけで足りず湿布も目薬も
雨雲は描かぬ私の風景画
なあ英語お前縦書き出来まいが
迷うまい神が私にくれた道

竹原市 石 原 淑 子

生かされて風と光のセレナーデ
仏にも鬼にもなれる母の意地
流れ雲浄土の母はどのあたり
笑顔弾けてる七色唐辛子
天高し愛犬も私も肥り気味

東広島市 福 島 万 年

妻と見るきょうの料理に唾を呑む
晩御飯相談されて困っちゃう
松茸が大吟醸を連れて来る
きれいだね旨そうだなと手を合わす
配給のジャガイモ小さくえぐかった

美祿市 安平次 弘 道

ためらい傷夢の続きはもうよそう
おまけ付きの人生なんてすばらしい
強がりを言えば過去帳持ってきた
バトンタッチバトンがぼろり落ちました
視野一杯少年やおら立ち上がり

松山市 古手川 光

七面鳥にとっては怖いクリスマス
暇過ぎて困る軍事評論家
痛み伴うテーマは選挙すんでから
核家族くらしの知恵が伝わらぬ
見る方はデッドヒートが面白い

松山市 高橋 宏臣

神々の微笑が透ける雪月花
泣き笑い覚え鯛の群れを出る
声変わりかごめかごめに馴染めない
耳も目もふたつ迷いが深くなる
サラ金の美女が借りろと唆す

松山市 宮 尾 みのり

ささやかなブライド多勢好まない
あの頃が詰まる古本捨てられず
紅葉の見事滅びの美学かも
茫々と秋逝く空とすすきの穂
義理がたい人に百円返される

大洲市 中 居 善 信

棲むとこが違うおんたと割り切れる
疑えば切りが見えない嫉妬心
拌み倒して貰った妻が鼻につく
鼻に皺とても明るいお人好し
目線を下げたら石ころが見えた

西予市 黒田 茂代

笑どんぐり帽子を脱いで飛び降りる
捨てたはずの迷いが胸の奥で揺れ
風音も去りゆく水も秋の中
一気に風紅葉落葉の舞踏会
煩惱の渦を出られぬまま冬に

東かがわ市 池 内 かおり

幕降りるまでは飲ませてあげたいな
再検査胸の重石が取れませんか
休んだら私の居場所無いパート
世話させる戦略練っている所
みそ汁の匂いで今日の幕が開く

東かがわ市 川 崎 ひかり

米洗う指から冬の気配する
パチンコの玉に財産吸い取られ
千円からそんな日本語あったっけ
陣痛に男ウロウロするばかり
隣国が地球十周ほど遠い

東かがわ市 成 重 放 任

回診の白衣は腕にメモをとる
幾星霜苦労重ねた丸い石
戦友の絆は解けぬまま西方へ
エネルギー使い果して幕を閉じ
世話かけたあの一言で報われる

東かがわ市 清川 玲子

湯煙に浮世のことは忘れ去り
横並びだった同期に使われる
横車押す人いつも同じ人
子の仕草確かに同じ血が流れ
訪ねれば昔をつなぐ家も消え

東かがわ市 原 賢

動じない人と信じていた誤算
行く道も帰りの道も蹴躓き
ダム底へいずれば沈む庭の石
子の名前忘れた老母のおむつ替え
休みたいとき休んでる万歩計

東かがわ市 伊勢 八重子

彼岸花途切れた先に父母の墓
皇室に一石投げた呱呱の声
音読をして細胞を光らせる
休耕田すべてを許す里の風
喧嘩した友が支えの軽い靴

高知市 小川 てるみ

支笏湖の時雨は秋を深くする
旅費よりも高い土産を笑われる
田舎には田舎時間という暮し
美しい国への舵を信じよう
団塊の世代呼び込む知恵と知恵

高知県 赤川 菊野

念願の皇居の空に鯉幟
年毎に絆だんだんやせてゆく
一人でも明日のシナリオ描いて寝る
マイナスをプラスに変えるハングリー
追憶をたどれば竹やり防空壕

高知県 小澤 幸泉

コスモスに見送られてる無人駅
山里の人優しくて過疎の村
ふり向けば二人で越えた長い坂
子の知らぬ夢ふくらますママの声
笑わずに歩き始めた孫をほめ

(前月分) 富田林市 中井 アキ

喜んでゐるのに涙止まらない
他人様に見せてはならぬ土踏まず
面識はないが逢いたい朱の句集
エンドレステープのように姑のぐち
なまけ心へ骨折という神の鞭

き かつ 柳 川

日時—1月12日(金) 於 国労大阪会館 14時
兼 題—一滴・骨・光明

投句先—〒599 0232 阪南市箱作1586—14—102

森村 美花

川柳塔の

川柳讃歌

(24)

木津川

計

ああ平和誰もが乗れる霊柩車

北野 哲男

今も僕は「海行かば」を聞くと涙が流れる。
だから歌わない。聞きたくない。「海行かば
水漬く屍 山行かば草むす屍……」。その屍
の悲惨を大岡昇平は戦後文学の秀作『野火』
に記した。惨憺のレイテ島である。背走の大
岡は道端の兵の死体、そのどれもが贅肉を失
っているのに驚く。だれが屍を食べたのか？
霊柩車に乗れる平和をだから守らねばならぬ。

十代のもったいなくも厚化粧

亀岡 哲子

別嬪は電車で化粧などしない

奥 時雄

十代の肌の輝きである。寄せて上げなくて
も乳房は漲っている。艶やかな美しい素顔に
なんの化粧があるものか。晶子の詠った「奢
りの春の美しきかな」を彼女たちに伝えよう。
そして、賢いひとは化ける手口を公開せず、

美貌のひとはいつだって綺麗だということ。

おばあちゃん虹が出てるとメール来る

牧 測 富喜子

おばあちゃん好きで思いやりのあるお孫さ
んを持った富喜子さんの幸せである。人間に
大切な資質を一つだけ挙げよ、といわれたら
僕は「思いやり」と答える。

そして虹はいつもロマンと結びつく。詩人・
山田喜代春にこんな詩がある。「神様に手紙を
届けようと 虹にはさんでおきましたら、虹
色ににじんで読めないと返事がきました」

秘密など無いさ仏壇開けたまま

楠 見 章 子

「天地神明に誓って」とか「俯仰天地に恥
じず」が真つ赤な嘘だったと何度政治家に騙
されてきたことか。だが日本人はご先祖様が
恐かった。脛に傷を持つ人間は仏壇を閉じて
知られまいとした。もうこれで誰も知らない
と思えたが、「天知る地知る己知る」と言わ
れたから観念した。それにしても童子さんは
隠し事の一切と無縁。稀有なひとに脱帽する。

断崖はくだらぬ私欲受け付けぬ

安 食 友 子

現代詩の巨峰だった小野十三郎は断崖をよ
く歌い、「僕は断崖のない風景に窒息する」
と記した。そして「断崖に庵と見える砦／浜

谷に釣人と見える前哨／霞を食って生きる」
とも。こんな生き方への僕の憧れは消えない。
さて、友子さんの言う断崖である。ロックク
ライミングするのだが、その絶壁は無欲な者
をしか寄せつけない。峻烈なまでの潔癖！

疲れたら蟻の列でも見てみよう

時 広 一 路

疲れてみる蟻の行列でなく、与謝野鉄幹は
『明星』廃刊後、虚脱。蟻の行列を庭でじい
つと見るのである。緑側の向うの大部屋で妻
晶子は執筆に追われ続けだ。鉄幹の敗北であ
った。もう一度生まれ変われるとしたら「天
の才ある妻の命に」と。嗚呼。

しかし一路さんは働き蟻の営々たる列を見
て、疲れた体に鞭打とうとするのだったら？

地球でも散髪しよう草刈機

竹 信 照 彦

思わず水府さんの「マッチ一本地球の上に
捨てる春」を思い出した。大と小の対比であ
った。照彦さんは地球を散髪すると言う。と
きにはこんな壮大な句に出会いたい。が七歳
児の詩が素晴らしい。「たいようがおならをし
たので／ちきゅうがふつとびました／なにも
かもふつとんだ／でも うちゅうじんはいき
ていたので／おそうしきをはじめた」と。

〔上方芸能〕誌代表

自選集

宮西弥生

両川洋々

気まぐれな秋の涙はすぐ乾く
ひとためし男を試す秋時間
生涯はアリコに任すこのいのち
奈良町の月夜に似合う駕籠とひと
北海のぷりぷり予定また変える

森下愛論

阿萬萬的

肩書を綺麗に外しバカの顔
善人にされて喜ぶバカの顔
もんどりを打って転んだバカの顔
湯の町で呼びこまれてるバカの顔
リモコンで遊ばれているバカの顔

八十田洞庵

石川侃流洞

鯉口を切らずに耐えてきた男
言い勝った口だが淋しい帰り道
ロボットの神技動機などはない
啖呵切る男浅瀬で溺れてる
曼陀羅の絵解き遺戒を夢見てる

あ、砂丘悲しみだけが地に埋もれ
ドングリを見習えみんな同権だ
素手だけ笑顔だけなら君に勝つ
ここも過疎やはり遊具へ風ばかり
特ダネへ口のチャックが外れそう
雑学をべらべら中味ない話
あつさりと足すくわれた付焼刃
マンネリで中途半端な過去ばかり
形状記憶少し遊びがあつて欲し
朝ドラに合わせて散歩から帰る
北朝鮮危い花火打ち上げる
常識では考えつかぬ北の国
国境知らぬ鶴がデコイの仲間入り
功名を焦る野党の意地悪さ
ふる里の母を連れ出す新免許

板尾 岳人

旅人に風は地酒のある所
臍の緒だ僕が生れた十二月
恋人の風は冷たい十二月
あの時の風は素敵な笑顔見せ
もう少しゆっくり風よ吹いてくれ

奥田 みつ子

胸底にいたずら好きの小悪魔
ほろ酔いの耳に届いた相聞歌
逝く秋に恋の余熱を抱いている
旅半ば遊び心を友として
楽しむことまだまだあつて死ねません

河井 庸佑

一石を投げて形勢そつと読む
面倒なことも後へは引けぬ義理
日曜日夫婦で違う趣味の道
遠来の親友へ取って置ききのボトル
優柔不断までもチャンスは摺り抜ける

木村 あきら

虎落笛鳴らして寒気団が来る
絶壁に生きてる松の底力
行く人に笑顔振り撒く道祖神
雲が飛ぶ月も一緒に飛んでいる
ゲームセンター論吉ドンドン吸い込まれ

小島 蘭幸

瘦身の師の情熱に似て一輩
大声になるのは好きだからですか
振り向けば助さん格さんがいない
如意棒を下さい淋しいのです
これが最後のボーナスですかありがとう

小西 雄々

下積みに耐え音たてて血は流れ
戦友会世話役が逝き解散へ
柳友の後押し信じ立候補
平均寿命越えて楽しむロスタイム
陽の当たる場所で飲む酒なお美味い

小林 由多香

歯をけずる音順番を待っている
うれしいと飲み楽しいと飲みすぎる
ゴールイン後には誰ももういない
散歩道上手と言えぬピアノの音
全員でふるさと歌いお開きに

斉藤 姦

ひまわりもぐったりとするひとつの計
コスモスは痩せてる土地が好きなんだ
言い分は薔薇にもあつた狂い咲き
空白のページを埋める旅日記
味のあるお話でした通夜の数珠

塩満敏

蟬しぐれ終ると鈴虫鳴き出した
冷房がすむと暖房準備する
人生の蓄のような孫娘
禁煙一年目肺がきれいになりました
大阪に鶴さんの碑が建つよ

新家完司

今はただお酒が飲めるだけで良い
酒の匂い嗅ぐためにある鼻の穴
独り飲む他言無用という焼酎
酒飲んで歌って笑うのが好み
お月さま飲み屋の外で待っていた

田中正坊

一握の砂から陶板美術館（大塚国際美術館）
粲然と泰西名画千余点
懐かしやミレー モネ ギャルノワール
スクと立つ自由の女神ドラクロワ
数知れぬ名画に眼洗われる

玉置重人

支え合う人と言う字をじっと見る
ホットニュースをサンパツ屋からひろう
リードされたら切りたくなるラジオ
正直な体が若い気を喰う
寝たきりはゴメンと思う万歩計

恒松町紅

意地張ったばかりに影が薄くなる
コチコチの頭でさてと考える
遠足が楽しかったと通学路
歳のせい頷くことが多くなる
働ける幸せ空も秋の色

遠山可住

パン食の隅でたくわんひそと噛み
他人様の年金数えてる夜長
賽銭箱ここの神様頼れそう
肩の荷の重さへ酒が強くなり
用足しに起きると足の裏の秋

土橋螢

悪人が善人の真似してみせる
親不孝裁く権利はないだろう
曼珠沙華咲いたところに罌がある
貧乏と綱引きをする稲を刈る
栗飯をつくる勤労感謝の日

西出楓楽

ゆつくりと心ほぐれてくる足湯
夢紡ぐ糸は深紅に決めている
亡き夫の歳を数える冬の入り
人不信ファウルばかり打っている
七割引疑い深くなってくる

原稿募集

— 私の宝もの —

四月号掲載の特集原稿を募ります。
自分の大切な宝と思うもの（人物、言葉、思い出、品物等）
何でも結構です。同人のご応募をお待ちしています。
四百字詰め原稿用紙一枚半（二百字）
百字（八百字）
タイトルは別につけてください。
締切り 二月十五日 本社事務所宛
但し原稿の採否、添削は編集部に一任してください。

編集部

七十路の自慢にがりの利いた汗
七十路の自慢お医者顔を立て
七十路の自慢社説を二つ読む
七十路の自慢楷書で書く返事
七十路の自慢若手に椅子を空け
父の墓にでる坊主吊つて来た
乙女座の猫がすり寄る袖の花
鈍行にしよう紅葉の旅だから
トランペッター何か痛みがありそうだ
片袖のカフスを拾うおぼろ雪

波多野 五楽庵

仁部 四郎

第27回 ときせん賞作品募集

雑誌2句（未発表句）
選者 大野風柳 河内天笑 赤井花城
森中恵美子 小松原爽介
投句締切 平成19年1月20日消印有効
発表 平成19年4月号誌上
賞 ときせん賞 1名
投句料 準ときせん賞 2名 佳作 7名
千円（同人・誌友共）定額小為替
（切手拝呈）発表誌呈
投句用紙 便箋大（B5サイズ）用紙に作品
2句と住所氏名を明記のこと
投句先 〒664-0836 伊丹市北本町2-69-2
山口千尋 宛
選句方法 無記名清記の上、選句
1句ごとにその合計点で順位を
決め、上位10句を入賞句とする
（平拔2点・五客3点・三才4点）
入賞者は平成19年5月12日の川柳大会で
表彰します
◎多数のご応募をお待ちします
時の川柳社

冗談の中に本音がまじってる
ひと言の冗談女を狂わせる
もう一杯と機嫌なときの父の酒
調子よい言葉で機嫌とりになる
居酒屋の隅でのもてる落ちこぼれ
食パンに牛乳軽い朝すまます
大根に白菜妻は農家の出
群雲が今年も月の邪魔をする
酒の友川柳の友一番だ
特選の酒も時々のもんでいる

宮口 笛生

芳地 狸村

水煙抄

奥田みつ子選

横浜市 川島良子

締切りがあるから燃える脳細胞
つかず離れずながい人生丸く生き
熟年離婚サバザバ生きるのは女
趣味仲間増えてはばたく定年後
検問へ下戸は大きく息を吐く
秋夜長明日の我が身をふと想う

大阪市 森田明子

秋桜が揺れて迷路に誘い込む
耐え切れぬ胸を開いたザクロの実
泣ける日はブラームス氏とお茶にする
空にしてあなたの思い受けとめる
四季咲きのバラの欠伸を見てしまふ
絡むもの絡ませたまま歩き出す

京都市 榎本宏子

帰り道もったいぶった月に会う
お夜食を控えてからの不眠症
ひとりの夜コーヒーよりも長電話

蹴つまずく石で気がつく生き急ぎ

銀行のカメラに軽く会釈する

雑踏に自分の居場所見失う

大阪府 神野千恵子

憂鬱な景色に染める小糠雨

小走りに何の情緒もないミュール

台風のおとしやべり好きな雲

絵に描いて欲しそうに萩ゆれている

やわらかい時間を刻む鳩時計

一駅の内内にもある豆ドラマ

札幌市 三浦強一

着膨れた万歩計行く冬木立

大吟醸休肝明けを待っている

神様がぼくにいけずをして困る

物忘れ加速度がつく老いの坂

混線しやがてプツン脳回路

神戸市 両川 無限

ふる里の星降る夜は星まつり
誘惑の言葉に乘らぬ白いバラ
あわててもダメヨ白には戻れない
ドラマではないから恐くなるニュース
やわらかい言葉で無理を押しつける

池田市 上嶋 幸雀

黙々と生きる冥王星の意地
美辞麗句削れば透けてくる初秋
残り火がまだ秋風に揺れている
秋風に論されている現在地
本を読む妻も眼鏡の秋夜長

京都市 三宅 満子

虫干しに亡母の思いを肩に乗せ
和ダンスの着物が着ても騒ぐ秋
十六夜の月と静かに散歩する
今日もまた平和に落ちる砂時計
死亡という二文字で終る我が命

泉佐野市 稲葉 洋

鳶一羽舞って初冬に老いの午後
冬支度したかと北の浪荒い
冬あつてこそ春であり花であり
結局は達観出来ぬ冥府考
漕ぎ方は一律ならず夫婦舟

大阪市 中井 萌

おねだりの奥の手孫に電話させ
幸せの中で幸せ探してる
上げ膳に一札をして旅の宿
白壁に落書き止メと落書きが
孫ひとり大人同士の潤滑油

日立市 加藤 権悟

豊穡の大地に唸るコンバイン
幸せは手のひらサイズほどよし
鍬洗う夕陽に明日を励まされ
湖に翼労る北の使者
電飾の歩幅に溶けるツーショット

松江市 山根 邦代

ふるさとの素朴な事が嬉しくて
神在月お願い事が多くなる
伝えたい言葉すんなり出てこない
過ぎし日の喜びだけを数えてる
顔は丸心時どき角を出す

八尾市 寺川 はじむ

ストレスがすつ飛ぶほどのいい笑顔
一歩だけ譲る覚悟で勝負する
ほどほどのストレス老いを寄せつけぬ
物指しではかり切れない人の欲
ちぐはぐに身体のネジが緩み出す

和歌山市 柏原夕胡

大阪市 尾崎黄紅

大らかが中心に居るあたたかさ
寂しくて愛されたくて笑つて
君の言葉に一喜一憂して暮れる
子と共に親も育つていくのです
負け組で良いゆつたりとのんびりと

香南市 桑名孝雄

一年が早くて酒が飲み切れず
喜寿越えてもうすぐそこへ来た八十路
計の序列神は素知らぬ貌でいる
ピーヒャララ帰省の友へ輪が温い
惻隠の情が解せない国語力

大阪市 三浦千津子

世渡りは下手でも嘘は言わぬ人
引き算の余生もたのし無駄はなし
メリハリを付けて楽しく編むブラン
呑み込んだ言葉へ欲しい消化剤
一芝居打って妥協の糸口に

岐阜市 平野あずま

子離れはしても出来ない孫離れ
笑い皺喜劇悲劇が刻まれる
同居して歳の段差に蹴躓く
句読点省き女の喫茶室
進学を決意選球眼冴える

誤字脱字老眼鏡のせいにする
聞いたげる嘘だとわかる嘘だから
あんた誰ですかと惚けたふりをする
自転車に八十年も乗っている
金がもの言うたかみんな黙ってる

大洲市 花岡順子

森の仲間が木の葉に手紙書いてくる
親と子の和音が空に吸い込まれ
駄々っ子にも仏にもなり母白寿
答えにはならぬがお茶を入れ替える
義理の姉ほどには出来ぬ母の世話

三田市 阪本藤朗

眉毛伸び耳毛も伸びて敬老日
ジパンにすると歩幅が広くなる
毎日が子供と同じ好奇心
美味しいと言わない口でよく食べる
香典の包みも一度確かめる

安来市 原煩惱児

秋永に満月悲恋物語
色付いてリングが孫を待っている
持ち寄って弾む出雲の茶飲み話
戴いた栗新米で栗御飯
さあ茸山が呼んでる待っている

シドニー 三谷 たん吉

馬はファーストお供は並でフランスに
人間のエゴに歯向かい遅れ取れ

我が敵は志なき日本人

ノラ暮し貫く猫の志

あわてずにゆっくり生きてゆとり出た

シドニー 坂上 のり子

そつとして置けば良かった砂漠の火

トラブルを抱えない国なさそうだ

勝ち力士楽屋へ帰る背が笑う

平和だなあ青空仰ぎつぶやく子

時の経つ怖さ忘れて待つ桜

シドニー 森本クックバラ

なじめない夏の正月クリスマス

孫無くて猫が孫よと負け惜しみ

鳥どもの合唱連れて猫帰る

ピッコひく猫に夕立容赦無し

猫抱いて心優しき人となる

シドニー 内山 佳代子

横着は許してくれぬパン作り

お砂糖を抜いたマフィンはリング入り

お相手の都合など無視急な客

電話一本くれれば余裕持てるのに

日当たりは人の気持ちさを左右する

メルボルン 藤原 ポン吉

散歩する犬も笑顔の野原かな

手を焼いた子供が運ぶ宝船

父母の優しさ競う子の病

家族には病を癒す絆あり

痛み耐えにじむ涙のちからこぶ

山鹿市 松岡 純子

夕焼けが少し淋しくなる季節

夕日あび足長になる影ばうし

歳重ね心と軀丸くなり

幸福を喉で奏でるミケとタマ

人よりも子供の躰上手いミケ

山鹿市 米加田 恭代

犬の世話どうして妻の仕事なの

愛犬が他人様にも尻尾振り

寝ていると可愛く思う暴れ犬

里帰り指折り数え精を出す

名月が餅に見えだすダイエツト

唐津市 岩崎 實

熟さないうちに早採り多すぎる

一対一やる気引き出すテクニク

楽しめば勉強それは苦にならず

本気から生まれるものは血とめぐる

落ち葉を運よく拾う道すがら

北九州市 岡田幸生

老いの指マウス如きに侮られ
末席の私語に本音を聴かされる
網を張る夢へ青い目四股を踏む
左遷地へひとり旅立つ秋の風
ニユース観る夫にドラマ見たい妻

香南市 百田幸

口喧嘩しばし無言の日がつづく
もろい足その分口がカバーする
肝心の用は忘れた長電話
それぞれの歩幅気配に老夫婦
他人からみれば不足のない夫

香南市 近森功

歩きぶりやっぱり歳だなと思ひ
かけつこの孫追いかけるカメラマン
幫助罪今夜はお酒出しません
五十年添って妻の名未だ呼べず
老妻が色香を保つ朝化粧

今治市 渡邊伊津志

守りから破れ離れた赤いバラ
もてなしの心が人に花咲かす
ささやかでいいもてなしの笑顔する
人様を敬う気持出る笑顔
躓いた石から欲が転げ落ち

東かがわ市 赤澤貞月

月下美人起きて観てよと香放ち
好きなこと出来て幸せかみしめる
朝ドラを今朝も並んで観ています
嫁からの電話ハイハイしてるらし
置石の主はカラスと笑えない

松江市 松浦登志子

人恋し空袋持ち冬の駅
常識を今更人に聞けぬ歳
わたくしも敬語美人をめざします
夕陽浴び農機具洗う背にトンボ
すくも焚く煙にむせる散歩道

出雲市 荒木英子

秋日和私の影と昼寝する
ハツとする面影似てる逝つた人
一人居に旅ブランにも娘を誘う
デイズニーを一度見たいと老いの坂
デジカメにミッキーと撮る若返り

出雲市 川島和歌子

木枯しに使命果した落葉掃く
農一途土と歩んだ足の裏
愛そそぐ答えてくれる土を掘る
役終えたかかしにスズメ羽繕い
人生のさてこれからの彩探す

雲南市 武島 ちよえ

優しさに会おうと心つい許し
病院が取り持つ縁で友が出来
それぞれの角度で測る風の位置
これ以上首突つこめば火傷する
保護色は何れにしようか秋の山

雲南市 菅田 かつ子

紅つけて山はそろそろ旅仕度
虫の声月と並んで帰る道
忘れたと言うて向こうを立てておき
九十の見れば七十まだ若い
にこにことただにこにこと嬉しい日

鳥取市 横田 春名

ころころと心転がし幸拾う
古い靴ばかり重宝老い近い
手炙りの火鉢が消えて情も消え
海は風ぎ浜辺のゴミに胸痛む
お人好しとつさに嘘がでてこない

鳥取市 岡田 信恵

孫の足早くて逃す老いの足
感動に出逢う機会で明日がある
自分流朝のみそ汁具沢山
マンネリだデザインかえる人生に
交流会生きた喜びわかちあう

鳥取市 山岡 紀子

我慢してお下り着てる三女です
大福を横目で睨むダイエツト
クラス会恩師のような友もいる
恩人のような顔してお節介
我慢することを知らない未来の子

倉吉市 前田 喜美子

曾祖母になつて長生き考える
後もどり出来ぬ人生考える
取ることを知らぬ子供に柿たわわ
気付かず回りの恩の中に住む
腹の虫廊下をすべるほどみがく

境港市 遠藤 那珂子

曲り角上手に通過した私
野良着から平野を守る砂が落ち
明るい子地道に夢をつめている
難題を広い心がいてゆく
広い部屋私が光る場所にする

米子市 小塩 智加恵

懐かしや孫の声聞く敬老日
認知症治る薬が出来た夢
気にかかる姿カーブで見失う
根気よさきつと父似と自負して
楽しみは旅の朝食バイキング

鳥取県 橋谷 静江

健康で孫の挙式に出る幸よ
喜びを肌で感じる孫の縁
縁があり憧れの人へ夢叶う
先のこと考えすぎて頭痛する
癒されるわが家のふとん足のばす

鳥取県 小飼 和代

飽食の付けがまわって医者通い
初雪が俄かに急かす冬支度
熟れすぎた隣の柿に気が揉める
天高く拳突き上げ活入れる
初舞台胸の鼓動も見透され

鳥取県 岡村 孝明

運動会孫にせかされ行つてみる
青い実も気長に育て社をまかす
熊出ない庭で孫らと栗拾い
黄金の田エンジン唸り大平原
今日限りたばこ止めても酒つづけ

和歌山市 土屋 起世子

母の膝いつも足し算してくれる
幸せは今かも知れぬ作業服
言いたい事言わぬ鉛玉なめている
ひとつ捨てひとつ拾って趣味の会
悲しみの心解凍する夕陽

和歌山市 田中 すす

物差しが時々ずれてくる夫婦
忠告をしつかり聞いた両の耳
白紙いちまい自由時間がおいてある
心の中の鏡が曇る失語症
メロディーの底にわたしの涙壺

和歌山市 たむら あきこ

きたぐにの旅へ寡黙な貌になる
信じたら呼吸が楽になつてきた
生きている限りわたしを光らせる
だんだんとモノを離れてゆく心
秋沸点音を殺して去るあなた

紀の川市 宇野 幹子

悦びのビールはジョッキから溢れ
袋縫いして猜疑心とじこめる
寂しがり屋昨日の影にしがみつく
癌告知蛇口の水が止まらない
子の道へ道路標識つけたがる

田辺市 大峠 可動

引算の税制ばかり年の暮れ
彼の国のマジックだった射程距離
恩讐の彼方で逝きたいまつりずき
石仏あなたの慈悲を下さるか
過去未来地に点点と悲の仏

和歌山県 森 下 よりこ

秋色の風に染っていくところ
頸筋をすり抜けていく寒い風
私は私でしか生きられず
秋です何を食べても舌鼓
どんぐりばらばら秋の童話が始まった

紀の川市 辻 内 次 根

新刊をめくる微かな風が来る
助走して踏み切る溝の幅がある
雷鳴の一撃音を変えて降る
アルバムの旅の写真はみな笑顔
どの耳で聞いても寒い風の音

奈良市 乾 春 雄

過疎の駅落書き読んで待つ電車
ほどほどを知らぬ風船はち切れる
衝動買いの母が子に言う無駄遣い
過去は夢生さる喜び今を抱く
立ち話雨がボツリと邪魔をする

奈良市 矢 野 良 一

秋の空入道雲が居候
肉ジャガの匂い堪らぬ散歩道
私でも詩人にさせる秋景色
雑草にめげず顔出す彼岸花
帰りたい地藏柿の木彼岸花

相生市 村 木 信 子

逃げ腰のわたしを義理が追う電話
切り札を秘めて迎える女の目
保護色を小出しに母は丸く生き
茶を点てて孤老まぎらす月見宴
渡り初め家紋が光る秋の天

尼崎市 河 津 正 治

末席できらりと光る苦言吐く
保険まで掛けて金貸す世の歪み
腹立てて飲んだ水にも刺があり
パレットの余白多彩な想い込め
脱ぎ捨てて親を追いつ竹の性

加東市 黒 崎 美 紗 子

親切な出会い助けてもらう街
発表は今籤握る汗が出る
若さ願う髪のマニキュアしに出掛け
鯖寿司が迎えてくれた祭りの夜
よい知らせ曾孫産まれ老いられぬ

三田市 辻 開 子

姿見に我が身映して若ぶって
胸の内青空見上げ飛ばしたい
時々は歯車外れ珊瑚婚
コスモスに風もちらはら亡父優し
六十路坂共に元気で古稀が待つ

三田市 白井二英

大阪市 伏見雅明

車でも新車に戻ることはない
素人の絵も額入りは見違える
小遣い帳日記書くのもボケ防止
子や孫のよくない癖はほくのせい
夢に出た心の奥のわだかまり

西宮市 藤本直

生き抜いた相合傘も雨が洩れ
君と会いそれからの日々ありがとう
妄念の中に逼塞した唸り
面影を羅漢に探す詫びるため
あと少しまだ坂道と花茨

西宮市 石野照代

一つおぼえ二つ忘れる老いの日々
つるし柿世間の風に身がちぢむ
無理をして飲んだ言葉が逆もどり
時々はだるまも手足出します
にわか雨すこし泣き顔野の仏

大阪市 原田すみ子

里帰り何より語るその笑顔
ふだん着の愛はキラキラ光らない
胸の中めざす夫婦のまだ途中
蕎麦すすする音にぎやかに日本人
照りつけるショーウィンドー秋を着て

絵手紙に慣れてますます字を忘れ
ひと昔前の型だが達者です
親の目に狂いはないと嫁自慢
本の虫何匹も飼う電子辞書
金銭の絡む判子は妻が持つ

池田市 多田契子

ふかしイモ残暑に戦後想いつつ
ボケにもとまとも保険のご親切
すきま風冬と孤独を予告する
三歳児どつと出てきたDNA
はがらかに食べて話せる特技あり

池田市 北出北朗

赤紙が大黒柱抜いて行き
稼ぎ手の父を召されて母子家庭
寅歳が千人針で遅刻した
川柳魂命を懸けた鶴彬
決めずとも家計許さぬ肉無し日

泉大津市 助川和美

すきま風満たされる日もあり夫婦
スィートの梯子する娘の満足気
叱つても言い分けしないポチとい
ロツカーに痩せたら着よう服溢れ
共白髪そんなのいやだ妻茶髪

門真市 矢 阪 英 雄

校庭の上吹きつける苦情風
孫ガード街もしっかり警備する
安全に子供を守る老いの肩
テレビ見る時間けずって孫守る
生きのびたお札少しのボランティア

河内長野市 木太久 正 一

一日を大事に生きる八十路越え
生き甲斐を孫からもらう老夫婦
お地藏の掃除当番無事終り
マルチーズに癒されている老いふたり
秋来ぬと教えてくれた金木犀

岸和田市 中 岡 香 代

あまりにも上手にボケた電話口
裏切った人が困ったお人好し
本当に信じて良いか無洗米
やわらかい言葉に隠す下心
白黒にこだわりすぎた四面楚歌

堺 市 大久保 伸 子

急ぐこと何もないのに走ってる
百均で買いたいものだ青い鳥
戦争は遠い話でありません
断りへの嘘よいか悩んでる
閉店のセール二年も続いてる

堺 市 羽 田 野 洋 介

出た杭を打たれるまでは気付かない
飲み屋増え駅からの道遠くなり
一ランク下げると見えてくる明日
空白の自由樂しむ予定表
行き先は足に任せる散歩道

吹田市 元 田 さとえ

秋刀魚焼くみんなの無事故祈りつつ
眠られぬ窓辺を見舞う月の舟
闘病記つづれば細い虫の声
治療費に万札あつてなく消える
ささやかな秋の喜び栗ご飯

高槻市 峯 村 勲 弘

正座して入れる留守電メッセージ
切手にも祈りを込めて見舞状
生憎と欲しいサイズの無いセール
囁きがちよつと気になる検診日
切れそうで切れないでいる赤い紐

寝屋川市 北 田 ただよし

鯉の目は見ないで食べる活け造り
青柿が落ちる結論急ぎ過ぎ
白壁に真つ赤な柿が影落す
謎解きへあの紅顔がよみがえる
皆で歌うと外れた声も馴染みだし

羽曳野市 森 下一 知

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

海山のつまみに出会う秋の旅

ライバルが居るから伸びたなんて嘘

儉約の財布緩める孫の顔

踏切の向こうにのぞく縄のれん

へそくりがちよろちよろ消える火の車

羽曳野市 吉 村 久仁雄

レンジでチンそれで温もる愛も良し

楚々とした美人の口に河内弁

ど忘れのアレで通じる妻という

直感で正解熟慮して誤解

放し飼いしても火の鳥もう飛べず

枚方市 小 川 良 吉

五錢玉握り駆けたな村祭り

父と子のいなせなハッピー秋祭り

祭り終え子らは都会へ元の過疎

里の秋喜寿の私に曼珠沙華

栃若の冴えた技今懐かしい

枚方市 小 林 (和子改め) わ こ

遠回りしたので夢がまだ続く

秋風が少しいたずら謀反駅

潮溜まりの雑魚もいつかは跳びはねる

眠れない夜の時計の音響く

点てんと落とす命のしみ愛し

どん底で会えた仏のほめ言葉
聞えない振りをするのも生き上手

ミニドラマ子供主役の運動会

仲秋の名月里は芋煮会

さわやかに吹く秋風に人を恋う

藤井寺市 俣 野 登志子

老いてたまるか赤もピンクも着なくつちや

畦道の白が持てます曼珠沙華

幸せが逃げないように返し縫い

独りの夜なぜかうキウキ眠れない

若者が湧いて出たよに秋祭り

藤井寺市 津 田 シルク

別腹に余裕あります秋深し

過ぎ去れば苦もなつかしい一ページ

生きています心はいつも遊び人

老いた身に孫とダンスの夢をもち

ポッケのうつ逆立ちすれば落ちますか

八尾市 松 葉 君 江

発想を変えてスランプのりこえる

身についたマナー暮らしの潤滑油

うるさいが母の説教筋通す

思い出の歌が命を喜ばす

抱っこする親子の鼓動ひびき合う

八尾市 脇 俊子

笑うこと沢山拾う日は丸い
一步前可能を秘めて湧く生命
やれやれと思うと士気が萎えてくる
後悔はしないと啖呵切つて生く
花束を沢山もらう良い目覚め

八尾市 赤木 妙子

ご近所は子供いっぱい愛いっぱい
嫁に花持たせて減った味噌スープ
いい予感赤い花柄着て散歩
書道展読めないけれど先ず褒める
住めば都と姉は田舎に腰を据え

八尾市 笹倉 ひろし

この汗は努力の後の匂いする
僕だって一度はしたい恋敵
少子化の中で産声誇らしげ
行政の無駄がはびこるダムや道
人生の頑固な染みへ漂白剤

八尾市 中島 春江

地下鉄の窓を鏡に身づくろい
人恋しひっそり咲いて寒桜
仏前に亡夫好みし秋刀魚鰯
青空市虫も好みし野菜買う
コンバイン案山子ふて寝の畔まくら

八尾市 田邊 浩三

疑えば切りがないかと酒呷る
スランプがくれた貴重な反省時
冷や水と判っているが挑む山
わが城を守って回る金魚鉢
独り言出てくる歳になりました

大阪府 若月 祐作

老妻も旅の支度に染める髪
黒髪も半世紀経て色あせる
色あせたアルバム覗き絵灯籠
まじめです花と向き合い語りかけ
残すものあるから遺言書いておく

大阪府 高木 道子

今日もまた大阪弁でカラス鳴く
二幕目のどんちよう上げる六十路坂
今日よりは若い日がなし晴れ舞台
老犬と夕焼け背負う散歩道
冗談を本音で包むオブラート

京都市 清水 英旺

同窓会時計の針は逆回り
窓開け放ち夜来香の香で満たす
渋滞も楽しからずや里帰り
夜来香の香に酔う秋の長い夜
消しゴムの滓の分だけ句を作る

京都市 中野六助

やわらかな言葉で綴る果し状
ゆく末は独りか白い曼珠沙華
挑む時おとこ本気の髭を剃る
訪ねゆく記憶の底にある月日
果てしなき雪原ばくの半世紀

尾張旭市 三浦きぬ

日本語もマスターせずに英語塾
亡夫に会う日も近づいたかつらでも
老人は邪魔だと言うのこの重税
昔はね近所の大人も叱ったよ
亡夫へは別れた頃の写真持つ

佐渡市 高野不二

診察券の方が威張っている財布
腹の立つニュースの金は億単位
物置の整理に捨てる物はない
名刺帖思い出せない顔ばかり
昼寝していてもストレス無くならず

東京都 井上つよし

心の窓に灯火ともす友の文
歌の翼で昭和へ戻る文語調
モーツアルト仲良く同居古賀政男
前立腺と乳癌寄り合う夫婦
テレビ相手に悲憤慷慨独り酒

昭島市 野口忠

帰るたび故里の母軽くなり
ホッとするそのひとときが温かい
嫁姑ほどほどがよい車間距離
ケータイが高いオモチャとなりました
役不足そう思うのは自分だけ

立川市 柏野遊花

百万本のコスモス丘は宇宙基地
花はバラボラコスモス天と話し中
両耳を塞ぐと前がよく見える
冷や汗をかきながらするボランテニア
友だちの友だちという縁の糸

草加市 飯土井健夫

自信から風格が出る励まねば
青汁とニンニク朝の起爆剤
戦前に燃えて学んだ夢想う
苦勞人褒めてやる気を燃え立たせ
酒タバコやらず粗食が元氣くれ

札幌市 小沢淳

靖国の歴史の溝は埋らない
寄りそうと孫にラブラブ冷かされ
暫くはアンチ巨人の高枕
本当の旬の味覚も旅ならで
孫泣いてあやすジジババ笑ってる

西脇市 七反田 順子

競馬場無名の馬も直走る

急な用子等に遺した走り書き
競走をさけて通った節がある
着たくなる紅葉色した和服など

八尾市 西川 義明

食卓に松茸並ぶ年金日

皆さんの推薦ですと役が来る
友の通夜行きも帰日も重い足
一瞬の油断に逃げて行くチャンス

府中市 馬場 利子

痛みわかち合う介護の手のぬくみ

思い出を一つ残して爪を切る
極楽へ進む道程たしかめる
花切手心潤すひとりぼち

藤井寺市 吉田 喜代子

為せば成る繁昌亭の幕が開く

今日は皆善男善女になる彼岸
黒枝豆貰ってひとり缶ビール
生を受け未来を掴む赤子の手

泉佐野市 備後 三代子

眼下に今尚残る父母の笑み

何もかも並べて侘し老いの卓
吾が家まで水買うくらいいいじゃるか
あべこべにシャツ着てこれも今風か

紀の川市 木村 徑子

ゲームに夢中新語べらべら宇宙人

これ宇宙人じいとゆつくり話そうよ
詩の虫やおら脱皮を企てる
冷え込みに錦秋待っているリュック

堺市 荻野 像山

美人薄命病の妻へ元氣付け

生む前に性別分かる愛想なさ
ごみ袋狙う鴉をねらう猫
動物の本性食うか食われるか

羽曳野市 永田 章司

譲歩する糊代もたせ一次案

賭け事で勝ったお金にや足がある
遊歩道そぞろ歩きのおいふたり
禅譲の社長の椅子に重いつけ

富田林市 古田 千華

芒ヶ原仰ぐ夜空に黄金ぼん

秋雨の朝のコーヒーマリカン
バスツアー三泊四日飽きてくる
名声はほのかに匂い価値がある

横浜巖田 かず枝

ただいまにおかえりの声平和です

中高年だけが体力向上し
だだっ子がこれ見よがしに核を持ち
白黒を付けず流れに逆らわず

藤井寺市 西村 栄一

横浜市 中尾 哲代

夫婦して越えた苦勞の幾山河
初恋の古い話を聞かされる
しんみりと苦勞話を聞くオデン
青春を謳歌しているノーマーク

吹田市 二宮 栄子

しがらみを捨て晴ればれと青い空
仏さま家で育てた花が好き
母さんは夢の中でも光ってる
留守番の夫を地酒でよろこばす

河内長野市 黒岩 靖博

空っぽの財布の中はカードだけ
目もくらむ絶壁に立つただ一人
自信家は大胆過ぎて墓穴掘る
師走きて金も心も急ぎ足

府中市 岩本 雅代

松茸の匂う祭りで景気呼ぶ
仲秋の月に邪心を吸込まれ
秋祭り都会の匂い持ち帰る
臥す夫に元気をくれる新総理

尼崎市 小池 幸子

今年また友の温もり葡萄来る
面構えだけで図れぬ秘めた内
墓参り田舎の秋に会いに行く
何時同居心揺れつつ一人住む

道草が出来ぬ集団下校です
秋深し落葉が庭を占拠する
赤ちゃんがママの寝息を聞いている
新米のバイトにレジが進まない

吹田市 早泉 早人

神様に手玉に取られいまひとり
紅葉に触れなくなつて途中下車
包んでもはみ出してくる僕の意地
公園の鹿と戯れ秋泳ぐ

檀原市 藤永 実千代

手に掛けた虫に夢中で詫びを入れ
科学の目常識までも覆う
ぬるま湯の心地好さから抜け出せず
目一杯家を片付け旅に出る

府中市 藤岡 ヒデコ

どの皿に盛っても似合うサツマイモ
澄んだ空ヒソヒソ話までひびく
コウノトリそれより先に縁むすび
母さんは素顔の方が美しい

藤井寺市 増井 ヨシ枝

町中の墓で狸と鉢合わせ
独り居へ時間区切つて電話する
秋夜長父母を送つて爪を切る
逢いたいのに明るい笑顔の君だから

山鹿市 阿部 ミツ子

秋彼岸今は亡き子の歳かぞえ

墓参り何処も同じ彼岸花

つらつらと思ひ出のみが走馬灯

天国で巨人戦見て嘆いてる

東かがわ市 中塚 寿々女

炎天に球児声援天を突く

活性を目指しお披露目総踊り

知らぬ間に一輪咲いて散る芙蓉

覚書亡母の歴史が書いてある

宇部市 高山 清子

もどけない過去と知りつつ振りかえる

騙されておこう平和でいたいから

一言の温みにふれて開く花

踏み込まぬ距離を保ってお付き合い

松江市 相見 柳歩

約束が消えてころころ転がった

折れたクギ出過ぎたクイは打たれない

思ひ出が湧き出るような夢を見た

憧れの君は島根の人魚姫

雲南市 福岡 博利

休肝日料理をはめてチャラにする

五欲みなすてろだなんて殺生な

秋風に少し茗荷を食べすぎた

蹴つまずく同じところで笑わせる

松江市 柏井 日出子

みやこ風音のひびきにいざなわれ

年輪のベン乙女気は尚抜けず

ロケーションいいねと松江ほめたひと

はらはらとドキドキをして今が旬

鳥取市 近藤 秋星

松茸を食わなくなつて死にはせぬ

駆け足で来て駆け足で逃げる秋

隣まで核が来ている追つてる

ホームではサンマ半分しか付かぬ

鳥取市 山口 千代子

野に咲く花のように自然に終りたい

亡夫のお陰で楽に暮せる有難さ

月拌む一度で惜しい二度三度

赤ちゃんの仕草見るとつい笑う

鳥取市 中宇地 秀四

正論に聞く耳持たぬ横車

極楽は二合の酒で高軒

色付の眼鏡三色持っている

失敗を糧に浮世の鯛を釣る

鳥取市 谷岡 清子

栗ごはんなつかしすぎて腹が出た

虹の橋渡つて見たい友の顔

たよれない絆一人でがまんする

彼岸花赤く燃えてる娘を思う

倉吉市 酒井 美美子

口実につまpping喉がからからだ
背く子にあわてて愛の手をのばす
介護してされて冥土が近くなる
古希を過ぎ川柳つくり夢中です

倉吉市 福光 京子

鳩バスに乗った気分です心抜け
せかされて左右見上げる川下り
いろは坂道を譲ってバス下る
バイキング色よく盛って満ち足りる

境港市 中井 虎尾

あの美女がなんであんなに厚化粧
貧乏の神は居るけど神無月
大切な本は開かずかざるだけ
世の不満たえてふくれた肥満体

米子市 猪森 スミエ

足腰を鍛え明るい夢を追う
小銭でも何時か物言う貯金箱
地酒なら何処にも負けん米所
おらが村空気がうまいのが自慢

鳥取県 岩崎 和子

つま恋に行つたつものライブ見る
電磁波を吸うとサボテン夫揃え
一安心ペースメーカーいい動き
百華園あれこれ良しと鉢ふえる

鳥取県 大田 勝誉

母が今和解の鍵をおいて逝く
梨選果汗で固めた愛を知る
民営化簡保の宿はもう終り
おひとよしすぐ回りから見抜かれる

和歌山市 根田 よしこ

運動会えがお一番良くやった
サスペンス殺しはドラマだけで良い
百年後癌も結核並みになる
デイサービス老母がおしゃれをする日です

和歌山市 山田 侃太

救急車近所の顔も連れて来る
レントゲンに人工弁が生きている
母撫でる息子だったと自戒する
病室で母の半生聞いている

和歌山市 坂部 かずみ

吃驚目長閑な朝の目玉焼
百円で天下の秋の秋刀魚焼く
熱燗で今日の機嫌を問うてくる
デジカメで還暦過ぎの写真集

海安市 小谷 小雪

木洩れ日が心の傷を揺らし去る
ひとり鍋この次君とご一緒に
美しい国のわたしもあいまいに
さんま焼きドコサヘキサエンサン食う

岩出市 村中悦男

今日生きる世間とかいう輪の中で

小話を拾うゆとりの散歩道

しっかりと過去だきしめる妻である

名月の演出をする雲がある

奈良市 尾畑なを江

祭の夜明日のことなど知らぬ顔

名月に台風というめぐり合い

からみ合う意見ひとつに昼となる

曼珠沙華噴水のごと炸裂す

生駒市 小西稔

お互いに譲る心が和を保つ

うまいもの食べてストレス発散す

職場でのストレス解けてマイペース

彼岸花きれいな花に毒ひそむ

神戸市 木村忠義

親戚な人の欠点目につかぬ

友と逢い一人で入りにくい店

書名から買ってしまったほぞをかむ

妻の留守嫌なことならにわか雨

神戸市 武田恵美子

髪切られ鏡みて泣く新学期

期限きてあわてて作る愚作なり

可愛い手電車にむかいふっている

女だから一度きれいといわれたい

尼崎市 桑原東園

秋祭り水は黙して映す月

ネクタイを緩めさらりと嘘をつく

電車発ち無人の駅は残暑のみ

マイナスをプラスに変える老いの智慧

尼崎市 古川正子

懐かしいおしろい花のよく咲いて

猫じゃらし雨に一息入れて咲く

秋祭りお宮の旗もあちこちで

金木犀風に香りの乗ってくる

加東市 安達厚

有難いありがたいとて生きている

ごそごそはするが仕事は出来ません

平和なら命は長い方がよい

病弱をかばい続けて八十路ゆく

加東市 岩本美緒子

遺してくれた恩給という有難さ

遺伝子かペンより筆を嬉しがる

松茸汁一切れあった味ほんま

移ろいて窓開け閉めの秋深む

篠山市 谷田多美子

赤白の水引草に明日の夢

コスモスをいっぱい活けて亡夫笑顔

芸のない猫が息子の家の主

おみやげは栗に枝豆松茸なし

三田市 上垣 キヨミ

大阪市 平井 露芳

お昼寝が日課になって越えた夏
諭吉様お越し下さい我が家にも
飲み忘れしない薬が無いかしら
孫の絵は天才画家の素質あり

兵庫県 永井 かほる

味まつり年配さんは豆を買い

スーパ―消ゆりハビリつもりペダルふむ

姉黄泉へ秋の侘しさ増してくる

一雨毎目に見えてくる秋野菜

大阪市 寺井 弘子

美しい国へのドラマ期待する

奥行きを誇る情緒の京町屋

明朗会計店の暗さが気にかかる

アンケート年齢書く手立ち止まる

大阪市 吉内 福世

三世代夫婦そろたよ孫の式

一病と仲良く過ごす丸い月

朝早く挨拶交わす散歩道

草引きも日課の内に入れて置く

大阪市 吉川 弘泰

この角を曲がれば明日は年明け

暮れ近いもう餅搗きの事夢に

すす払い会社の歴史宙に舞い

暮れが来てゴルフコンペで飛び希み

山登りゴミがあるから登るんや
さんずいに京でも京は暑おます
宝塚六甲おろしも教えます
少子化にどないするねん産 小医

大阪市 平嶋 美智子

おおらかな心の人で好かれてる

芯の強さ包みこんでる優しい目

友思えば友のかあさん目に浮かぶ

くすぶつただけで一つの恋終る

大阪市 岩崎 玲子

枕元着替えバッグの妻の愛

コンペ日を妻に告げるもタイミング

賞品が妻好みだと帰路嬉し

ストレスの解消ゴルフ高くつき

大阪市 吉田 富美

風呂敷は包んで魅せる美しさ

手塩かけ咲けば愛しい貴船菊

嘘のない顔が明るい通学児

万華鏡のぞけば見える父母の顔

河内長野市 宮守 正博

瓜を揉む母九十の味たしか

送別会住めば都と励まされ

先月も聞いた来月頑張ると

発泡酒舌がすっかり慣れてきた

河内長野市 内海綾乃

病氣して感謝の気持家族愛

豊中市 荒巻夢

リフォームで全額出した夢の中

運動会トンボ舞ってる子らの上

秋晴れに心うきうきハイキング

岸和田市 坂口英雄

朝刊も昼まで寝ている日曜日

美しい国で泣いてる高齢者

少年が自信ないから群れている

お祭りが済むと寂しい街になる

高槻市 安田忠子

虫歯無く百歳までも持つらしい

人人のまつりに酔った風の盆

遅い子に声援おくる運動会

近頃の事件はドラマ見てるよう

高槻市 笠原乃りこ

金木犀の香りの中で長話

手術室からアナタが戻る生きている

親が子親子殺す人間か

お若いね言われ手鏡見てビミョー

豊中市 源田啓生

赤ちゃんにみんな眼が寄る医のロビー

ジーパンがずり落ちそうで落ちそうで

人生は泡だったのかビール缶

捨てるときこんなに軽いビール缶

それぞれの窓にひとつの家族あり

こんなにちはこのひと言を貰う道

賢治の詩聞こえてくるよ赤い月

秋来たる道ゆく子らの声澄める

豊中市 谷川勇治

明日のない出会いでしたね羊雲

老いの春たくあん囃んで拗ねている

秋の暮恋の手形を焼いている

キューピッド間違いでした組合せ

寝屋川市 森田麗

安らぎを花一輪に託す朝

孫が来て挨拶せぬと拗ねるポチ

追いかけた恋もあつたね影法師

経あげる力を貸してくれそうで

寝屋川市 小嶋みさと

試練こそ我が本質が試される

亭主留守こんなのどこで良いのかな

夢の中食べたいけれど食べられず

人間の欲にまみれた構図あり

寝屋川市 長濱賢山

柿の実が熟れても子供知らぬ顔

妻の癖ちよつと隣に行つたまま

腰を曲げた母の辛抱見て育ち

作品の出来は問うまい老いの趣味

羽曳野市 松本 静子

日本国銃は持たない国にして
のど飴をなめて歌うの鳥唄を
銃をもち戦った兄今は亡き
秋雨に相合傘で歩きましょう

羽曳野市 仲谷 真一

人生が二毛作ならいつ休む
坊さんも青いハンカチ汗をふく
名月や心洗わる秋の空
運動会校門前で記帳する

枚方市 二宮 紫鳳

テーブ切る孫の笑顔を写メールに
食欲の秋が理性を狂わせる
十五夜の月を肴に夫婦酒
松茸の香りに食欲うなり出す

箕面市 寺井 柳童

淡々と青いハンカチ拭う汗
初競りに高値にぎわうさんま漁
新米にのるのが怖い体重計
横に居るだけで安心介助犬

八尾市 田中 トシエ

雑草は今日も強気で生きている
紅葉散り噂も散って秋深し
価値観の違い織り込むいい仲間
捨てきれぬ未練がましい衣更え

八尾市 前田 紀雄

美しい恐ろしい国紙一重
みな元気物干し竿が悲鳴あげ
かけっこへ双眼鏡とカメラ追い
休肝日金木犀に酔いました

大阪府 畑中 節子

彼岸花暦通りに土手飾る
秋深き法事の膳に茸飯
鯖寿司作り料理の好きな母偲び
山装い額縁となる窓の枠

大阪府 小栢 こずえ

野菜より草に効いてる肥料です
早く芽を出しておくれと雨の中
降って欲し晴れて欲しいと気まま言う
欲しかった花も増えすぎ困ってる

大阪府 西川 冷子

核実験名月よりも気にかかる
遺書作り余命計算答え出す
ボヤ騒ぎ階段降りる十五階
パーカッション木魚ひと役列に入る

京都市 西村 益子

食卓に今日の脇役芋のつる
アクセサリーの代りに下げる老眼鏡
太り気味茶碗を代えたせいかしら
金木犀ここに居るよと自己主張

北名古屋 片岡 文男

動悸ぐせ医者に聞いてもやはり歳

傘だけがまた乗っている終電車

ジーパンをいっぱい張った若い肌

ワイシャツに野球帽子の案山子立つ

静岡市 中西 雅

笑顔みせ心の湿り乾かそう

散歩道鼻をくすぐる木蓮の香

仏様彼岸だんごと仲が良い

一円玉猫の貯金が満杯だ

静岡県 中田 尚

まだまだと言ってるうちに十二月

ITの波に負けたらゴミにされ

ケイタイに素顔をそっとのぞかれる

草も木も地球も明日は知りません

横浜市 金森 徳三

改革は骨太老いは脛細る

健康に悪いと書いて売るたばこ

祈らずにおれぬ今夜の月の冴え

ゼロ金利解決たが遅し預金ゼロ

藤沢市 加藤 スズコ

日の丸に泣いた遠い日異国の地

伝統を子供御輿で盛り上げる

昭和の世花を咲かせた人が逝く

収穫にうなる感謝のブルドーザー

四度目は仁王になって平手打ち
裏の三毛人がよすぎて子沢山
定年後ライバルと酌む縄のれん
ダイエツト今朝は秤に褒められる

取手市 葛西 清

第58回 三原市神明祭協賛川柳大会

と き 2月11日(日) 10時開場
と ころ 三原市市民福祉会館
(JR三原駅前南へ歩3分)
接 拶 備後番傘 八島 白龍
祝 辞 三原市教育長 植木 章弘
広島県川柳協会会長 中村 義雄
事前投句 「働 く」 三浦 宏(呉市)選
事前投句・欠席投句共1000円同封1月20日必着
宿題と選者 各2句 出句締切 11時30分
「招 く」 小島 蘭幸(竹原市)
「開 く」 中村 義雄(広島市)
「丸 く」 池 森子(富田林市)
「安 く」 定本 広文(広島市)
「高 く」 赤井 花城(神戸市)
「厚 く」 森中 惠美子(摂津市)
「広 く」 田中 新一(大阪市)
会 費 2000円(昼食・発表誌呈)
懇親会 3000円(同所7時まで)
投句先 〒723-0012 三原市旭町2丁目1-8
八島 白龍(0848-63-2947)
主 催 備後番傘三原万松川柳会

川柳の仲間をふやしましょう。

『川柳しませんか』を御活用下さい。
10部単位で事務所まで申込んで下さい。

(1部100円、送料別)

川柳塔社(06-66629-6914)

愛染帖

新家 完司 選

大阪府 古今堂蕉子
考えてるだけでは出来ぬ夕こはん

(評) 毎度のことではあるが、「さて、今夜のおかずは…」と思案してしまふ。たまには、「わたし食べる人」になりたいものである。

羽曳野市 徳山みつこ

夫の背をいとしく思ふ通夜帰り

(評) 亡くなった人を偲んでいるのか、黙って夜道を歩む夫。通夜とか葬儀は、普段は意識していない「いのちの絆」を考えさせる。

豊中市 谷川 勇治

星生まれ母が生まれて僕がいる

(評) 地球が生まれて四十六億年。人類が生まれて六百万年。「私を産んでくれた母」に到るまでの、壮大な時間と空間を想う。

東京都 岸野あやめ

大根とお芋が好きで達者です

腹の立つことあり秋の蚊を叩く
万歩計買ったからには歩かねば

京都市 高島 啓子

走ったりしない一台遣り過す

嫁さんのくれたブラウス着ておこう
気がついた物から入る旅袍

京都市 中野 六助

静寂を売り物にして町おこし

マヨネーズ絞るみたいにいかに知恵

藤井寺市 鈴木いさお

満月もずっと続けば飽きが来る

美作市 小林 妻子
お彼岸くらい覚えていろと曼珠沙華

奈良県 渡辺 富子
美しい日本へ英語溢れ出す

鳥取市 録沢 風花

老眼に銀河も月も遠くなる

枚方市 海老池 洋

考えるうちにうとうととしてる午後

羽曳野市 酒井 一壺

嫁さんに叱られ犬を蹴つ飛ばす

東かがわ市 川崎ひかり

老いるとは口笛までが息切れる

松江市 川本 畔

どうしても姑の仏飯食べられず

大阪府 小栢こずえ

ダリア咲く浄土のような里に出る

枚方市 伊達 郁夫

地球儀が重い命を乗せて浮く

藤井寺市 太田扶美代

友達がいっぱい出来たバスポート

尼崎市 春城 年代

相槌を打ってくれない人という

尼崎市 骨の講義解つたような顔で聞く

わたくしの曾孫やっぱり歌が好き

尼崎市 山田 耕治

せいた朝仏の前を素通りし

気まぐれに花鉢買ってすぐ枯らし

和歌山市 楠見 章子
新聞に載らぬほととのポランティア

(評) 寝てもらおうためではない。認めてもらいたいからでもない。自己満足でもない。「少しでもお役に立てれば」という思いだけ。

八尾市 村上ミツ子

スランプのうちにゆっくり寝ておこう

(評) 何をやってもうまく行かない。雨のち嵐という日々がある。スランプは、「ゆっくり休みなさい」という身体からの信号かも。

四條畷市 吉岡 修

残高が底つくころに死ねばいい

(評) その通り！なのだが、そのタイミングがなかなか難しい。残高が底をついたのに、寝たきりで生きていたら困ったことになる。

堺市 村上 玄也

金髪で鼻輪していて日本人

(評) 個人の好みに口出しするのは野暮だが、もう少し何とかならんのか、という輩がいる。自由な国の有り難いところではあるが…。

弘前市 高瀬 霜石

吠える犬吠えない犬も繋かれる

ノーカット版ではお見せできぬ過去

和歌山市 木本 朱夏

リモコンを奪い合つて右派と左派

手に汗を握つて遠い日の記憶

河内長野市 坂上 淳司

乾パンの時代の育ち下着白

月光の曲聴きながら白ワイン

八王子市 播本 充子

ばた餅とおはぎの境目を探す

この指にとまらぬ人も大切に

三田市 堀 正和

飽食のツケが二トの数だろう

児へ聞かす民話補足がたとと要り

池田市 上嶋 幸雀

駆けっこもおててつないでゴールイン

買い込んだ本持て余す秋の夜

和歌山市 古久保和子

未来とは流線形に柿の種

のら猫の由緒正しきブルーの瞳

鳥取市 石谷美恵子

客で来た叔母がうるさく指図する

運動会わたしはヒザの水抜きに

大阪市 前 たもつ

怪我をして力八分のホームラン

鳥取県 谷口 次男

ベレー帽似合う身内はおりません

西宮市 門谷たず子

スタチタラして一人にサンマ大きすぎ

いつつけた傷か青アザ二つ三つ

松原市 玉置 重人

ゲンがええバスや美人の運転手

チョイ悪の顔でメールを打っている

芦屋市 黒田 能子

妻だから他人の言わぬことも言う

ややこしいことは明日また考える

鳥取市 夏目 一粹

椰掄という字にからかわれ辞書を引く

気に入りの万年筆もご臨終

シドニー 坂上のり子

適当に音ある街が住み易い

柿の葉鮎おいしかったとレジで告げ

唐津市 市丸 晴翠

老いの身にもう限界の自助努力

顔の皺増やしただけのダイエツト

横浜 金森 徳三

一病の痛み息災とはいかぬ

入れ歯には頑固な歯ぐきなじまない

米子市 政岡日枝子

方言で呑むから地酒なおうまい

酒少し許してもらい癌を病む

河内長野市 水谷 正子

自覚なし癌は突然背を叩く

松江市 相見 柳歩

自己流で絵本を読んでいる童

三田市 久保田千代

カリロリ表添えて秋刀魚が売り出され

人相を見る犬がいて遠回り

尼崎市 田辺 鹿太

妻の留守独りの夜をどう生きる

使い減りしない頭と足の裏

大阪市 森田 明子

アンテナを張る飼ひ慣らされぬように

部屋中を磨いて少し歳をとる

堺市 奥 時雄

舌打ちをしそうな顔で席譲る

握手するのにもたついた左利き

寝屋川市 太田とし子

居酒屋で禁酒禁煙して帰る

刻々と月日が逃げる落葉焚く

大阪市 神夏磯典子

ラーメンが恋しくなった虫の声

我捨てるとんちゃん騒ぎ秋も散る

大阪市 板東 倫子

心から笑える国で笑いたい

小芋ホクホク月はなくてもいい宴

寝屋川市 籠島 恵子

焼き芋のアツアツ食べている独り

倉吉市 松本よしえ

少し無理しないと若さ消えて来る

大阪市 小谷 集一

熊本県 岩切 康子

台風を逃れて窓にかぶと虫

大阪府 初山 隆盛
三八銃本気で撃った罪がある

岡山県 井上柳五郎
外地より共に還った友が逝き

八尾市 高杉 千歩
菌を抜いてお好み焼きの日が続く

京都市 都倉 求芽
秋がきてもう雑草も気を抜いた

堺市 山本 半銭
スランプの机上うつすら白いもの

鳥取市 岸本 宏章
愛大家だろう袋を提げている

橿原市 居谷真理子
日本製の首に座蒲団二つ折り

海南市 小谷 小雪
はめられて買いそうだから遠回り

三田市 北野 哲男
日々好日川柳だけが肩にのる

和歌山市 たむらあきこ
たましいの置場を移すだけの旅

吹田市 穴吹 尚士
雑踏に押され揉まれていて孤独

大郡山市 坊農 柳弘
帰る家あるうち帰る千鳥足

鳥取市 武田 帆雀
真ん丸い人でどちらにでも転ぶ

茨木市 藤井 正雄
古曆嫁がせた日の赤い丸

篠山市 円増 純子
花オクラつるりと喉を通り過ぎ

黒石市 相馬 一花
喫煙の長所を探す愛煙家

倉吉市 福光 京子
草津節歌うガイドに祖母偲ぶ

香芝市 大内 朝子
戻らない今が過去へと流れゆく

高槻市 左右田泰雄
散歩する私と犬の長い影

米子市 白根 ふみ
他人の児もちっちゃいだけで可愛いな

藤井寺市 鴨谷瑠美子
長靴をはけば水たまりを探す

弘前市 今 愁女
雲上からみれば整然たる下界

姫路市 古川 奮水
もう二千高けりや見える太道雲

三田市 石原 蔵子
善行を褒められた子が照れている

松江市 松浦登志子
値段見て品定めして通過する

大阪市 津守 柳伸
どちらでも良いが優勝セール待つ

東大阪市 谷口 義
飯の世に本物の友達がいる

富田林市 中井 アキ
酒が出て漸く和む初対面

弘前市 福士 慕情
旗色が悪いと黙る癖がある

鳥取市 中宇地秀四
生きてます餌を貰えば尻尾振る

大阪府 桑田ゆきの
消灯を待つて自己流ストレッチ

大和高田市 鍛原 千里
外人に大阪弁で道聞かれ

高槻市 傍島 克治
落ち着かぬ平均寿命通り越し

弘前市 宮崎ヒサ子
旅行前朝の鏡が晴れている

西宮市 坪井 孝一
忘れてたゴミを出すのと休肝日

富田林市 大橋 鐘造
生きているまさかまさかの世の中で

鳥取市 西川 和子
昨日まで唄った人のお葬式

高槻市 富田 美義
生き残りゲーム医療費たんと要る

西脇市 七反田順子
菊手入れ咲けよ咲けよと撫でてやる

弘前市 高橋 岳水
切り花に育てた菊を切り惜しむ

東かがわ市 池内かおり
大学出なのになみみずが這うた文字

鳥取市 土橋はるお
職転々矢鱈上司とぶつかつて

奈良市 矢野 良一
相合傘今日の明日香路恋模様

和歌山市 田中 すず
邪魔をしないでいま私は詩人です

寝屋川市 富山ルイ子
来年の約束をした塔まつり

鳥取市 岸本 孝子
のこのこと出てゴキブリが叩かれる

唐津市 宗 水笑
子の客へ田舎料理と母は詫び

神戸市 山田婦美子
休憩もせずに亡母の腕時計

交野市 山川日出子
ちゃん付けであがりんさいと故郷の伯母

東京都 清原 悦子
錆びてきた鍋も磨けばまだ元氣

三田市 上垣キヨミ
写経する気持になれぬまだ青い

尼崎市 春城武庫坊
傘寿洋々卒寿白寿の夢を描く

相生市 村木 信子
神さまに終止符あすけ今日はしやく

枚方市 丹後屋 肇
妙針に命を削るアスリート

米子市 小塩智加恵
苦勞して拾った栗で孫を待つ

和歌山市 武本 碧
お手上げも万歳もする腕二本

鳥取市 田村 邦昭
拳には泣かぬが人の情に泣く

唐津市 坂本 蜂朗
悔やんでも日記にそれは記さない

西子市 黒田 茂代
重くない思い出だけを抱えている

八尾市 西川 義明
荒れる子へ熱いハートでぶつつかる

大阪府 澤田 和重
ぶつつらばうな友の祝辞が温かい

和歌山県 森下よりこ
揉み解す笑い忘れた今日の顔

八尾市 中島 春江
同じ木にうま味のちがう柿がなり

唐津市 北村 松風
絵手紙と写生の柿も届く秋

鳥取県 竹信 照彦
宴席は二時間飲み放題がいい

寝屋川市 森 茜
ありのまま生きていくのに骨が折れ

富田林市 片岡智恵子
遅刻してお客のように椅子に着き

松江市 三島 淞丘
オレ流を貫き通し黄昏れる

和歌山市 上地登美代
敬老会終えて入れ歯の忘れ物

米子市 林 瑞枝
病むベッドで医師のネクタイ褒めている

唐津市 岩崎 實
為すことを教えているが手がつかず

箕面市 出口セツ子
老人の独居へ届くおぼんざい

和歌山市 寒川 武
一大事妻が民法読んでいる

倉吉市 米田 幸子
自信家の背骨はしゃんと伸びている

岸和田市 井伊 東吉
会員になれとせわしい葬祭屋

河内長野市 針生 和代
老人の溜息混じる市民税

加東市 中上千代子
普段着になると世間が広くなり

大阪市 福岡 末吉
意を固め一氣にちぎるカレンダー

倉吉市 山中 康子
頂点で胡座をかいている誰か

堺市 西村りつえ
ワイングラス甘い言葉を待ってます

和歌山県 村中 悦男
まあまあと思う間も草はのび

岸和田市 中岡 喬代
山びこにおういと山のゴミ答え

吹田市 大谷 篤子
修理して生きねばならぬこの命

大阪市 松尾柳右子
食べ物に好き嫌いない凡夫婦

誹風柳多留一篇研究 16

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清 博 美

97 葉桜ハ吞一式のやから出る

小栗 一式は、いちずであること。一方的なこと。ひたすらなこと。(日)

花見時には、もちろん酒を飲むのが目的の奴もいるが、純粹に桜を愛でようとする人も多い。ところが葉桜になつてもなお繰り出してくるような奴は、とにかく酒を飲むだけが目的という輩なのである。

葉さくらを見よふてハ無ひ吞ふなり

清 賛。

天七 85

98 人目をもおもつたハ後家初手の事

伊吹 亭主が亡くなつてしばらくは、世間体もあるので慎ましくも貞淑な後家だつた。しかし去るものは日々に疎して、次第に言動が大胆になり、男閥係へと發展するのは時間の問題である。

あの後家の数珠でぶつたハ初ての事 八28

山田 賛。それから後は、

さるものハ日／＼にと後家はさかん也

清 賛。

一四 8

99 十五日置くとハつづみ長じ也

伊吹 長地は、能楽の囃子の小鼓の手組みの一つであるが、この場合は鼓の縁語として使つており、意は単に長いというだけ。日比谷

の鍋島紀伊守の松飾りは、藁鼓の飾り物で有名だつた。ふつう一月七日に取り除かれる門松であるが、この藁鼓は十五日まで飾られていたので、鼓長地となる。この例句の、

たんぽ、ハ茗荷畑へ暮に出来 四三 18

の「たんぽぽ」を鼓の音とする説が多いが、たんぽぽの別名は鼓草である。鍋島家の定紋は抱茗荷。

松風の半月ッ吹いて人だかり 二二 38

清 賛。

100 おまへよく下女をと跡のむつかしき

伊吹 下女と浮氣をした亭主を問詰める女房。このあとの解決の難しさは、言うまでもない。斡旋した下女が宿の叱責ともとれる。下女でいしゆ帯ひろいだけでめられる

二三 14

山田 前半賛。下女の宿が亭主を何がなんでも「お前」とは言まい。

清 同右。

101 車引半てんかぶるつよい暑氣

伊吹 半纏は裾の短い上着で、印半纏や法被とも言う。余りの暑さに耐えかねて、強い日

差しを避けるため半纏を頭から被る車引き。
例句、状況が違っているが。

にわか雨はんでん車引いて行き 安五松 3

清 賛。

102 尻っぱから先キへ書出すとりの絵馬

伊吹 鶏の絵馬は、毎月晦日に竈の神さまを
祭る荒神棚に、松の枝とともに献ずる絵馬。
この松は荒神松で、松に胡粉をまぶしたもの
である。正・五・九・十二を主な祭月とす
る。動物を描く場合、頭や顔からが普通の
だが、祭日が晦日であるため、尻尾からとい
う表現になったのだと思う。

にわ鳥のせき書キ正五九月うれ 天五松 1

山口 賛。煤払いの日に竹と一緒に絵馬を売
りに来たらしい。

晦日に絵馬を荒神ハトツケイコ 新二 1

小栗 尻り毛から先キへ書出す鳥のあま

宝九仁

の輪講の時、実際に絵馬を描く時に、よく目
立つ大きな尻尾から描くだろうという意だと
書いた気がする。考え変わらず。

清 同右。絵を描く時の手順で、祭日が晦日
は考え過ぎならん。

103 百人の中で西行そきら也

伊吹 素綺羅は、きらびやか(綺羅)でない
衣服の意で、粗末な衣服。高位高官が綺羅星
の如く並ぶ百人一首の作者の中で、「86嘆け
とて月やは物を思はする かこち顔なるわが
涙かな」の旅の漂泊歌人西行法師は、目立つ
て粗末な衣服だったであろう。

百人の中のそきらハかこちかは 安四智 8

小栗 賛。百人一首の読み札の絵の觀察句で
はないかと思う。「光琳かるた」を見ると、

85俊恵法師、87寂蓮法師に比べ、86西行法師
は墨染の素綺羅である。

清 小栗説、なるほど。

104 のぞかれて顔をつつこむみゝたらい

伊吹 耳盪は、左右に耳状の柄のついた盥で、
多くは漆器であり、口や手をすぐの用に用い
る。初鉄漿の句。お齒黒を初めて塗っていて、
その顔を覗き込まれ、恥ずかしさのあまり見
られまいと耳盪の中に顔を埋める女性。
まつ黒なぶくくをするはづかしさ

安八礼 2

清 賛。

105 牛かたハしりへ廻ッてしかるなり

伊吹 馬方が馬の尻に廻って叱ると、蹴られ
る恐れがある。牛方は牛の頭で叱ると、悪く
すると角で突かれるかもしれない。そのため
安全な尻へ廻るのである。

牛かたは三足戻ッてくらわせる 三 28

清 成る程。しかし牛の歩みがのろいとい
うだけではなからうか。のんびりした光景。

106 覚んしたと御針のをひつたくり

伊吹 遊里の裁縫女のお針に、手ほどきを受
けている遊女。身請け、年明けが近いのか、
それとも自力で苦界から抜け出そうと思っ
ているのか。もう判ったと、お針の持っている
衣類を引っ張る。

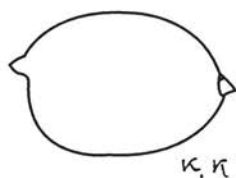
分別が出たかお針の邪尸をする 一四 37

小栗 賛。鑑賞の問題かもしれないが、この
遊女、礎稿のいわれるような本気で手ほどき
を受けているのではない気がする。徒然にお
針の仕事を見ていて「もう覚んした、あち
きにもでんすエ」などと言って、「邪魔し
ないで……」とお針がいうのを無理矢理「引
つたくる」。万句合前句「うるさかりけり」。
清 同右。お針の邪魔をしているのである。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「のい」 川上大輪選

のこのこと粗品の列に二度並び
のこのこと酒の肴になりに行く
真夜中の狸のこのこ芋掘りに
のこのこと熊も出たくはないのです
のこのこと付いて行ったら金が必要
めし時になるとのこのこ現れる
のこのこと生きてとりあえず幸せ
乾杯がすめばのこのこ消えてゆき
どこまでも従いて来るから飼っている
開発の気配に起きてきたモグラ
ゼロの数かぞえのこのこ店を出る
のこのこと出歩く風邪引きを連れて
野良猫がのこのこ跨ぐ鬼瓦
のこのことお地蔵さんも朝帰り
のこのこと出てきてモグラ叩かれる
のこのこと赤信号をわたる犬

唐津市	宗	水笑
大坂市	森田	明子
鳥取市	西川	和子
松原市	玉置	重人
東大坂市	谷口	義
藤井寺市	鈴木いさお	
大坂府	神野千恵子	
鳥取市	上田 俊路	
松江市	銭山 昌枝	
東京都	岸野あやめ	
大坂市	升成	好
和歌山市	古久保和子	
枚方市	丹後屋 肇	
鳥取市	土橋はるお	
大坂市	大川 桃花	
羽曳野市	三好 専平	

「のい」 松本文子選

ビリからの出発 怖いものはない
ふるりの風はのこのこ吹いてくる
のこのこと今さら名乗り出た昔
どこへでものこのこ顔を出したがる
のこのこと浄土への道歩いてる
のこのこと生きて来ましたがこれから
のこのこと手ぶらで行って恥ずかしい
のこのこと金利が少し動く音
寄り添うと月がのこのこついて来る
人間の裏のこのこととほとほと
いいとこに來たと梯子をのぼらされ
のこのこと出て風船は破裂する
悲しみへマイクのこのこ提げていく
のこのこと生きてとりあえず幸せ
のこのこついていたんじやない冥王星
のこのこと出掛けて相手困らせる

弘前市	高瀬	霜石
鳥取市	夏目	一粹
藤井寺市	太田扶美代	
豊中市	安藤寿美子	
大洲市	花岡 順子	
富田林市	大橋 鐘造	
東かがわ市	池内かおり	
和泉市	横山 捷也	
鳥取市	有沢せつ子	
田辺市	大峠 可動	
大坂市	前 たもつ	
和歌山県	辻内 次根	
大坂市	森田 明子	
大坂府	神野千恵子	
西宮市	山本 義子	
出雲市	多久和敬子	

強盗ならどうするんです今頃には
老いてなおのこの出番待つている
のこのことわたしに付いてくる戦後
のこのこと月下美人を観に起きる
のこのこと下美人を観に起きる
のこのことノートの上をだんご虫
道化師の影のこのこと無人駅
のこのこと歩ける足に感謝する
のこのこと出て風船は破裂する
のこのこと金利が少し動く音
のこのこと活断層の上歩く
残照へのこのこ老いを置き忘れる
のこのことが一皮剥ける回り道
のこのことついて来たのは影法師
神さまがこのこ渡る橋がある
押売りへのこのこ猫が顔を出す
のこのこと風が答を消しに来る
忘れた影がのこのこやってくる
混浴と聞いてのこのこついてゆく

秀句

軸吟

豊中市	吉田あずき
鳥取市	田村 邦昭
藤井寺市	太田扶美代
東かがわ市	赤澤 貞月
大阪市	津村志華子
竹原市	石原 淑子
米子市	林 瑞枝
寝屋川市	坂上 高栄
和歌山県	辻内 次根
和泉市	横山 捷也
弘前市	高橋 岳水
鳥取市	土橋 螢
生駒市	飛永ふりこ
藤井寺市	高田美代子
出雲市	吉岡きみえ
佐渡市	高野 不二
鳥取市	土橋 睦子
鳥取市	埴 寛子
横浜市	菊地 政勝
豊中市	江見 見清
和歌山県	牛尾 緑良
犬山市	金子美千代

奥の細道のこのこと迷いこむ
勲章なし亀さんのようだったかな
のこのこと宇宙汚しにゆくヒト科
のこのことを連れてる犬も気を遣い
のこのこと義理を果しに行く会議
どこまでも従って来るから飼っている
もう何も引かぬ足さなのこのこと
のこのこと同じ穴から出る貉
ブライドを捨てのこのこと影を踏む
のこのこと熊も出たくはないのです
のこのこと出掛けましたよいつさき
のこのことやって来たのは勘違い
影までもものこのこ君についてゆく
老いの意地のこのこなんかしてられぬ
道化師の影のこのこと無人駅
のこのこと逆光線を浴びている
百歳がこのこ出ると治まった
のこのこと消した火種が顔を出す
のこのこと登った山を抱きしめる

秀句

軸吟

鳥取市	土橋 螢
松江市	小川 注湖
京都市	都倉 求芽
篠山市	遠山 可住
加東市	中上千代子
松江市	銭山 昌枝
大和郡山市	坊農 柳弘
松江市	三島 淞丘
吹田市	木下 敏子
松原市	玉置 重人
出雲市	森 茂美
寝屋川市	籠島 恵子
出雲市	城 多喜
鳥取市	土橋 睦子
米子市	林 瑞枝
和歌山県	上地登美代
大阪市	榎本日の出
米子市	政岡日枝子
鳥取市	中村 金祥
出雲市	吉岡きみえ
寝屋川市	太田とし子
枚方市	寺川 弘一

ぼろぼろ

伊藤 玲子選



ぼろぼろと人情家だと思わせる
涙ぼろぼろポップコーン弾けてる
ぼろぼろと本音吐いてる電話口
勝ってニコッ負けてぼろぼろ甲子園
ぼろぼろと落とす涙に乘せられる
ぼろぼろと飛鳥美人が薙に泣く
ぼろぼろの悔し涙を糧にする
リストラへ仲間ぼろぼろ消えていく
ぼろぼろの涙のあと虹になる
こぼれ種拾い集めてする推理
ぼろぼろと小銭こぼして日を過ごす
ぼろぼろと落す涙に翼がある
ぼろ酔いにぼろぼろ本音出はじめる
言ひ訳はしないぼろぼろいり卵
ぼろぼろと落ちるものあり十三夜
愚痴るまいぼろぼろ愛が欠けるから
ぼろぼろと不祥事がを締め直す
ぼろぼろと欠けた思い出友と埋め
亡母の忌が近いぼろぼろ秋こぼれ
新史実涙ぼろぼろ十五日
ぼろぼろと噂をこぼす観覧車
ぼろぼろと刃こぼれのする骨密度

忠 彩子 久千代 いさお 和重 黒兎 政勝 柳一壺 美千代 時雄 照彦 まみ子 志千代 六助 一粋 主一郎 章子 千里 四郎 扶美代 碧
ぼろぼろと女涙で勝負する
ときどきは失言もして愛される
ぼろぼろと落とす恥を拾っている
ぼろぼろと地球が欠ける音がする
ぼろぼろの愛の欠片を受けとめる
優しさに触れてポロポロ本音はく
ぼろぼろと赤い石榴の発火する
妻の愚痴混せてぼろぼろいり卵
ぶどうぼろぼろ落ちて秋深くなる
本当の訛ぼろぼろ道
夢引けばむかこ四散す核家族
折角の花を泣かせている雷雨
ぼろぼろの雨へ慌てる用はない
ぼろぼろとこぼす本音を掏り取る
瘡蓋がぼろぼろ剥けて人の子に
住
ぼろぼろと愛を小出しにプロポーズ
ぼろぼろと書き入れ時に空が泣く
ぼろぼろと人間にしかない涙
愚痴の種ぼろぼろ実家に播いてくる
ぼろぼろぼろおばあちゃんの財布
人
ぼろぼろと掌からこぼれていった幸
地
本音ぼろぼろ熱燗の聞き上手
天
ぼろぼろと剥がしてみたいうろこ雲
軸
ぼろぼろと目から鱗のこぼれ秋

時計

丹後屋 肇選



古時計わが家を音で取り仕切る
体内時計ゆつくりしてる夫です
振出しに戻されている砂時計
出番待つ時計の針にある焦り
口喧嘩済んで時計が動き出す
私より長生きしてる時計です
まだ動く手巻き時計を持ってる
遅刻した訳を時計のせいにする
狂わない時計がたく僕の尻
腹時計頃合いだよとベル鳴らす
おしやべりに時計が邪魔をして困る
時計止め巻き戻したいイラク戦
床の間の時計時報に合っている
八十年まだ正確な腹時計
動かない時計も母の形見です
質草に何度もなった銀時計
そのうちに時計回りも死語になる
夢うつ目覚し時計止めてる
わが家では五分進めてある時計
便秘症時計回りに腹を撫で
左から回る時計がいて困る
ストップを許さぬ時計背を押す

美義 柳弘 輝夫 千夫 正坊 東吉 久仁雄 公誠 智加恵 のり子 四郎 哲男 あやめ 淳司 愁女 庸佑 倫子 蕉子 一粋

婆ちゃんのデイズニ時計はずんでる
郷愁が残るチクタクボーンボン
秒針に余命きつちり刻まれる
式次第時計にらんでる司会
キッチンの朝の時計が指図する
遠い日の記憶の中に振子の音
昭和史を語ると動く古時計
夢のある話が好きな鳩時計
無為無策時計の針のうわすべり
酒を飲む時を教える腹時計
ひたすら待つとおこ我慢の花時計
浮き沈みじつと見てきた古時計
臨終を告げる主治医の腕時計
団塊の世代へ落ちる砂時計
編み物へ秋の時計が誘い込む

(志) 千代
徳三
浜丘
遠野
かおり
恭昌

典子
次根
一風
孝一
志洋
充子
一知
(花) 順子

朝子
岳水
修
扶美代
幸雀
北朗
玄也
高瀬霜石

回復へ時計とつてもリズムカ
告白の吐息を聞いた花時計
三台がずれて延々時報打つ
再会のその後は知らぬ花時計
合併の里の時計が動かない
人
ヒロシマが止った八時十五分
地
酔うほどに時計の針が消えてゆく
天
時計コチコチ 死神の好きな音
軸
インターバル時計がへたり込んでいる

大人

録沢 風花選



選挙権行使もせずに文句言う
正直に大人見ている子供たち
いい年をしてと大人が叱られる
子供から見たら大人は嘘吐きや
大人になつたら美人になる顔だ
割り込みの大人を我慢してるレジ
酒タバコやめて大人の仲間入り
無気力な大人にお交すえてやる
反抗期越えて大人になりました
声変り大人びて来た口答え
十字架を背負う大人であるために
立ち直るチャンスが欲しい大人でも
大人から教えてもらう悪い事
ときどきは子供にかえりたい大人
大人にはボロのジバン似合わない
大人にも点をつけたいこの目
しょうもない大人が三面記事を埋め
大人の眼いつも打算で動いてる
嘘つくな叱る大人が嘘をつく
老いてゆく大人ハードル低くする
とりあえず料金は大人です
素直さも大人になると曲がりだす

章司
一壺
不二
章久
哲代
(花) 順子
六助
一粹
(奥) 五月

朝子
昌鼓
敏子
充子
靖博
秀四
晴翠
明子
(岩) 玲子

日の出
霜石
俣子
(奥) 五月
一粹
六助
(花) 順子
哲代
章久
不二
章司

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

主一郎
勝
幸雀
實
碧
かおり
孝一
雅枝
ひかり
可住
四郎
扶美代
茶子
たす子
ミツ子

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

大人びた娘に要教えられ
体だけ大人になつて二十歳
大人への証瞳が濁り出し
人生が少しわかつて枯れていく
背伸びしてレモン大人の振りをする
小遣いをママに貰っている大人
凡人も偉人も一応みな大人
大人にもモラル学ばす塾が要る
世間体ばかり気にするのも大人
いくたびの涙大人に脱皮する
もう大人ですから涙使い分け
お悔やみがちゃんと言えたらもう大人
蹟いて悩んで大人らしくなり
母の苦勞がすこし解つてきた娘
煙草吸わない酒も飲まないけど大人

初歩教室

題一 やつと

三宅 保州

「初歩教室年間賞」決定！

本年十月号の当欄で予告しましたとおり、「初歩教室」欄にご投句いただいている方々の力作に報い、皆様の今後の励みとするため、「初歩教室年間賞」を創設していただきました。その栄えある第一回の受賞者を、力作揃いの中から次の三名の方に決定させていただきました。

(選者 三宅保州)

平成十八年度初歩教室年間賞

物の無い時代に生きた力瘤

藤井寺市 伊藤 アヤ子

初恋の振り子今でも揺れている

松江市 相見 柳歩

今年こそマフラーあげる人探す

京都市 三宅 満子

なお、表彰式は平成十九年一月本社句会の席上行う予定です。

【作句等を詠んだ同想句】

四苦八苦白い頭にやつと句を

美恵子

載りたいとやつとの事で句を書いた

こずえ

やつとこさ出来た川柳みんなボツ

靖博

ひねった句やつと載つたぞ推せん句

賢山

やつとこさ出来た一句がさらしもの

たん吉

締切日迫つてやつと一句でき

宣子

せかされて川柳やつと出来ました

恭代

やつと終えはつとひと息もう句会

はじめ

やつと投函少しのんびり過こせそう

益子

これだけ作句の悩み等の句が寄せられる

ほど、皆さん苦しんでおられるようでお察

します。作句は生みの苦しみでしょうが

良い句が生まれたら楽しいものです。また、

これらの句はその趣味の者のみにわかるい

わゆる楽屋吟で、あまり推奨できません。

【添削・批評句】

原 長い経やつと終わつて会席に

節子

説明調でよくある発想なのでひと工夫して

添 お布施はすみ過ぎたかお経終わらない

原 宿題をやつと出来たか孫が褒め

秀四

作者の位置が分かり難い句になっています。

添 孫に頼まれた宿題やつと出来

原 バス乗り場走つてやつと間に合った

秋星

平凡な発想すぎます。意外性やユーモアを添 待たされてやつと来たバス回送車

原 やつと出た名月差して酌む美酒 像山

添 待ちかねた名月みんな酔うている

原 やつと出た雲のあいだにまるい月 孝子

俳句調すぎます。作者の思いが欲しい。

添 やつと出た名月だから飽かず見る

原 老人会やつと役目の荷が下りる 智加恵

どうしてか詠み込みたい。

添 老人会も定年があり役終える

原 間髪を容れずメールの返事来る キヨミ

「やつと」の句とは言えない。例えば

添 息子からやつとメールが来た安堵

原 初メールやつと送って返事待つ 孝明

添 やつと送ったメール電話で確かめる

原 筆無精やつと来ました子の便り (信子

「筆無精」と「やつと来た」が重複気味

添 催促してやつと来ました子の便り

原 やつと得た穏やかな日々あつてお茶 のり子

「やつと得た」理由も詠みたい。

添 子が巣立ちやつとゆつくりお茶を飲む

原 ややこしい話の目鼻やつとき 千華

なぜ目鼻つくのか詠み具体的な句にしたい。

添 ややこしい話も目鼻つく師走

原 子供達やつと社会人肩の荷おり 綾乃

リズムを整えましょう。

添嬉しくて淋しいやつと子が巢立つ

原 やつと出た芽を摘んでいる親世界 映子

添 やつと出た子の芽を摘んでいませんか

原 やつと顔出して掘られて成れぬ竹 松風

添 やつと顔出した竹の子直ぐ掘られ

原 ゴーヤかなやつと下がった血糖値 道子

添 ゴーヤ食べ続け下がった血糖値

原 巢立ち行きやつとはずせる羽目少し 冷子

添 子が巢立ちやつと少しは羽目外す

原 遣り繰りでやつと夢みた旅に出る さとえ

添 へそくりを出し合いやつと旅に出る

原 夏服がやつと仕上がりもう秋で みち代

添 夏服が仕上がったころ秋になり

原 家康を全巻読破やつとする 真一

添 家康をやつと全巻読破した

【少し工夫すると佳くなる句】

逆上がりようやく出来た子の笑顔 イセ

同想の句が今まで何句かあり残念です。

念願の我が家の庭で虫の声 藤朗

子 離れでやつと聞こえた虫の声 弘子

子 産んでやつと女の貌みせる 徑子

子 が出来てやつと女の顔になる (河) 洋子

以上の句は佳句ですが同想になりました。

離職後にやつと手にした青い空 俊子

一般的には「定年後」の方が納得ですが

団塊の世代もやつと息をつく 幸

定年とか子離れとか具体的に詠みたい。

スターの名三三悩んでやつと出た クックバラ

「三日考え思い出し」という詠み方も

原 おさまつてやつと出て来た二トロ錠 千代子

添 発作治まつて出てきた二トロ錠

原 子が巢立ちやつと二人で歩き出す 満子

添 やつと子が巢立つて目指す共白髪

原 脱皮してやつと保護色脱ぎ捨てる 幹子

添 保護色をやつと抜け出す気の脱皮

原 リハビリの甲斐ありやつと歩けます きぬ子

添 リハビリでやつと歩けた日の笑顔

生き甲斐をやつと見付けてフラダンス かずみ

「見付けた」にしたい。

探し物やつと見付けた七十路 紀世子

結語を「……ときは古希」でどうですか

職がありやつと卒業する見込み 淳

「職見つけ」の方が良いのでは

やつと恋やつと結婚やつと母 玲子

リフレインの評価が分かれると思います。

不用品やつと手放す気になった 那珂子

人生はもうとやつとが入り混じり 夢

【佳句】

七転びやつと八十路の坂を越え 賢治

ダイエツトやつとベルトの穴ひとつ 萌

事故多発してからやつと防止策 寅次郎

乗り継いでまた乗り継いで辿り着く 実千代

終電に間には合ったが降りそこね 乃りこ

子にかくれ絵馬に折った孫生まれ 浩三

入場券やつと手にして気が逸る 光子

やつと出番目立ちたがりの彼岸花 (H) 信子

やつとこき登つてみたら深い霧 京子

子を育てやつとわかつた親心 稔

酒が出てやつと話が見えてきた 直

外に出てやつと気付いた肌寒さ アヤ子

金策をやつと叶えたワンカップ 清

食べるのがやつとですの和高級車 武

お待たせと出て来た妻の厚化粧 紀雄

もうひとり入つてやつと円くなる 柳歩

アカサタナやつとまとまりベンを置く 美はる

職退いてやつと宇宙をひとり占め 雅明

【今月の推せん句】

やつと来た番だったのに蹴置く 小林わこ

好事魔多し。きつとお人好しだと思ふ。

時差ボケがやつと戻つたお味噌汁 高橋洋子

「お味噌汁」という小道具の使い方が抜群

赦し得てやつと天から蜘蛛の糸 中野六助

「蜘蛛の糸」の使い方が示唆に富んでいる。

金婚式やつと妻の名呼べました 岡本昇

「やつと」の使い方が実に効果的な佳句

【私の句】

百歳になったら遺書を書くつもり

(登載浅れの方は役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 播 本 充 子

— 11月号から

川柳バカを自認。いろいろな傾向の作句を
楽しみながら、一人でも多くの方に川柳の楽
しさを知って頂けたらと、三つのサークルの
旗振り役をしています。

かなり好い加減な性格で、今まで同人吟を
全句読んだ事は一度もありませんでした。選
をするのとは違う視点で一句ずつ味わえ、大
変勉強になりました。「川柳塔の句」が掴め
たような気がします。よい機会を有難うござ
いました。

コスモスや初秋のころに咲くように

籠 島 恵 子

コスモスの誘いにひとり萩の寺

坊 農 柳 弘

コスモスの海で気紛れほくされる

生 嶋 ますみ

コスモスの畑で迷子になったのは私

岩 本 笑 子

コスモスに埋れ童女に還る旅

近 藤 佳 子

よい季節に秀句鑑賞を仰せつかりました。

コスモスは大好き。宇宙を意味するギリシ
ヤ語 (Kosmos) と花の名前ラテン語
(Cosmos) とか。宇宙にある限りの優
しさと軽やかさを語りかけてくれるように
揺れている。

誕生日あのおぞましきテロ画面

九・一—もう忘れない誕生日

八 田 敏

私の誕生日は九・一、ほとんどの方が一度
で覚えて下さいます。誕生日は通常選べない。
後から起きた衝撃的な事件によつて世界中の
人々が忘れない日、忘れてはならない日が自
分の誕生日だった。嗚呼。あの日、あの時、
産声をあげた後輩達にも、平穏な世界を願わ
ずにはいられません。

ツアアウト満塁なのに電話鳴る

堀 正 和

一日の機嫌をトラに左右され

藤 井 正 雄

半年間のトラ、トラ狂奏曲も、あの時の久
保田の五失点で万事休す。情熱を注ぐものが

あるっていいですね。シーズンオフの半年間
ファンはどうやって過すのでしょうか。

よいことはみな子どもらのせいにする

佐 伯 や え

悪いことはみな他人のせいにする人は沢山
いますが、やえ様の考え方、生き方はすばら
しい。今までも現在も、そしてこれからも充
実したお幸せな日々が目に見えるようです。

酒盛りの賑わいひとりウーロン茶

太 田 とし子

乾杯へいちばん高くウーロン茶

宮 川 珠 笑

乾杯、カンパイ。大きな声で高高とウー
ロン茶。私もいつもこれです。体質ですから
拗ねても僻んでもおりません。「飲酒運転厳
禁」の徹底から同類が確実に増えます。ウー
ロン茶党が乾杯の主役になるのです。

河豚ちりへ死んでもいいと吐かすなり

安 達 忠 央

河豚の毒に当たった方の話を面白おかしく聞
きました。それで、それでとゴルフなどそつ
ちのけ。口の周囲から痺れはじめて、やがて
指先、そして呼吸が……。病院に運ばれ手当
てを受けながら奥様に「オレ、もうすぐ河豚
中毒で死ぬかもしれないよ」と電話。運よく
蘇られてその後も河豚ちりを召し上っている

そうです。万一を覚悟して美味しく食べましよう。

十五年暮したネコが死んじやった

早川 盛夫

子猫送るいまわの花は百日紅（愛猫を見送る）

今生を惜しみ虚ろな目がする

木本 朱夏

正直な話、私は犬、猫に弱い。一メートル以内に近づかれると血が凍るほどパニックを起こす。無関心を装ってききましたが、多分両親を見送ってからだと思うのですが、友人達のペットの死に対しての思い、家族の一員を亡くした悲しみが解るようになりました。死期が迫っているのを猫自身も知っていたのだでしょう。虚ろな目がする。今回の鑑賞で涙した一句です。

考えておくと云うから駄目らしい

岸 本宏章

「関西では『検討します』は駄目なんだ。」と営業職の二男に聞きました。因みに我が家では「考えておく」は、「より前向きに検討する」と同義語なのです。

熱帯魚ひらひら人間なくさめる

西口 いわゑ

それはそれは美しい熱帯魚様、どてつとしてはいけません。神様から与えられたお

役目を果たさねば。東都川柳界にも熱帯魚というニックネームのレディーが一方。いつ何処でお会いしてもクラクラするほど華やかで、加えて敵のないご性格。会場をひらひら泳いでおられます。

同じなら直球投げて打たれたい

三宅 保州

男、保州氏の心意気にまたまた惚れました。ウジウジ姑息な手を使う女らしい男性が多い昨今、直球勝負だぜ。どうだ打つなら打つてみる。よしんば外野スタンドの最上段へ運ばれたって、その時は潔く「恐れ入りました」と最敬礼すればいい

悪口を楽しんでる鬼女である

下田 茂登子

褒め言葉知らない才女がいます。余程自分の能力に自信があまりのようすで口を開けば誰彼の別なく悪口ばかり。でもサークルの皆さんも馬鹿ではありません。やがて誰も相手にしなくなり、そして何時しか彼女は消えていきました。完。

意地悪をされると強くなってくる

出口 セツ子

意地悪への対処法。その一。無反応でいる。（無抵抗ではありません。）反応を示すから、敵は面白がつてエスカレートするのです。無

視に徹しましょう。

その二。取り敢えず適当にあしらひながら、恨み、辛みを凝縮してしつかり溜め込みましょう。その間に、気力、体力を充実させておいて、（パワーアップして）ここぞという時に、一気に反撃に出るのです。今までの借りは数倍にして返せますよ。

手を振るか防犯カメラ僕に向く

時 広 一路

私もいつもそう思ってますが、まだ一度もやっていません。ピースをしたり、ウイंकしたり、ブリクラの要領でいいのかしら。

こ近所とくもりガラスのおつき合い

北野 哲男

向う三軒両隣、常識的な良い方達ばかりで平和に暮しております。くもりガラスのおつき合い。蓋し名言。

小走りに苦手な女から逃げる

西内 朋月

フェミニストの朋月さん、夢の中でも悪女に追われているのでしょうか。アッハハハハ。仲裁に入って事をこじらせる

村上 玄也

退屈をしていた地獄耳が、いつものように水面下でこそそこそこ。やおら腕捲りをしてしやしゃり出る。火に油を注いでしまふ御粗末。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 11月号から

北野哲男

無い振りも有る振りもして内助の功

三浦千津子

夫の交際費、親類つき合い、回りへの配慮と効果的な袖の振り方こそ妻の真骨頂。

しかし一面には無い方の袖ばかり見せられる夫の多さも垣間見えます。

振りすぎることを反省する尻尾

加藤権悟

反省していても尻尾の方が自然にオーバーな動きをしてしまうのは、人の生きる知恵かも知れません。

演出で振るよりも自然な尻尾がよろしい。

正直な写真は破り捨てている

神野千恵子

旨いっ！被写体としての自覚が滲み出ています。

説明無用、ピントは甘い方がよい。

川柳でこそその表現方法です。

いつの間に強化ガラスになった妻

中井 萌

夢を褒めているような、手強い妻にたじろいでいる自覚のような句で好きです。

夫の非力、無計画をカバーしている内に強くなったと言う妻の一句に拍手を送ります。

終末は笑い薬を頼んどく

巖田 かず枝

大量に使いすぎないように「ニッコリ」程度がよろしい。

自力で少しずつ普段から貯めておくと、タイミング良く効果が出るはずです。

肝つ玉の母に育てた息子達

榎本 宏子

何人かの男の子を育て、少々のことでは動じない母親になったことを、逆に子供達が肚の据わった母に育て上げた、と言う肝つ玉母さんの発想に脱帽。

脱線があつて男に味が出る

峯村 勲弘

男の味とは個性でしようなあ。

味が出るまでに奥さんと周囲に迷惑をかけた反省と、許された現在の心境の句ですか。

ダイエット秋は宣言ひかえとく

二宮 紫鳳

天高くりバウンド必定の候、同感、万歳。

斬新な家でもつても住みにくい

渡邊 伊津志

田舎の母が娘のマンションに滞在した時の感想と全く同じです。

畳なし、雨戸なし、ドアばかり、嫌い！クラシック拍手しどきが難しい

笠原 乃りこ

ズバリ核心をつく一句です。

自前で音楽会へ行く方は別として、同じ悩みを持ってご出席の向きは多いのでは？

下向いて眼鏡拭いてる断る氣

高山 清子

雰囲気が見えます。

肚はきまっているが、潮どきまでの時間と穏やかな断り方が五七五の中にあります。

※軽目でユーモアのある句の他にもたくさん楽しい句を見せて頂きました。

指切りにゆれるトレモロ鳴りやます

乾 春雄

半歩退き静かな笑みにある氣品

村木 信子

明日抜く歯ですきれいに磨いとく

二宮 栄子

喜びの種一粒を見落さぬ

横田 春名

老 春

高 杉 千 歩

続編はこれから佳境桜咲く

一人暮らしになって六年が過ぎました。老い支度の第一歩は健康維持、足腰の鍛錬と気づき、八尾市総合体育館の流水プールに通いはじめて三年五ヶ月。五百三十回を記録しました。

ストレッチに励む百歳は無理ですが

今年四月より福祉センターカラオケ同好会のお仲間になり、自転車に乗れないので徒歩三十五分、腹式呼吸での発声方法などやっと体得したところです。

持ち歌をひとつふやして春になる

絵と川柳の二足の草鞋にカラオケが加わり在宅日はプール、ストレッチとカレンダーに隙間のない日常です。

五年前必要に迫られワープロからパソコンに換え、平かな入力からローマ字入力へ変換し、現在は書簡、ホームページ、メル友もふえ、ますます忙しい悲鳴ですが機器の活用には

は程遠く未知の世界への挑戦で時間の浪費もはなはだしい限りです。

することがあつていいねと羨まれ

日野原重明先生が「死を選ぶ」についての中で「プラトンが年を重ねることの一番の利点は苦しまずに死ねることだ」と引用されています。非常に納得しました。

老春に老人力をプラスして

「殺すな」「核兵器を持つな」でなく「人の命を大切に」「動物を愛そう」「花を愛そう」これが平和へつながる心だと思います。生まれることは選べないが、生きることを選べるの精神で一日を心豊かに暮らしたいと願う日々です。

青春を戦争一途に生きてきた大正生まれは今を老春と名づけて日々好日の明け暮れに励みましよう。

ときどきは休めと自分に言い聞かす

幸いにも川柳三昧、絵三昧の充実した日々に感謝しながら戦後六十年、この平和が何時までも続きますよう祈るばかりです。

住み慣れた地縁に縋る余生なり

決定は先延ばしする老いの知恵

幸福度満点かくる一万歩

呆け防止思ひ出すまであきらめず

ご破算になるまで余生楽しまん

(八尾市高齢クラブ連合会主催、平成17年度「豊かな老後主張発表会」での最優秀賞作文)

老春その後

十七年七月前文投稿後四国丸亀へ法要に帰郷、その夜段差を踏み外して左膝蓋骨折し左足をギブスで固定、名古屋の息子宅近くで入院、酷暑を治療に専念十月に退院しました。負けりやあせん名古屋井で立ち上る

数十年前の我が家に戻り、椅子生活に切替えました。介護1認定、ヘルパーさんのお掃除週二回来ていただいています。

雑学をヘルパーさんが聴いてくれ

要介護1、五月介護法改正、電動ベッドから固定ベッドになり一割負担から自己負担に改悪された。

年金の家計簿少しづつ赤字

これを機に自分で自分を守るしかない杖を手ストレッチ、プールの再開しました。一年以上の空白は体型に気遅れして水着恐怖症になりましたが、リュックの重さよりハビリと観念しながら五七〇回を更新中です。

その日まで元気でいようストレッチ

寿命が延びて自分の使える時間が多くなりました。無駄な抵抗をせずに楽しく体を動かして老いを少しでも遅らしたいと念願しています。

仕残しも養生訓に入れてある

歳月や苦勞したことみな忘れ

犯罪被害者の心情

山口 光久

新聞やテレビで事件、事故の報道のない日はない。殺人事件、誘拐事件、飲酒運転による交通事故、リフォーム詐欺事件、それにいじめ、児童虐待事件とよくも次から次へと続くものである。どの新聞もどのテレビ局も独自の特色をだして報道しようと工夫を凝らしている。一部の週刊誌にいたっては興味本位に取り上げ、被害者の人権を損なう内容も見受けられる。

幸い私の家族、親類には事件、事故の被害者となった者も加害者となった者もない。だから事件、事故の報道に対し割と冷静に、客観的に見ていられる。

事件、事故を公正な立場で裁くのが裁判官であるが、裁判官も自分自身の思想信条は持ちである。裁きの過程において全く公正中立とはいかない一面もある。判決において裁判官の全員一致とならない場合もある。

刑事事件の判決で私の心に深く残るものがある。極悪犯罪の殺人罪、婦女暴行罪など加害者の犯意はどうであれ、被害者の心情に胸が痛むのである。

これらの犯罪で加害者に同情の余地など全くないのは当然であるが、判決文の中では同情すべき事情とか、改悛の情が見受けられるとか、時には罪を償った後の社会復帰に言及することさえある。

凶悪犯罪で極刑に処されるのは稀で無期刑になる場合が多い。国によって死刑を廃止しているところもあるが、我が国は存続している。無期懲役の場合十年を経過すれば仮釈放が可能となっているが、ほとんどの場合十五年ぐらいで仮釈放されるのが一般的のようだ。

一方、被害者の方はどうであろうか。身体的、精神的、経済的に苦境に追い込まれ、消えることのない心の苦しみが生涯続くのである。被害者の心情は他人に同情はされても全く理解されない面もある。

山口県での事件で、遺族の父は「私には極刑のほかは考えられない。判決がそれを求めなかったら、私自身が極刑を与えたい。」と述べられている。

奈良県での女兒殺害事件は、わいせつ目的誘拐、殺人など八つの罪に問われた。両親は

裁判に当たり「私たちの希望は極刑以上の刑です。」と述べられている。

これらの言葉が被害者の心情だと思う。

飲酒運転による交通事故死の被害者も耐え難い苦痛を強いられている。特に、飲酒運転ひき逃げは悪質である。事故直後に処置をすれば助かる命も、ひき逃げで放置されたために死に至ることがある。飲酒運転の死亡事故は、遺族からすれば殺人と同じである。

極刑については法曹界や有識者の間で様々な議論がされている。加害者の人権、生存権、倫理といった面から。では、被害者についてはどう考えたらよいであろうか。殺害された瞬間、生存権も人権も抹殺されるのである。量刑について議論される先生方の子息が残酷に殺害されたとしたら、冷静な態度でいられるだろうか。

犯罪被害者保護関連法が平成十二年五月に制定された。これは、捜査や裁判の過程における配慮、経済的な支援についてであるが、被害者の心情は法によってどうすることもできないのである。

刑事事件の裁判に国民が参加する裁判員制度が近く導入されることになった。犯罪被害者を身内に持った人とそうでない人とは審理に際し平常心に差が生じないであろうか。

全日本川柳誌上大会のご案内

(平成柳多留第12集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第12集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人 全日本川柳協会
会長 今川乱魚

課題と共選者 (各題2句・連記)

「国境」	石井 有人	——	国吉司図子	共選
「癌(がん)」	高瀬 輝男	——	浦 眞	共選
「花」	西 恵美子	——	仲俣 新一	共選
「移る」	野村 秋花	——	池 森子	共選
「アメリカ」	渡辺 貞勇	——	小林 映汎	共選

第二次選者 竹本瓢太郎 大野 風柳 大木 俊秀
河内 天笑 木野由紀子

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第12集代金含む)
賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞・秀作賞(予定)

締切 平成19年1月31日(水)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第31回全日本川柳栃木大会(平成19年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、
参加費2000円(振替又は小為替)とともに下記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575

第21回 国民文化祭・やまぐち2006 (11月4日)

本年度国民文化祭は山口県萩市民会館で開催された。事前投句の高校・一般の部は4047名、小中学生の部は8207名、当日参加は600名。大会各賞は次の通り。

◎高校・一般の部

文部科学大臣奨励賞

九条も土塀も白いまま守る

兵庫県 菅野 泰行

国民文化祭実行委員会会長賞

雪よりもちよつと高めの志

東京都 永田 和夫

山口県知事賞

新時代ランナーになる風になる

兵庫県 尾上 八重

第21回国民文化祭山口県実行委員会会長賞

冬木立父はゆつくり光りだす

愛媛県 高畑 俊正

山口県教育委員会教育長賞

夏みかんいじめに頑と立ち向う

山口県 末光 康英

萩市長賞

輝いた記憶で君を介護する

大阪府 吉道あかね

第21回国民文化祭萩市実行委員会会長賞

魂が白くなるまでひた走る

奈良県 大村美千子

萩市教育委員会教育長賞

傷ついた翼をいやす保健室

福岡県 馬場 涼子

(社)全日本川柳協会会長賞

カーテンを開けて満たしている自由

鳥取県 寺沢 典子

山口県川柳協会会長賞

少子化の行方案ずる夏みかん

福岡県 深堀 正平

◎小中学生の部

文部科学大臣奨励賞

家のドア開けるとなぜかほつとする

群馬県 矢嶋 貴宣

国民文化祭実行委員会会長賞

ガンバレがはしるせなかにきこえたよ

山口県 ふくまあつや

山口県知事賞

空見れば雲が泣いたりおこったり

山口県 秋枝 良典

第21回国民文化祭山口県実行委員会会長賞

ライバルはいつも目の前走つて

山口県 杉本 佑樹

山口県教育委員会教育長賞

遅刻して走る自分が情けない

群馬県 松本かれん

萩市長賞

まだ開ける外へおいでと風がよぶ

愛媛県 喜安 理奈

第21回国民文化祭萩市実行委員会会長賞

人と人心開けばつながるよ

山口県 刀称 温美

萩市教育委員会教育長賞

雲にのる夢を見ました12歳

山口県 福田 彩乃

(社)全日本川柳協会会長賞

新しい命が咲くよ花開く

広島県 米澤あおい

山口県川柳協会会長賞

いわし雲どれがどれたかわからない

山口県 小田 舞

『川柳・明日香』

創刊十二周年記念全国誌士大会(案内)

課題と選者

〔歌〕

北野 岸柳(青森)
太田紀伊子(茨城)
深町 金鳥(埼玉)
西出 楓楽(大阪)
桂 文生(東京)

二句詠(表現自由・読み込み可・五人共選)

用紙 自由(清記します)

参加費 1000円(発表誌呈)

締切り 平成19年1月31日消印有効

賞 総合点10位まで呈賞

(同点は到着順)

発表 『川柳・明日香』19年4月1日号

投句先 〒369-1102

埼玉県深谷市瀬山21-9

明日香川柳社 宛て

第26回

川柳塔鹿野みか月川柳大会ご案内

日時 18年12月3日(日) 午前9時開場
場所 国民宿舎「山紫苑」2F大広間
課題と選者 出句締切11時半 各題二句

「工夫」 河内 天笑選(堺市)
「くらし」 森中恵美子選(摂津市)
「眩しい」 平山 三鶴選(岡山県)
「縁」 小島 蘭幸選(竹原市)
「小径」 松本 文子選(松江市)
「鱗」 白根 ふみ選(米子市)
「びっくり」 小林由多香選(鳥取市)

*席題なし

会費 二千元(昼食・発表誌・記念品 呈
賞 優秀賞杯(副賞付) 他 出席者優先

*問合せ先 〒689-0405

鳥取市鹿野町鹿野1279 中原 諷人

TEL 0857-84-2100

前夜祭 12月2日(土) 18時半 山紫苑
蟹ツア 12月4日(月) に予定(有料)
主催 川柳塔鹿野みか月
後援 鳥取市・鳥取県川柳作家協会他

は は は 川柳大募集

菌をテーマに笑顔を誘う川柳募集

締め切り 1月8日

官製はがき1枚1句又は応募用紙にて
ファックス03-3267-8650

応募先 〒162-0846

東京都新宿区左内町21-5

(社)日本蘭科技工士会

TEL 03-3267-8681

「ははは川柳」募集事務局宛

賞 特選賞金他多数

主催 (社)日本蘭科技工士会 監修 (社)日川協

お願い

同人・誌友の方の投句は毎月15日必
着で事務所宛お送り下さい。事務所に
て到着の郵便物は全て記録し間違ひの
ないよう努めています。

川柳塔事務所

お知らせ

句箋をご入用の句会では、川柳塔事務
所宛お申し出下さい。約4センチ×25
センチ大、約8千枚〜一万枚で120
0円(送料込)

TEL・06-6229-6914

本社十一月句会

十一月七日(火)午後一時
アウイーナ大坂

朝から小雨まじりの強い風が吹き十一月初めにしては寒い日であったが、101名の出席を得て、久方振りの昼間の句会が開かれた。

初出席は堺市の奥時雄氏。

お話は豊中市の藤井則彦氏。

二〇〇七年問題こぼれ話と題し、いよいよ近づいてきた大量定年退職者「団塊の世代」についてのアレコレ、団塊の世代という言葉の由来は、堺屋太一氏の「近未来小説」からネーミングしたものであると興味深い。

約六八〇万人といわれる団塊の世代、その問題点、働き手の不足や経済効果、そして最後は実りある人生へ危惧される事等々。深刻とされているテーマを具体例を挙げながら、入念に軽快に語っていただいた。

考えさせられる身近な問題であるだけに30分は短くあつたという間に過ぎた。(扶美代記)

月間賞は城東区の平嶋美智子さんに輝く。

(司会)玄也・美龍(協取り)月子・真理子

(受付)能子・義子(清記)直樹

席題「変」 山岡 富美子選

お互いに変な人だと初対面
嬉しいことはすっかりつづく変な年
変装をしているわけじゃありません
変なメールちよいちよい開けて新知識
変身つて漫画みたいにできません
この頃の学校少し変です
変ですか年がいくほどはれつぽい
変わらない愛を誓った果ての修羅
変哲もないのが古里の取り柄
変ですよ取った臓器を移植する
変人の面倒見てる変り者
手術台おいて変わった死生観
大変と思わないから大変だ
スタッフを変えてマンネリから脱皮
変な奴でもたつた一人の夫です
風向きを変えろやさしい一言で
秋ですな変身してみたくなる
変なところ見られそれから貝になる
日本語が変で英語を何故習う
愚かさよいくさが変える世界地図
隣的位置ずれた同士で馬が合う
変人と言われる人にある魅力
事件起き後で気付いた子の異変
妻の目を躲す低めの変化球
わが道を行き変人にされている
生真面目な男に返す変化球

房 子 天 笑 義 誠 公 誠 義 子 富 美 幸 雀 保 州 たもつ 昭 尚 士 夕 胡 扶 美 代 賢 子 いわゑ いわゑ 月 子 章 久 和 夫 楓 楽 昭 三 玄 也 いさお 楓 楽 朋 月

充分に変なわたしと自覚する
朱に染まる心変りにある余白
その前にますわたくしが変わらねば
変な味などと言わない戦中派
人のエゴ天変地異が加速する
自分史に自己陶醉の天邪鬼
住 定年後変な肩書きばかり増え
イケメンのああ君達の著遣い
変人と言われているも子沢山
ストレスを明日の糧に変えて生き
変じゃないあなたが見えてない
人 変なところそれぞれあつて人間味
地 定年後守衛の言葉つき変わる
天 わたくしが変わらなければ始まらぬ
軸 ライバルに気迫で負けた変化球
兼題「文化」 板東 倫子選
筆洗うことにも文化するところ
洋食を父の文化は箸で食う
日本の誇る遺産は木の文化
山奥に文化ホールが建っている
ロボットが文化勲章狙つてる
今日の空文化遺産にしたいほど

公 誠 柳 弘 扶 美 代 見 清 富 子 柳 弘 美 義 真理子 恭 昌 幸 雀 ふりこ 朝 子 時 雄 恵 子 千 恵 子 螢 夫 好 六 助 いさお

食文化どう変わろうと腹八分
 脅かしも文化にするか核兵器
 カルチャーの違いで合わぬ嫁姑
 文化都市各公園に青テント
 脳内革命これも文化かへそルック
 才覚に溺れ文化を踏み外す
 子には子の文化詰まっているカバン
 食文化歴史を辿る塩の道
 文化の日母の着物を干している
 千年の和紙をはぐくむ清き水
 枚方の文化が消えた菊人形
 灘五郷酒の文化は寒を待つ
 お祭りで町の文化が引き継がれ
 髻蓄え私は文化人になる
 ばあちゃんの文化だったね炊飯器
 古書店に古代文化を嗅ぎにゆく
 文化人らしい顔するベレー帽
 古民家の文化もろとも土地を売り
 全国の駅弁に見る食文化
 若者の文化圏へは近づくかぬ
 物置に文化が眠る祖父の書架
 異文化の壁乗り越えて結ぶ愛
 食文化やっぱり母のにぎり飯
 明日香村壁面の美女の色直し
 四コマの漫画の中にある文化
 故郷に文化の匂いしない棚田

佳

千里 千水 奮也 典子 直樹 雅文 恭昌 寿美 富美 弘風 義子 天笑 丹吉 昭男 潤子 玄也 いさお 正雄 鐘造 ふりこ 昭三 篤子 賢子 恵子

女には解せぬ男の文化論
 勲章をもらいおかしな人になる
 夫婦でも少し距離おくのが文化
 ジーパンの穴から覗いている文化
 文化とや妻はやっぱり米を研ぐ
 母に子を生んでもらうという文化
 弱者皆切り捨て文化国家とや
 文化人が突如痴漢になる不思議
 兼題「どつぷり」 宮西 弥生選
 どつぷりの墨で消したい過去がある
 どつぷりと漬かつてみたい酒樽に
 特権にどつぷり浸かつてる官吏
 ぬるま湯にどつぷりヒント湧いて来ず
 どつぷりと汚れてもいい介護の手
 クラス会どつぷり染まるセピア色
 どつぷりと寡黙な父の大きな手
 静寂にどつぷりつかる秋の寺
 ぬかみそにどつぷり漬かる妻という
 どつぷりと小さな殻にこもってる
 あつぷあつぷあなただの愛は深すぎる
 きこの鍋秋をどつぷり腹の中
 渴いた部屋でどつぷり愚痴を吐いておく
 森羅万象どつぷり秋の彩となる

理恵 丹吉 公誠 保州 シマ子 蕉子 楓楽 好子 蕉子 玄也 萬的 愛論 幸雀 義子 能子 理恵 瑠美子 夕胡 直樹 寿子 富子

アメリカにどつぷり浸かる日本丸
 ケータイにどつぷり浸かり依存症
 どつぷりと夕日につかり空になる
 ぬるま湯で裏金つくるのが仕事
 談合の水にどつぷり味がが
 退屈の海にどつぷり浸かる首
 どつぷりと自分につかるパラサイト
 どつぷりとつかり助けを待っている
 菊好きで菊にうまれてうれしい日
 泥沼の汁はあまりに甘すぎた
 ぬるま湯にどつぷりつかるイエスマン
 どつぷりと月光浴びて魔女になる
 あなたにどつぷりひよとして初恋
 どつぷりとわたくし流に生きている
 戦争にどつぷり浸かつてるヒト科
 酒樽にどつぷり浸かる夢を見る
 百円ショップどつぷりボクの遊園地
 どつぷりのお湯に疼きを鎮めます
 佳
 老師さま墨どつぷりと枯れた筆
 ぐちの海どつぷりつかり寒かるう
 もういいと言うまで母の介護浴
 甘い汁どつぷり吸えばこんな顔
 マチス展どつぷり赤に迷い込む
 人
 墨どつぷりの筆で平和と書く祈り
 一本の樹にどつぷりと水を遣る

郁夫 尚士 いわゑ 時雄 一歩 郁夫 美義 恵子 月子 夕胡 千里 希久子 千歩 千吉 准一 五月 美義 ばっは 蕉子 耕治 たもつ 好 一風 啓子

天
一善を果しどつぱり湯につかる

ダン吉

軸
どつぱりと都会の死角で洗う足

兼題「増える」

米田 恭昌選

親殺し子殺し増えてきた末世
核持つ国また増え秋が冷えてくる
増えている結婚しない症候群
水増しの手口で貯める裏の金
必修漏れ増えてあわてる文科省
酒飲まず身体いたわる友が増え
もう借りが返せないほど愛される
景品の金魚家族の仲間入り
でさちやった婚です孫がまた増える
残高の増えた通帳見てにやり
もう一人産んで見ようか国の為
どっこいしょ増え順調に老いてゆく
年輪の重みが増やす顔の皺
お迎えが近いと増える独り言
老人が増え怒らない国になる
いらだちへ誤字が増える原稿紙
勝つたに敵も味方も増えていく
金持ちが寝ているうちに金増やす
白髪増えわたしに似合う服さが増
えてても減つても嫌科の目
占つてもろて心配事が増え
物忘れふたり競うて増えてくる

正坊
ダン吉
美籠
富子
瑠美子
天笑
アキ
理恵
利昭
鐘造
楓楽
潤子
則彦
修
萬的
真理子
たもつ
篤子
好
玄也
能子

スロライフ結局昼寝ばかり増え
生き延びるための薬がまた増える
のし袋増えて家計がうめき出す
少子化へ無縁仏が増えていく
増える絵馬とうに定員越えている
茜雲もう悲しみは増やすまい
また増える抜け毛やつぱり秋だなあ
増量という商法に弱い僕
これ以上増やしてならぬ黒い核
ほれた弱みどんと増える出費額
ともだちが増える笑顔の丸裸
増長して風のサインを読み落とす
年金が増えることなどなさそうだ
ありがとが年取る毎に増えてくる
幸せに暮して増えた笑い皺
人
増毛の甲斐なく風が吹きぬける
地
明日からは少し増えます七分粥
天
負の遺産増えてあえいでいる地球
軸
息子の増えた白髪に挽歌聞く思い

幸雀
保州
直樹
鐘造
哲男
扶美代
理恵
准一
昭
ばつは
朝子
義洋
五月
尚士
六助
保州
富子

兼題「テスト」

木本 朱夏選

知らぬ間に観察されていたテスト
客種を枕でテストする高座
知つてるかといひちゃん孫に試される

正坊
庸佑
利昭

十葉にテストは要らぬ祖母の知恵
神棚のホコリを払うテスト前
先生の鞆テストの日はふくれ
テスト始め待つ鉛筆のブレッシャー
先生がうしろ歩きを試験場
ドアあけた時からテストされている
ほめ殺しボクを試しているらしい
毎日がテストのように恥をかく
提案をテストケースで取り入れる
墜落は覚悟のテストパイロット
どん底で神のテストに立ち向かう
わけあって敗者復活するテスト
脳ドリルOK出てもたそがれる
なぞり帖ちよつとテストをして愉快
認知症テスト半分ひっかかり
農業のテスト信じて食べている
宿命が悲しテストのマウスたち
変化球混ぜてわたしを試す妻
昨日のおかず言つてみなはれ妻テスト
試供品マニアで家計助ける
ご無体なテストに耐える化粧品
テスト終え映画の梯子してかえる
恋人を連れておいでと父が言う
恋はまだアチーブメントな君とほく
天秤の真ん中へんにあるテスト
格差生むためにテストは要るのです
まごころを試すと愛が枯れてゆく
テストからテストへいのちまわされる
真人間になるテストです座禅中

潤子
志代
雅文
恭昌
好
重人
俣子
恵子
准一
啓子
鐘造
美代子
かりん
義美
能子
典子
洋
蕉子
直樹
和夫
一風
尚士
柳弘
朝子
時雄
夕胡
弥生
富子

雨風ににんげんテストされている
核のテストなんとヒト科は受けたらう
C T S キャン僕を輪切りにしてテスト
テストハンマーコッソコ夜の操車場
私を信用しないリットマス紙
指切ってテストさすのかシュレッダー
血と汗に翼が生えた試作品
心理テスト私のエゴを素つ破抜く
実験の次は使つてみたくなるのです
銃持つと撃つてもみたくなるのです
佳 修
つり銭を多くもらつて試される
リストラは出会い頭の試し斬り
ポータビリティー制度にテストされている
らりるれろまたまだ酔うておりませぬ
テスト重ねてうちのおでんがうちの顔
人 希久子
にんげんをテストしにきた紙包み
地 天笑
漢字検定老人力がしゃしゃりである
天 義
しきたりの違うテストを受けている
軸 義
テストボタン視ている眠らない街で
課題「着せる」 河内 天笑選
義虫もわたしもそろり冬支度
着ぶくれの通勤地獄やつてくる
山々に神が着せます綾錦
満作 義子
いわゑ

飛鳥路の秋は七重の風を着る
ブランドを着せられ肩のこる子犬
ブランドにくるまれている一人つ子
ブランドを着せるとボーズするベツト
七五三おはあちゃんまで一張羅
緋の袴立派に巫女のアールバイト
ユニクロを着せてカカシも今風に
御仕着せの期待に青い実が揺れる
マネキンに着せると売れる売れ残り
ブランドを着せても腹が邪魔をする
赤い服着せるとにこり二度童子
着せるもの着せたら捨てたものでない
ペアルック着せられふやけるる男
寂しさを隠し真つ赤なシャツを着る
満足そうに妻が出てくる試着室
里荒らす熊に罪科は着せられぬ
時給千円民族衣装着せられる
別れる日黙つてコート着せかける
ラップ着せチンは五分と書いて寝る
抜擢を進言したと恩に着せ
コオロギの骸に着せてやる落葉
青ゆかた着せられあがる手術台
着せられた着物に合わせ顔つくる
鎧の上に衣を着せた平和論
徘徊の母に目印赤い服
ウエディングドレスの下は岩田帯
普段着をきると安心する鏡
野良着ならしやんと背筋が伸びてくる
着古しの服が一番落ちつける
弥生 子
俣子
正坊
重人
修男
哲男
朱夏
淳司
玄也
東吉
希久子
義子
昭司
洋子
好雄
正雄
理恵
五月
時雄
理恵
朋月
鐘造
倫子
富子
保州
扶美代
順子
美籠

佳 住
お仕着せを脱いで羽化する親離れ
着替えると喜ぶ認知症の母
手編み着せスローフードで飼ひ慣らす
ペアルック着せては腕を組みにくる
マネキンに着せたらすぐに売れました
人 美智子
手づくりのアイデア着せる介護服 朝子
地 楓楽
日の丸はいつまでも罪着せられる
天 楓楽
一張羅着た日ぐつたりして帰り
うしろからコートを掛けてくれました
軸 美智子
十一月までの本社句会皆出席者は次の通り
です。間違ひがありましたら、事務所まで申
し出てください。(順不同)
穴吹尚士 井伊東吉 石堂潤子 太田とし子
石森利昭 岩崎公誠 太田 昭 岩佐ダン吉
榎本舞夢 海老池洋 大谷篤子 太田扶美代
河内天笑 川端一步 柿花和夫 鴨谷瑠美子
川原章久 鍛原千里 木本朱夏 瀧本きよし
志田千代 谷口 義 西内朋月 平嶋美智子
西出楓楽 長浜美籠 藤井正雄 前 たもつ
坊農柳弘 村上玄也 森下愛論 宮本三喜夫
森本弘風 山口光久 吉田富美 山本希久子
吉村一風 米田泰昌 吉岡 修 山岡富美子
米澤保子 (四一名)

おとせの城

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

手の届くしあわせ庭の秋ざくら
惜しむほどの命でないがさりとて
三代代映る大きな鏡置く
物忘れ残暑のせいにして寂し
そよぐ葉も流れる雲もうつす湖
鏡には鬼も天女も現われる
水鏡少年時代の顔映る
昔はなしの好きなさんまを焼いている
小豆ことごとなぜか気持が弾みます
大人の勝手小さい命の惜しまれる

三幸川柳教室

喜田

准一報

当代 桂香
一步 朱夏
幸 章子

追い風に押されて痛い脛笑う
百歳の夢を追いつつ日々新たな
定年後夢の余白を追いかける
夢ばかり追うので打てぬ句読点
追いこんだ金魚に巧くかわされる
シグナルを読めず我が子を追いつめる
逃げ水を追って路傍の石になる
じんわりと過去の微罪が追ってくる
姉妹も遠くの友となる誤算
宅急便北から届く友の幸
垢抜けて友はすっかり街の風
叱咤激励友に感謝の日が続く
政友が袂を分けた夏の陣
胸三寸友に預けている秘密
屈託ない友にも越えた山がある
生き様を晒し誌友に磨かれる
無しの友だから言えない事もある
言い訳のだしに手頃な友が居る
連の輪で腰のウチワが踊り出す
うたた寝にこっそり時間かじられる
風鈴も騒音苦情とは寒い
線香花火の最後はだれも笑わない
ゴージャぶらぶらあなたまかせに夏太り

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

孝義 昇 宏夫 智三 町子 起世子 次根 幹子 かずみ 信子 美枝子 イセ 武 登美代 純子 徑子 みね 准一 義雄 八重子 保州 和子 公子 貞月 八重子 あきら 賢

厚化粧落せば地顔別の人
宝クジ買ってあれこれ皮算用
秋の蚊も私も鈍いヨツコラシヨ
道端の名もなき草が意地見せる
シャボン玉虫歯の痛み乗せて飛べ
匙投げる術など知らぬ母の愛
お多福の頬のあたりに夢がある
彼岸花咲く墓の道子等集う
紅葉にこぼれ陽がさす遍路ゆく

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

よしみ 放任 かおり いさむ 寿々女 ひかり 初恵 文仙 治延 良子 ダン吉 風子 秀夫 シマ子 雅文 和代 章久 克己 美弥子 敏子 高尚 美子 柳弘 三重子 一志 湖風 愛論

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

福耳を信じ幸せつかみたい
耳よせて周り気にするラブコル
リハビリへ音楽聞いてリズムカル
小賢しいので福耳をもてあます
北風が吹き荒れ今日も耳障り
お祝を小耳にはさむ風便り
耳朶へリッチピアスの若づくり
目と耳が良くてなんとか若く見え
壁の耳気にしながらも燃えた恋
難聴へ長生きですとお世辞聞く

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

お下りの兄の帽子は今もある
無愛想な受付さてならび変え
雄に度胸雌に愛嬌ない時代
無愛想な親父と垂れる釣りの糸
仕上がりを見せて匠の無愛想
無愛想に徹して信号が光る
暗算で四桁までならまだ出来る
自負と言う勲章大事にしています
うしろ指さされず生きた自負がある
家族への愛を自負する父の靴
自負するて生き甲斐にする無農薬
雑子ならと自負して梯子踏み外す
現役の自負は気合も懐に
包丁の自負が透けるかつらむき
威張っててもあいつの弱味握ってる

久子 公美枝 弘子 鈴枝 信雄 智恵子 和代 静江 正光 雄々
孝一 柘作 乃りこ 幸雀 求芽 治三郎 稲子 宏章 活恵 美龍 萬弘 重人 武史

キープした酒が減ってるまたあいつ
こんな事するのはあいつしかおらん
あいつから奢ってもらて雨になる
こんな時あいつがいたらと悔まれる
飲ませて下さい残り火がゆれる
キスも無く心残して帰る道
残額がゼロになるまで帰れない
残り火をそっと畳んだ台所
領いてやる言い訳の下手な嘘
小回りの利かぬ弱点突いてくる
真夜中に悔し泣きする自尊心
花一輪客待ちわびる無人駅
退職日残る未練を持ち帰る
もくせい香りを持ち帰る日記
ポケットにいつも太陽入れてます

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

やれやれと一息ついて一升瓶
かがやいていたくて医者へ足運ぶ
少年は白紙へ大きな夢があり
わたくしをずっと追い越す狼の知恵
ここにきて白紙撤回と言われても
あつさり白紙にもどした裏がある
白紙とは寝耳に水の雨蛙
無になれと白紙をにらむ墨のいろ
靖国も黄砂という名で攻めて来た

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

つぎつぎと言葉の森が騒がしい

美義 泰雄 典子 昭二 孝一 照子 葉子 郁夫 宵草 庸佑 尚士 義一 義昭 公昭 きよし

佳句地十選

伊勢 八重子

やわらかい言葉で毒を飲まされる
やさしさで手強い相手包みこむ
絶壁の下が見たくて這うて見る
失敗は肝に銘じてすぐ忘れ
故郷へ山が帰れと叫んでる
うっかりとこぼしたグチが渦を巻く
種袋ふれば明日が踊りだす
熨斗袋古い絆が断ち切れぬ
真実の声は瞳も澄んでいる
もう二度と嘘はつかぬと軽い嘘

縁の下だけが私の指定席

宇宙船おろぎ鳴けば良からうに
部分ごと「一つづ」で見せる物語
つぎつぎと噂広がり蓋出来ぬ
あの人の触れてはならぬ部分知る
腫れものにさわらぬように本音聞く
あちこちの部分有めて生きている
つぎつぎと仏を送る灯が点る
転がった部分はどこのネジだろう
満月もいいが三日月乙なもの
滾る湯の里でゆっくり骨休め
似て欲しく無いとこばかり良く似てる
つぎつぎに歴史を刻む名勝負
滾る湯の中に素麺しなやかに
他人様を睨まないのに麦粒腫

八重子 重人 紀乃 蘭香 二英 郁夫 千春 忠良 義明 ひろこ 孔美子 かつみ 天雀 美知江 和子 龍枝 京子 幸恵 和 芳江 あづま よしえ 和枝

つぎつぎと順番讀るかずら橋
つぎつぎと阿修羅をふんだ足の裏
名水が滾る静かな森に棲む
頭から滾ると失語症になる
炎天下でんでん虫は死んだふり
寝たきりの母へ絶やさぬ四季の花

川柳塔おとしり

福田

登美報

二日酔い茶漬さらさら流し込む
年金がさらさら崩れ逃げて行く
プライドはさらさら見えぬ社交性
いつくしみながらさらさら日を送る
さらさらとこの世の時間流れゆく
次の世のロマンを覗く万華鏡
心にも鏡があつて照らして
真つすぐに生きて鏡に胸を張る
この鏡の形見やびかびかに
病む夫の奇跡を何時も祈つてた
老人が祈る極楽行くように
世界中戦争なきよう民祈る
ただ祈るだけしか出来ぬ私です
老兵の祈り転倒せぬように
全力は尽した後は祈るのみ
当選へ万歳鏡みごと割る

竹原川柳会

時広

一路報

よく転ぶ男とリズム合うてくる
七転び八起きを今も信じ切る
お賽銭コロコロ竹林寺閑か

玲子 重忠 螢 芳光 石花菜 宣子 以和万津 道子 登美 芳光 艶子 螢 ヒロ子 風花 清子 知恵 小生 黙光 真一 雄々 幸次郎 由多香

転がったところにあった赤い花
自然体ころんだ所に句読点
顔ちよつと覗かせ逃けた諭吉様
覗かれてまだはずかしい老いの風呂
傷口をちよつと覗いて蓋をする
人間界覗き阿弥陀は瞳に涙
堂々と覗き堂々寄りきられ
円満な顔で夫婦やつている
無位無冠父よ父であればよい
影法師秋がゆつくり深くなる
輝いてますか二十五歳の私
愛という重さ家族になりました
新れはお祝い用にしまつとく
赤紙を覚えています父の顔
一枚の辞令の重さを忘れない
好きだよと言えは良いのに紙鉄砲
千枚の紙鶴になり空に舞う
再生紙暑中見舞に來てくれる
紙吹雪良き日は君のためにある
紙を焼く人間どものおぞましき
再生紙地球を護る自負一つ
百足ほど足が無いからよく転ぶ

川柳塔唐津

仁部

四郎報

職人の代償指の肝抵光る
非常識が常識の掬押し倒す
見上げれば半月かかる昼の椅子
女人禁制依怙地に守る徳儀
傘寿への道遠過ぎる痛む足

民恵 敬子 幸子 規子 厚子 輝子 笹舟 太虚 不朽 比呂子 千枝 史子 房子 汎美 節夫 慶子 万年 栄恵 笑子 静風 淑子 一路 晴翠 勝實 正劍 蜂朗

皮下脂肪のようにはお金溜まらない
年金の舟に無病の妻の櫂
どん尻で走るわが子を追うカメラ
子育ては下手でも子供すくつくる

川柳塔鹿野みか月

土橋

ベレー帽画廊といえはすぐ思ふ
おつきあい画廊の良さは知らぬまま
画廊見て私も描いてみたくなる
画廊からピカソの貌を持ち帰る
パチンコにやられ画廊にしょんぼりと
後込みをしながらついてゆく画廊
裸婦像の前で自分の裸体想う
画廊までゴールさせた筆になる
ふる里は大きな画廊山水画
熟れ頃をねらう猥に泣かされる
台風が無情に泣いたリンゴ園
わったいな祭も一端の画廊
裸婦像の前に集まる男たち
印影に家裁の重みしかとつけ
影法師母がそこらにいるようだ
真つ直ぐな影が見たくて背伸びする
師の影を慕つて花を活け続け
垣根越し綱引きこつこつやっている
応援の心も入れて綱を引く
くいちがう意見で綱を引く夫婦
孤影ふらり宴の果ての僕の影
残照にわたしの影が燃えたがる
影を慕いてからの青春だった

水笑 四郎 輝夫 高明 螢報 武子 房枝 久香 汲香 和子 彩人 諷人 くに子 睦子 弘子 茶子 みさ子 宣子 菊乃 実満 幸枝 節子 永子 八重 照彦 きみ子 孔美子

伸びきった影が忙しく鉄を振る
ついてくる影が舌打ちして困る
枯れた松にもしつかりと松の影
老い知らぬ八等身の影法師

公子 忠良 完司 螢

ほたる川柳同好会

水野 黒兔報

横這いのグラフを眺めため息も
横一列の中の一人と言う安堵
どつと来るチラシ読まずに捨てている
一枚のハンカチ日本がどつと沸く
朝帰り土産のすしに横をむく
横紙を破り世間の風を読む
その件は一応横へ置いて
通知表嬉しさどつと5がひとつ
震度2でどつと来るかも本の山
あの詐欺師口下手なので信じ込む
口下手を今はメールでカバーする
核爆弾知っているからどつと汗
新宮と共に栄えん高野横
いい訳は苦しさどつと出る
口下手はいいさやかまし屋は困る

雪子 昭子 禮子 よしろう いさむ 黒兎 正三郎 契子 春代 信男 柳童 勇治 長一 肋骨 勝

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

価値観が異なり戻らない筈
会議室異議は通らぬ多数決
老々介護異常事態だ昔なら
民飢える異様な国の核実験
異性大好きハンサムならばなおさらに
相談には乗ってはくれぬ北の風

ますみ 慶子 あずき 香住 シマ子 弘直

お天気がよくても妻の低気圧
モナリザに並べて妻の写真おく
あの世からいきいき暮す妻を妬き
妻の辞書にゴメンナサイが抜けている

能子 喜美子 加津子 欣史子

川柳ささやま

遠山 可住報

少子化の子供に期待大き過ぎ
免許証無い主婦業を五十年
飲み会の出欠メニユーで決めてます
隣見てすぐ気がかわる我がメニユー
はずむ旅名勝巡りは老いの夢
おまかせのメニユー満足でした店
採め事の種は免許が無いために
黒豆が三粒メニユーにそえてある
一枚の免許証だから宝物
心にも免許が欲しい現世で
子へ期待次は孫へと移りゆく
免許証と明日が待っている
妻よりも免許と古いおつき合い
母ちゃんのメニユーに命預けとく

精一 純子 二英 文子 美紗子 靖子 多美子 開子 照代 かほろ つや子 哲男 可住

川柳塔なら

坊農 柳弘報

遺伝子の不思議同じ顔の孫
核抱いて真珠になる日待っている
夏茶碗涼しい菓子次ぎに来る
なだめ役もつばら聴くに徹してる
足し水にうれしく揺れて水中花
八十路坂もつばら杖にこたわって
親王誕生祝う茶碗のテンコ盛り

さざ恵 博一 美佐女 ふりこ 春蘭 千梢 とし子

苦労した汗が浮いてる茶碗酒
ブチトマト不思議の国の匂いする
人間に虫の知らせという不思議
にんげんの驕りを核を弄ぶ
造型の核にこもっている折り
ロケットが押す日も近い核ボタン
惑星をわがもの顔でいる謎
よちよちの道に溢れている不思議
メモ事が鶴の一声アラ不思議
合掌の手は不思議にも美しい
禁酒禁煙もつばら恋に走ってる
秋めいて女三人旅談義

弘風 茂雄 春雄 國治 和夫 良一 隆盛 富子 章久 洋子 六助 はつ子 完次 弥生 一風 孝子 美千子 理恵 朝雄 秋雄 恵美子 真理子 道子

松茸を探しまくっている茶碗
ひび割れた茶碗に情けつめてある
孫に叱られ不思議に心あたたまる
のんびりと生きている茶碗が二つある
果てまで進むしかない罪の道
生命の核分裂にある未来
きらきらと不思議をさぐる子の瞳
火の匂い風の匂いのする茶碗
何事も大きく受ける茶碗酒
大切なものを包んで熱れていく
ひと筋の道を歩いた靴の減り

弘風 茂雄 春雄 國治 和夫 良一 隆盛 富子 章久 洋子 六助 はつ子 完次 弥生 一風 孝子 美千子 理恵 朝雄 秋雄 恵美子 真理子 道子

川柳ふうもん吟社

夏目 一粹報

裏なりのほうふらだつて意地がある
カーナビも人生迷路抜けれまい
怨念は入れまい棺が重くなる
ほうふらを枕虫の音聞いている

洋々 一瑤 善夫 圭一郎

うっかりと天使のあくび見てしまふ

月を踏むカーナビ科学すばらしい

怨念がこびりついてる黄楊の櫛

神棚の一ばん奥に座り込む

ふり向いて運のしっぽを取り逃がす

人生の指針カーナビ知っている

人生のカーナビ先輩の助言

カーナビが欲しいこの世の迷い道

破るためあるジंकスだ迷わない

負け組に居るから恨みたくもなる

風紋は風のささやき日本海

ない振り目で目を剥くような家を建て

隠し玉持って乗りこむ遺産分け

隠し玉互いに持って知らぬ顔

怨念を語る男の破れ傘

カーナビにボックリ逝ける道を聞く

人生の指針やっぱり亡母だった

怨念を捨てれば地球丸くなる

昌鼓

義徳

雅女

暢夫

かをる

はつ江

美雪

孝男

房江

寿子

忠三

千代

諏訪男

良子

節子

志げ緒

春名

行男

貸し金庫で宇宙旅行を待ちわびる

鼓打つおんな決意はできている

途中から怪しくなってきた論旨

途中からでもおいで座席はとつてある

明暗を途中で分けた運不運

途中から入った仲間の輪が温い

自分史の途中で鬼も笑い出す

途中下車へ魅惑魅惑が従いてくる

まだ愛を零す余裕のある五体

一坪の空に巣を張り蜘蛛が待つ

大波小波余裕で越えたい訳じゃない

余裕などないが毎日食べてます

ゆとりある笑顔に風雨風いである

なんだってうれしい余裕ある笑顔

まだ余裕あるのか騒ぐ好奇心

一粒の種のパワーが移る秋

パワー全開そんなに無理をしなさんな

年輪が静かに醸し出すパワー

徑子

夕胡

准一

輝子

和

富美子

和香

あきこ

泰女

小雪

三喜夫

千代子

克子

和子

紀久子

大輪

よりこ

美羽

西宮北口川柳会

黒田

能子報

風が出たらしい夜中に聞く葉擦れ

終章を笑顔で秋の葉が落ちる

すこやかに咲けと二葉に愛の水

落葉浮く風情が好きで湯につかる

じゃんぱくじ当って居たら別れてた

金成る木もしも生えたらネット張る

穴を掘るもしもの時の用心に

万が一三億当たれば助けがね

もしもには及ばぬ恋を実らせる

もしも時雨に遭わなかったらうふふ

浮かれまい緩い靴紐締め直す

車座で私ひとりか浮いている

逢える日はなぜか心が浮いている

煩惱の最後に残る浮気くせ

古里を沈めたダムに月が浮く

五月

光子

哲子

章子

忠

正和

朋月

萬的

能子

いたる

春蘭

松煙

保州

緑良報

牛尾

川柳塔わかやま吟社

精一杯生きたい今日という途中

保州

名勝を巡り巡つて良い目覚め
下の孫あやしていたら上むくれ
微笑みの心をあげるとなにも
煩惱に後押しされて生きている

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

開子 二英 孝一 光久

なんだ坂こんな坂だが吐息する
年金じゃ蟹のグルメも遠慮する

人使い荒い主人で妻元氣

植木市ぶらりのぞいてあれやこれ

耳障り我が子に使う丁寧語

お布団で今日の命を感謝する

秋風がセクハラをして駆けぬける

金木犀行きも帰りも立ち止まる

雑念が浮かび話の腰を折る

灼熱の夏を見送る彼岸花

電柱が地下にもぐって町並変わる

ぶらり出た宇宙でかぐや姫に逢う

ライバルの死角で鶴を折っている

寡婦五年内緒話もすこし増え

糞虫がぶらりと秋にぶら下る

ハーブ茶でぶらり心を遊ばせる

電柱の陰で見守る子の使い

バーゲンの列に押されて無駄づかい

余生とやぶらりぶらりが板に付く

むらくも川柳会

毛利

幸報

髪型が胸の思いを語つて

蘭水

夕顔のロマン涼しく月に浮く
検診を控えて酒を少なめる
平らかに母は与えている乳房
新仏ふたり仲良く香の中
民族の祈り平和の鳩が飛ぶ
子守歌聞こえますかと野良の月
よこしまの雑念払い前を向く
ひたむきに国に捧げた夢の跡
山葉の色あざやかに秋を盛る
長生きは笑顔たやさぬ日々暮らし
今日もまた静かに暮れる湖といふ
イナバウアー私は前に大曲り
長寿こそ生きた歴史の博物館
母の日に幸せ一杯宅急便
忘れてたホールインワンこの味だ
ここいらでよくよ忘れ今日の夢
外仕事日かげもなくて玉の汗

大原川柳社

山本

玉恵報

お願いの途中で消えた流れ星
卒寿とや今日一日を大切に
年金で食えぬ百姓しています
もの言わぬ日も有り唄が救世主
飲酒運転上手に逃げて丸儲け
雑魚の夢今もそれなり抱いている
大きな丸囲んだ孫の運動会
老斑の素顔に似合う頬かむり
草を抜く草の無念を聞きながら

瑞枝 俊夫 秀夫 嘉寿子 愛子 信夫 幸 義良 恵美子 ます美 秀子 定子 彰 喜美 美保 安男 英男 美芽 みづえ 敏夫 さちこ 地佳平 南花 辰江 悦子

早湯米機械の音に気忙しい
病む子への願いは一途命乞い
世の中はトラブルだらけ胸がつむ
久びさに我が家に待っていた笑顔
海渡る孫にエールを送りたい
朝夕が涼しくなつて軽い足
ボイ捨ての塵にモラルも地に落ちて
果てのない言葉あそびのいろは知る
よれよれの心を干そう秋の天
さり気なく聞いた言葉が胸をつく
お転婆も今日は見合へしおらしい
派手になり勿体ないが捨てる服
風向きを気にして女ひとり住む

京都塔の会

都倉

求芽報

どの姑も嫁へ傾き感じられ
懸命と伝わる愛の底力
罪のない話をしよう秋夜長
かすみ草だけを残して枯れた花
ノーマークだったと悔やむ敗けうさぎ
元氣だからマークが出来るカレンダー
腹案のユーモア入れた名講義
懸命な思案へ出口見つかった
くちはてた案内板で迷い道
定年で家事分担の案を練る
招待状 出欠思案 二三日
音信が途絶え案する彼岸花
案する女子等の未来は子が決める

喜美子 巴子 美佐子 みさえ たつ子 静子 絹子 あすなろ 真 ための あやこ 文代 玉恵 輝美 ふりこ 鹿太 正坊 藤重 益子 典子 綾子 克治 満子 きよし 美義

投げやりな気持ちになつてくるニュース

投げ返す言葉他人になる夫婦

一石を投げて味方を見定める

投げ捨てた言葉がピンとはね返る

投げませんでした老春がありそうで

やっぱりな小石を投げたのはあなた

投げられた言葉がうすく長い夜

限度額ちやうどが好きなお役人

ここまでを限度にしたい物忘れ

息継ぎに失敗したか小休止

謙遜のしすぎも見苦しいものだ

ワンルームの城に自由が無量大

長柳会

村上直樹報

朗々と一詩一献月さやか

名月と美女に見とれてけつまずく

月参り初恋人になつたりと

神無月出雲大社は太騒ぎ

菊活けて秋を演出客を待つ

月見酒ほろよい気分千鳥足

飛び入りにあつてに取られ鈴正す

この秋は何処に行こうか金はなし

お迎えの母に飛びつく保育園

菊の香に心も洗う墓参り

父の背を飛び越え行くと願う母

この夏を越せたやすらぎ月を見る

この月を北のあの子も見てるかも

とし子

篤子

庸佑

欣之

求芽

牛延

百合子

宏子

福子

則彦

昌乃

啓子

葉子

直樹

もこ

明信

不二雄

靖子

輝子

マサ

靖博

武男

登美子

明子

芳野

三和子

今はもう飛ぶを忘れて唯歩く

午前様鍵穴さがす月明り

居待月今宵は月をひとりじめ

三日月を背な夜勤の夫婦る

遠い日の君と飛ばした竹とんぼ

月給を手渡した頃亭主の座

それぞれの歴史刻んで古稀多才

床の間に菊一輪が凜として

少年の目になり飛ばす竹とんぼ

告白は月が雲間に消えてから

秋刀魚焼く平和がうれし菊日和

焼芋の香が邪魔をする菊花展

満月を割って泳いだ池の鯉

愛込めた父の拳骨飛んで来る

彩りを添えて叙熱の菊日和

妻の掌の上で飛んだり威張つたり

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

吹つ切れてゆつくりお茶を飲んで

バス停でばんやり人を見ている

つり合わぬ花をコップに活けている

影法師草にかくれて泣いていた

団塊の世代を泳ぐ金魚たち

八十の坂はゆつくり登りたい

古い家老人二人広すぎる

もやい舟錆びた港につながる

熱帯夜寝がえりばかり朝が来る

近く夏につくつくばうし声高く

正一

正博

一慧

正子

けい子

幸雄

史

敬二

和代

よしお

富美子

淳司

英美

たけし

和子

正美

恵子

田鶴

てい子

千春

瑞枝

天雀

晶子

那珂子

章江

春枝

ひぐらしに山家のそばをすりおり

暑かった夏に別れを言いそびれ

秋立ちて真夏の愚痴が遠ざかる

隣の犬が家族のような目で見つめ

手の相が変わりまだまだ生きのびる

福相で招いたように人が寄る

草もみじ逢えない人に逢えそう

広すぎず等身大の守備範囲

のらくろで育つた倅天国へ

回転ドアから親王のご登場

パソコンも携帯も無く世を渡る

豊中もくせい川柳会

江見見清報

山頭火ブライド捨てた句が生きる

よく喋る男と知って距離を取る

ブライドが邪魔して何も出来ぬ人

ありがとう妻のおかげで食べられる

人間は地球いじめて何処へ行く

ブライドが疎ましくなるハイヒール

老いてなおブライドのある夏背広

残照へ心身ともに癒される

ここだけの話と揺れるイヤリング

毒キノコ山も空にもいりません

母と娘のお喋り続く秋夜長

本たまたみ上げ空の爽やかさ

うちの庭お喋り好きな花が咲く

黄身ふたつ今日のヤル気をくすぐられ

悪いことしてきた夫よく喋る

寿々子

蘭

すみえ

ふみ

亜弥

雪江

ゆき

日枝子

紫泉

千代

初枝

啓生

庸佑

知香子

重人

タミ

春

和子

慶子

郁子

巴子

勇治

美義

玲人

早人

朋月

喋りたくないからせつせと食べている

すすき活け月も団子もひとりじめ

妻の客に物も私も隠される

ブライドの腕を隠している背広

松茸がほしいと無理なことを言う

雑草の天狗の鼻にあつた疵

形見の本上げて淋しい父の部屋

半日を喋り尽くした妻の客

千切られる身にもなれよとパンの耳

手を合わせ頂いてます日に三度

口数が過ぎて秋風吹き抜ける

コスモスのおしゃべり風がつれて来る

言いたいこと寝言のふりして喋ろうか

良く喋り良く笑つて花畑

ブライドを蹴散らす靴を光らせる

川柳ねやがわ

森

海が鳴る冬の嵐の日本海

倦怠期小さな嵐は今日も吹く

妻の目が嵐の前に笑つて

男子誕生ひとまず嵐おさまれり

身をまかせ恋の嵐は夢中

まだ生きている照る日曇る日嵐の日

小嵐は吹くがにぎやか三世代

収穫の秋かつさらう嵐くる

恋点火女ころに吹く嵐

抵抗の数を重ねて卒寿坂

ポーズとりちよつと抵抗して見せる

寿美子

満寿巳

見清

寅次郎

正坊

萬的

都代子

尚士

則彦

肋骨

幸雀

宇乃子

夢

比ろ志

求芽

茜報

忠央

博泉

麗

たもつ

鈍甲

一炊

かすみ

一風

朝子

一笑

さち子

組板の音がはげしい嫁姑

抵抗のテロに手を焼く地球人

抵抗はしないと決めた風車

抵抗をしてくるのか妻ふて寝する

注意して見れば私もいい男

された方はしかと覚えている注意

注意され初めて気づく癖がある

煩いが妻は注意もしてくる

今朝もまた同じ注意で子を送る

きれない子だと見きわめてから注意する

代々に伝わる槍を持て余す

持て余さないで保険も掛けてある

持て余す金が人相まで変える

泥酔の友が誘った三軒目

持て余す無聊打ち込むもの探す

あんたもう何してもええ好きにしい

愛されて愛して今は持て余す

ニンニクのパワーに鼻がまず負ける

この星を銀河遺産にしませんか

尼崎いくし川柳会

春城武庫坊報

今更に無知蒙昧に揺れもせず

ローカルでのんびり揺られ古希の旅

動く雲あやしくなつて急ぎ足

胸に秘す想いに駆られ動く筆

支障なく四肢が動いて幸せだ

母の味つたおはぎは好評で

秋風の流れる川辺身や寒し

とし子

高栄

郁夫

薫

九好

恵子

茜

洋

庸佑

弘一

典子

妻子

博泉

弘風

ルイ子

利昭

仁清

修

ただよし

朝顔のまだ咲いている散歩道

行く夏のつかれか朝顔ただ一輪

皮むきはボクの仕事の栗ごはん

産院の待ち合い室に在る笑い

波長のずれは申すまじ夏終る

水槽の魚のように寿司回る

団子屋を見て名月は雲払う

過去はまだ等身大の影を持つ

美しい言葉で日本救えるか

鈍行に変えて楽しい日が続く

てのひらにうつろいやすき秋の水

城北川柳

吉岡

決断をしよう茶柱立っている

ピーナツが笑い転げる缶ビール

整形でシリコン詰めてある乳房

美しい国も豊かであればこそ

ありがとう豊かに暮す合言葉

豊かさに感謝の心消えてゆく

ありがたや水と空気のうまい国

三角の兜に意地を折りたたむ

万華鏡その三角のミステリー

目も口も三角にして反抗期

不等辺三角形が僕に合う

三角の魔女の帽子を娘に譲る

デルタから子孫が育ち六〇億

三角の底辺の下もがいてる

三角の先を持たせてだまし舟

正子

千恵

純

寛之

年代

宏一

勝巳

久子

守弘

紀乃

薫

修報

重人

郁夫

萬的

利昭

集一

高栄

修

とし子

柳弘

倫子

東吉

明子

ただよし

美智子

一步

三角巾恋の痛みは包めない
落ちてゐる財布は踏んでみたくなる

里の土踏めば靴まで弾みだす
軽やかなステッブ妻はまだ女

石庭の簾目泣かす猫の足
踏み込めぬ垣があります嫁姑

めきめきと女らしくなる少女
めざましい上達母の褒め言葉

背と髭が伸びて息子は他人めく
残り火を煽るがごとく曼珠沙華

何時までも輪の中にいる卒園児
ひと筋の涙へ男揺らぎ出す

動かずに食べて団子の三姉妹
年金が減つて医者代増えてくる

何思い一途に歩くかたつむり
川柳塔まつえ吟社

昔も今も靴が鳴つてゐる通学路
いつの日かきつて平和の鐘は鳴る

客二人小さな駅の発車ベル
砂が鳴る不思議の国へきたようだ

晩鐘を静かに聞いている野菊
収穫の鳴子賑わう村祭り

豪雪と水害越えて稲の出来
収穫に畔で燃えてる曼珠沙華

収穫を楽しみにして汗流す
収穫に園児がはしゃぐ芋くらべ

収穫の笑顔の揃う泥落とし

弘風

あやめ

志華子

昭

順三

叡子

達子

ルイ子

和夫

朝子

春蘭

はじめ

昭子

典子

秋の味初の収穫仏前へ
言い勝つてさても空しい秋の風

さてそれで後が気になる好奇心
言い過ぎた事はさておき酒にする

さて次は何をしましょう耳掃除
見た人に会つてさて名がでない

さてこの切手誰に貼るか悩みだす
どう呼んでみても戻らぬ夏の雲

テノールで呼べばソプラノが返る
呼ばれても耳が嫌だとそっぽ向く

呼ばれたらハイと返事は一つだけ
女関で呼んでゐるのは招き猫

さりげなく呼んだが声はふるえてた
どうしてもさよなら出来ぬ影という

手も足も短い影がついて来る
彼岸過ぎ人影遠く墓地の風

現代つ子恩師の影をふみつける
古い知らぬ男の黒い影法師

俺の影俺が踏んでる情けない
川柳塔みちのく

長旅もやつぱり妻の味噌汁だ
りんご剥く鍵つ子姉妹留守まもる

少しづつ味を引き出す夫婦仲
子の帰省母が気をもむ古時計

さり気なく留守をしてゐるまねき猫
出稼ぎの帰り待ちわび留守家族

若い妻亭主元気で留守がいい

政子

雪代

札子

治代

茂美

英子

紫晃

桂子

畔

幸

多賀子

蘭

たけし

多喜

三回忌子舟が少しづつ動く
留守しても鍵もかけない村平和

声通る仲で隣家に頼む留守
玄関の靴が無口の居留守見せ

走馬灯消したい過去が多すぎる
どじばかり踏んでる指を許せない

鍵つ子が扉を開ける寒い部屋
留守中に咲いていました彼岸花

どんぐりころころリスも兎も餓えて

川柳大坂

長井

善純報

甲子園球児の進路別れ道
うちの嫁時々いてへん事がある

いてへんか財布落としてくれる人
独りしかいてへん横綱おもしろい

逆らつた心を叱る空の青
居心地が悪いか諭吉すぐすねる

すねる子に親のしつけを垣間見る
モーツアルトの名曲聞いて寝てしまふ

その角を曲がると好きな人の家
すねるより刃物が早い現代子

いつまでもすねる男は見苦しい
読経聞く山場に足のしびれ切れ

ふさあ

井蛙

順風

銀波

黙人

花峯

慕情

五楽庵

五

孝一

洛醉

まつお

みちこ

喜楽

我家では継承順位ありません
点検の誤射で実弾飛ぶ怖さ
温暖化考えようよ真剣に
事件事故防止めがきかぬ低年齢

高齢に冷たい政治加速する
叱るもの無くて長きひるねかな
テロ戦争ああ中東の灯はきえぬ
原発のゴミの捨て場を誘う金

いてへんで白馬に乗った王子様
いてへんと言えば留守番楽なもの
すねること覚えて母を困らせる
初孫もすねて甘える術覚え

すねられるたびに財布が軽くなる
翠洋会 谷口

金賞をあげたいような子の笑顔
金離れきれいな方と煽てられ
半世紀首に確かな金鎖
金棒をなくした鬼の日向ぼこ

割り勘に下戸を承知でさそわれる
五万より百均眼鏡よく見える
金の波桶櫓がゆれて平和です
わが家には金の王子が育たない

曼珠沙華亡母の誘いのこつく咲き
酒出ると言えは必ずついてくる
ドラマでも演技に涙誘われる
誘われて八方美人になるわたし

悪友の誘い嬉しいこんな夜

紀雄
かよこ

勝弘
功

川童
春蘭

鉄心
司

笑風
彦太

善純
義報

みつ子
尚士

理恵
富子

捷也
れんげ

水昇
日の出

桃花
昭

絹子
志華子

恭昌

同じ服センスの良さが光ってる
来し方のセンスが光る老紳士
芋十貫目背にセンスなどない戦後
アルバムの若い自分に叱られる

赤いシャツ妻のセンスを受け入れる
特許出すほどのことない思いつき
名月も地球の病憂いてる
小道具に独楽取り出して孫を待つ

遊ぶ事みんな覚えた三代目
挽歌引きずって明日の風を待つ
祝親王おしるし植樹高野山
真つ白いご飯を食べて出直そう

握手して頂いた笑顔忘れない
やることはやった白寿のひとり旅

高知川柳社 川竹

夏山の空気で体大掃除
どうする空気汚したのはヒト科
ひかえ目で無口空気のような人
密室の空気を熱くする二人

お茶の間の空気が和む孫の声
空咳へ悪い予感のする空気
二人三脚空気のような妻がいる
三世代同居の家族光ってる

軒下のつばめの家族無事巣立つ
信じ合う家族の絆こそ宝
気遣いのメールで家族輪が丸い
与え過ぎ家族の絆狂わせる

舞夢
叡子

春
すみ子

蕉子
集一

満作
正雄

千梢
千歩

義
さと美

照子
正坊

京子
千鳥

てつを
快風

功
暖

正躬
野風

幸子
良雄

典雄

三猿に徹し同居の灯を守る
家族の和ただそれだけに気を配り

南大阪川柳会 吉川 寿美報

逃避行ゼロから始めた新世帯
可能性いっぱい秘めたゼロ歳児
ゼロからの出発だった立志伝
わたしから貴方を引けばゼロになる

ゼロ歳と百歳わが家取り仕切る
小遣いは削るなビールまじくする
母子家庭骨身削って二十年
でっから骨身削って出すのれん

幾星霜命削って拉致家族
酒タバコそこそこにせな倒れるぞ
そこそこの暮らし笑顔を忘れない
そこそこの幕らし笑顔を忘れない

そこそこのやめるつもりが終電車
出来栄えはそこそこの嘘も利いている
そこそこの出来るが一流にはなれぬ
金持ちのそこそこの僕のそこそこの

勉強もそこそこのでてて人気者
土壇場は大阪弁が丸出しや
土壇場に好きだったよと言うつもり
ドタキャンで白けた席を抜けて出る

土壇場で命救ったチヨコ一つ
土壇場で一豊の妻家出する
土壇場で少年が抱く起爆剤
産業が栄えて心飢えている

豊かさの影に産業廃棄物

三郎
和江

とし子
楓楽

柳伸
寿美

ばっは
弘泰

ルイ子
章久

叡子
勝弘

更紗
昌紀

修
東吉

たもつ
利昭

福世
弘風

弘子
一步

憲太郎
雅文

栄子
遠野

土壇場に腹切る覚悟持つている
灰汁のない言葉土壇場を裁く
食品産業いろいろはいる添加物
大企業支えて励む町工場
明るさがまだ届かない町工場
土壇場で挙式早めた訳を知る

川柳さんだ

北野

哲男報

退院率いい病院を探してる
搦め手を知って攻め来る妻の愚痴
閻魔からお呼びあれば断れぬ
時時は小言を聞いて親孝行
紅ささぬ男無用の葉指
まだ少し明日をあなたと旅します
おはよりの言葉が出ずに重い朝
立て直す国に老後の金が減り
故郷に鬼こっこした森がある
両の手を合わせ朝日に祈ること
豊作の部落絵出の道普請
何もない田舎に星がたとある
日帰りの句会も楽し旅心地
退職後まだ傳いて日本人
デイサービス今日一日の小旅行
計画の序曲が楽し時刻表
栗ごはん食べ松茸のこと思い
畑への道がわたしの御堂筋
美人の湯有効期限には触れず
茅茸きに父と地酒が待っている

郁夫 柳弘 萬的 志華子 尚士 なぎさ
好文 茂山 修 俊昭 一泉 宣子 開子 和代 雅司 キヨミ 美紗子 歳子 婦美子 二英 藤朗 光久 正和 千代子 哲男 美代子

警官の案山子の顔が締まらない
五臓六腑弱いところから負けていく
弱き者それは男と書き換える
足腰の弱さを口がカバーする
悪女にはなり切れないでいる弱さ
弱そうな女の顔に騙される
お互いに弱味持つてるから夫婦

いずも川柳会

佐藤

治代報

剥ぐ事を忘れた口のカットバン
雨やどりははずむ話に濡れたまま
新しい手帳に貼ったスヌーピー
降り出した雨にシナリオ書き直す
白黒をつけるとどつと雨が降る
人の世の森で迷ってばかりいる
降り出して笑顔になった春キャベツ
わたくしの森大切に囲っておく
ストレスをこっそり捨てる森の中
降り出して一期一会の雨宿り
星が降るたつたひとりのわたしにも
年金で買わねばならぬ処方箋
逆さまに貼った切手できた誘い
降り止まぬ日には賢治の傘の中
どんぐりが秋だ秋だと騒ぐ森
トイレの壁がアイウエオから九九になる
保護色に染まって森で昼寝する
ほろ酔いの日に星屑が降りそそぐ
森にまた帰るつもりの再生紙

孝一 順子 忠 章子 鹿太 朋月 千代 健 桂子 喜子 治代 美江子 キミエ 敬子 テル子 多喜 富恵 玲子 久子 歌子 寿美 昌枝 浜丘 彬

人間のエゴがひしめく森の中
貼った痕残して壁をよこしてる
一粒が個性で光るさざれ石
神木にふれると森が騒ぎ出す
霜の降る夜はしんしん痛む胸
何が降ってももう泣いたりはない秋
小粒でも辛い山椒が味を出す
時雨の夜阿吽の傷を庇い合う
森は一途に汚れたものを吸うて吐く
萬札を出して大根買っている
大粒の指輪は見える位置で舞う

わたの花

山本

宏至報

静けさが物悲しさに秋の月
疑いが晴れて見上げる青い空
スランプへ特効薬の孫がきた
外人に国技独占見たくない
羊水の海母の港にたどり着く
兄嫁の都合も聞かず里帰り
スランプを乗り越え響くハーモニ
紀子さまは悠仁さまにご満足
幼児の根気培う読み聞かせ
老々介護根気が尽きて眠気来る
疑って見てるが見抜けない手品
毒気抜け行く度心丸くなる
秋末のに飛蚊症です我が余生
約束がときめく心盛り上げる
疑心暗鬼がだんだん薄れゆく良夜

多輝子 まこと 蘭水 房子 美佐子 文子 きみえ 多賀子 章峰 茂美 ちかし ふりこ 宏至 知佐子 莊治 ますみ 美代子 愛子 博子 君江 耀一 はじむ 義明 たえ子 妙子 宏

親子の間に合いつて悲劇を避けている
グレイゾーン心の隅に魔女がいる
抜け出せぬスランブなんて無いはずだ
税アップ金利少なくて財もなし
疑いを知らぬ少女の瞳が綺麗
神さまがくれたスランブ楽しもう
カモフラージュしながら生きる不整脈
古都の鹿英語へ軽く頭ふり

岩美川柳会

石谷美恵子報

満天の星空歌が湧いてくる
青い空くれた一句にほっとする
ぎしぎしとするなあしたは明日の風
ひとひねりすればぎしぎしなくなる
ぎしぎしとなる巻く釣糸に胸がなる
ふる里をぎしぎし詰めた段ボール
ぎしぎしとなる音がよい水車小屋
ぎしぎしと研いでも妻は爪隠す
ぎしぎしと男は沽券捨て切れず
ぎしぎしと弁当詰めた亡母だった
悪人が善人の真似してみせる
けものにも妻や子の待つうちがある
にんげんは金で勝負をする獣
猫に虎うわばみも座す酒の席
子育ても獣に劣る親が増え
獣でも嘗めて子育てやっている
寅歳に生まれ気性は猫のよう
マツタケと蟹に反応千ボルト

晴美 俊子 浩三 正春 みつみ
民 一風
一京 菖子 一瑠 はお 重忠 蟹郎 たぬ 幸枝 かつみ 螢 圭一郎 よしえ 公乃 和子 雅子 忠良

反応を見てじつくりと矢を番え
延命に拒絶反応確と見せ
生睡が反応をする赤提灯
ぎしぎしのあばらへ酒の潤滑油

岬川柳会

八十田洞庵報

生活の壺を押えて心地よく
からっぽの器に入れる母の愛
川柳のうまし水湧く泉南に
聞くはヤボ言葉の裏のかくし味
茶断ちしたわけは誰にも言わぬ母
万能の温泉宿で至福どき
さよならともつれる舌でひとり酒
盛りつけを見透かしている白い皿
気がつけば昨日と同じ探し物
近づけば花も何かを言いたそう
散歩した日はカレンダー丸じるし
海外へ誰もが行ける世の流れ
蟬の皮張り付く塀に秋の風
無茶な絵と見てもピカソと聞けば良し
諦観へ老眼度合いまた進む
ときどきは気候な旅で蘇る
どっこいしょお尻ふりふり初歩き
面接のドアへネクタイ深呼吸

八尾市民川柳会

宮西

正直に誰と行つたか言いなさい
人生はぬきつぬかれつ今が春

孝男 茶子 公子 美恵子
富美子 和香 和美 蛙城 洞庵 里子 令子 俣子 年子 茂平 洋子 とみ 孝子 悦子 信博 都 桜琴 貞夫 芳香 レイ子

弥生報

言い訳を黙って許す母の膝
欲深い祈りの手から洩れる福
終電に景気がチョット顔を出し
冤罪が晴れた勝訴の蒼い空
言い訳のトットモ上手なうちの人の
言い訳は聞きあきました花名刺
エアポート隅に難民らしき群
翼休めに公園へ来る戦士たち
ストレスがすつ飛ぶほどのいい笑顔
人文字を飲んで己に勝つ舞台
少年の一途負けの字が書けぬ

川柳塔打吹

野口 節子報

臍曲りどこまで曲るあの世まで
泣き過ぎて笑い過ぎてでべそになる
ブーメランおまえはかなり臍曲り
倉吉は鳥取県のへそである
俺の臍可愛い孫がくつわかつ
へそのない奴が騒いで雨を呼び
反抗期親の証拠に臍の緒を
精一杯燃えた紅葉も力つき
古桶の坂越したらみんな枯すすき
枯れ枝にひかかっている理想論
煩惱が枯れると人は丸くなる
かすり傷なのになめていて輪をかける
七輪で焼いた秋刀魚の味恋し
石を投げ水面に浮かぶ癒しの輪
輪の中で荒波知らず平和ボケ

あかり 宏至 浩三 欣之 春蘭 まつお ダン吉 ますみ はじむ 柳伸 弥生 富恵 みち子 三津子 公恵 勝憲 佳女 貴恵 龍枝 幸子 芳光 照彦 美恵子 玲子 紀美子 孝恵

すいすいと飛ばす風の子一輪車
一輪の花に迷った其の昔
輪になって歌った校歌遠い日に
輪の中で勝った負けたとさわいどる
輪の中で生まれ育って行く私
かごめの輪の中に忘れてきた童
辻褄の合う夏風邪に裁かれる
法廷の裁判官も人間だ

裁かれるぐらいなら僕ボケてやる
発芽率百パーセントの苗裁く
人情を越えて裁判官伶俐
裁かれてつなぐれ窓の白い月
国境に裁ききれない線がある
公平にみんないずれば死刑なり
越境の柿の笑いかか裁こうか

川柳エスボ

山本 三郎報

病床で長い一日もてあます
覚悟決め老々介護に徹す日々
レストラン夜景はおまけ二十階
登下校見守る腕章街に立つ
錯覚にボケが加わる八十路坂
すきな歌聞いてストレス溶けてゆく
停年で明日が楽しみ料理好き
父の日や孫の自慢を吐きに来る
濁流に自然の力思い知る
慈母と鬼女怖い女の二面性

善江
きみ子
たけ代
石花菜
美知江
克枝
美ツ千
螢

ゆき子
とよ子
さち子
一幸
大豊
星花
義恭
さとし
文好
三枝

エリート心の闇に潜むエゴ
0金利投資疑惑を抱え込み
淋しさを紛らす色の万華鏡
日本語これからの子に英語とは
願い事何度書いたかたんざくに
天皇も黄金田植え鎌を入れ
申告漏れで所得隠しは許されぬ

川柳藤井寺

高田美代子報

下駄箱で眠ったままのトウシューズ
ワルツより炭坑節の似合う顔
ラストまでこのまま踊り続けた
コスモスが風の吹くままするダンス
秋風が吹いて木の葉がダンスする
頬染めたフォークダンスが赤い糸
苦心して作ったお米盗まれた
苦しんだ数だけ竹に節がある
屋上から民の苦しみ見えますか
どちらにも花を持たせて苦勞人
メタカの学校も苦慮が多くて泣いている
十年が経って曲がつてきた苦節
それ程の苦もなく余生よしとする
苦心して黒字に交えた社の赤字
温室で苦勞知らずのまま熟れる
苦に耐えた男が隅にいて光る
父の苦勞酒三合でチャラになる
苦しみに耐える男の顔の艶

みさと
高栄
れい子
一炊
和子
晩翔
三郎

雅枝
志洋
光男
喜代子
ヨシ枝
絹枝
政男
扶美代
一步
史郎
栄一
進
シルク
耕策
龍一
みつこ
昭子
鐘造

倉吉川柳会

竹信

照彦報

わらび餅介添えの娘と分けている
介護保険天引きなんてひどすぎる
ロボットに介添えされる夢をみた
ちよっとだけ貸して下さいその肩を
ひいじいさんの介添えのおじいさん
差し伸べる手の温もりを知る介護
介添えの朝の笑顔を待つ患者
然りげなく差し伸べた手が喜ばれ
介添えは亡母が残していった杖
介添えの如来菩薩と棲んでいる
下り坂誰も介添えしてくれぬ
夕焼けよ明日も天気やろうなあ

吹いてみて燠のあり無し確かめる
ハリケンその一瞬にある宿命
追い風が吹いて自転車極楽極楽
強風が吹けばあなたの杖になる
書き終えて消しゴムのかす吹き飛ばす
吹き荒れる子供の心理解らない
吹く風に髪なびかせた頃もある
昭和平成極楽に移り住む
移り気な花に貰った種ひとつ
窓際に机移され耳掃除
故郷を出て幾度移転か指を折る
新居には貧乏神も移り住む
家移りをしてから運が上を向く

瑠美子
武義
いさお
アヤ子
一箇
絹歌
東吉
淳司
悦子
六点
重人
静子
玲坊
康子
日出子
幸子
風露
由紀子
瑞子
螢
睦子
よしえ
和子
泰輔
かつみ

甘酒のらりくらりと胃に辿る
介護保険使わずに逝く愛国者

祐子 鬼一

じいさんに保険をかけて放し飼いの
ガン保険役立つことがないように

石花菜 完司

楽しみは簡易保険のクルマ旅
お宝も保険もなくて背が寒い

賀寿恵 きみ子

気休めに入った保険に助けられ
学資保険孫の成長見守ろう

悠子 京子

毛嫌いの保険に命救われる
励ましの心でつなぐ千羽鶴

西喜美子 重忠

愛称のままですつながるおない年
つながりを経てぬ未練の貸した金

玲子 萩江

有名になればつながり寄って来る
孫の顔血のつながりを感じさせ

前喜美子 満

遠縁がつながってくる選挙戦
葉は枯れて春につながる芽を宿す

次男 龍枝

美人なら葉も効くぞ口移し

照彦

川柳茶ばしら

板山まみ子報

消火器の詰め替え頼む防災日
曇天へ読書のはずが夢の中

秀水 百合

だとしても格差にひびく子の未来
逆風の中で男は四股を踏み

美千代 盛夫

虐待児女に化した母に泣き
Gパンが見える牧師のお説教

幸子 かつ子

釜の飯食べた仲間のボケを聞く
大海を知って作句のままならず

文男 まみ子

岸和田川柳会

原 さよ子報

泣き笑い人生続くふたり旅
友と笑い夫と笑わぬ食事する

みよ子 和美

家中が笑う父さん退院日
川柳で笑う仲間が今日もいる

力子 房枝

神様がくれた笑いで楽しもう
九条を愛する笑ってはおれません

笑司 丹吉

木枯しに遊び惚けたキリギリス
身の程をわきまえ破目をはずせない

仁緑 弘子

大阪のオパチャンうまく利用する
今更と思いつく白髪また染める

淳子 幸子

今更と言わずに化粧しておく
今更と昔の自慢をそらで聞く

寿海 純風

地震国今さら何処に逃げようか
入れます 今更だけど掛け始め

ふみよ みつ江

噂では別れた事になってる
皺くちやのお札噂をたんと知る

珠子 守

そのうちに噂消えると慰める
駅でふと死んだ噂の人と会い

ゆい 蛙城

勝ち組の人の噂が癪の種
噂ほど美味しくなくてがっかりだ

洋代 檜代

噂だけ一人歩きで帰らない
朝撒いた噂一周して帰る

清 香代

押えつけ有無を言わせぬ星条旗
夫婦でも押える愛とほめる愛

俊昭 浅子

うれしさを押え切れずにガムを噛む
胎動を押えて母の顔になる

泰弘 ゆり子

人情の機微に鋭い遊び人

東吉

第56回 西大寺会陽川柳大会

とき 平成19年2月18日(日)

午前10時 開場

午前11時30分 投句締切

午後1時 開会

午後4時 閉会予定

ところ

西大寺ふれあいセンター

岡山市西大寺中2-16-33

TEL 086-944-11800

(赤穂線西大寺駅より徒歩7分)

両備バス西大寺バスセンター

より徒歩5分

駐車場 西大寺ふれあいセンター駐車場

会費 2000円 (同センター西隣)

(作品発表会、記念品、昼食等)

※各題2句吐、読み込み可

※欠席投句拝辞

※各題特選3句、佳句5句呈賞

(岡山県知事賞他)

兼題と選者 「ランク」 木本 朱夏選

「酔う」 土田 道明選

「斜」 田村 道明選

「瓶」 赤松ますみ選

「逃げる」 田中 道博選

「無」 坂井 半升選

「肌」 牧野ねえね選

席題(当日発表 竹原汚痴庵選)

付記 あなたの雑詠一句をお持ち下さい。

発表誌に載せます。

主催 西大寺川柳社

柳界展望

戦争の愚かよ満月が曇る

播本 充子

○不二見川柳社創立70周年記念大会（栃木）に於て同人の次の句が天位に入賞。

この辺でいいかで今の妻が居る 野崎 勝

○第7回香川県川柳大会は9月30日、201名の参加で開催された。同人の受賞

狭くとも心休める城がある 原 賢

気心の知れた隣が火種抱き 伊勢八重子

○第14回相生市もみじまつり川柳大会は10月15日(日)相生市福祉会館にて開催、同人の受賞は次の通り。

〈相生市長賞〉堀 正和

〈文化協会賞〉山本 玉恵

〈天位〉

神様を悩ます絵馬を吊っている 西内 朋月

○千葉県民芸術祭参加川柳部門で同人の次の句が受賞

10月15日の千葉県川柳大会に於て表彰された。

林中央公民館に於て72名の出席により開催。同人天位

花の名で淋しいところ埋めている 太田扶美代

○第39回吹田市民川柳大会は10月29日吹田メイシアターで124名の参加により開催された。同人の天位

脳死者の髪が叫びのよう伸びる 出口セツ子

コンバクト覗いて今をたしかめる 西口いわあ

生真面目に光らぬ石をまだ磨く 岩崎 公誠

白い秋のちの坂の途中です 大谷 篤子

年間旬報の中からの受賞句〈文化団体協議会賞〉

老いらくの俸せ旨きよも 乙倉 武史

尚一般市民から27名の投句

○第30回寝屋川市民川柳大会は11月3日寝屋川市立総合センターに於て89名の参加により開催。同人の天位

草に寝て宇宙の中にとけ

新同人紹介

佐さ 藤と 古こ 拙せつ

―天笑・五楽庵・効推薦

てゆく 前 たもつ

計画へ鋭い父のアドバイス 河井 庸佑

○和歌山文化協会主催の第48回文芸まつりに同人の次の句が入賞。

〈ニュース和歌山賞〉

満ち足りて明日へ沈んでゆく夕陽 上地登美代

〈文化協会賞〉

お見舞のぶつきらばうに血が通う 澤田 和重

何よりの肴は積もる話なり 三宅 保州

▽同人動向△

○10月22日、第30回鳥取県川柳大会出席のため、みつ子副主幹他4名鳥取市行。

○10月30日板尾岳人相談役他10名は熊本県山鹿市へ川柳普及と親睦を兼ねて吟行

同市の誌友と句会を開催。

○西宮北口川柳会新役員。

黒川紫香会長死去に伴い新会長に西口いわあさん就任

○京都市伏見区桃山町のJ EUGIAカルチャーセン

ターに11月から川柳講座が開講された。講師は副理事

長の前たもつ氏、第4金曜日13〜15時。問合わせ0120-6993-7000

▽訂正とお詫び△

○11月号6頁下段、松江市古手川光→松山市

○11月号100頁弔吟追加。

さくらさくらお手手つな

▼計 報▲

いで歩いたね先生

橘高溪子さん（故橘高薫風

宮崎シマ子

名誉主幹夫人）11月6日病

百歳の優しい笑顔雲に乗

気のため逝去。享年77歳

る 山口 光久

常任理事会11月20日出席

元氣川柳募集

締切 12月31日（官製はがき）

応募、問合せ 〒329-1217 栃木県塩谷郡高根沢町

大字太田750-1 高根沢町観光協会事務局

TEL 028-676-1441

身近な「怒り」の川柳コンクール

公共正義の立場から感じるいきどおり、身の回りの出来事に対する明るい怒りを川柳にしてください。

締切り 1月31日 審査委員長 木津川 計

投句用絵馬 1枚400円 2枚セット600円

発表 3月31日（HP・入賞者は本人直接）

お問い合わせ（主催）

〒678-0239 赤穂市加里屋68-9

赤穂商工会議所内

TEL 0791-43-2727

お知らせ

10月20日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたのでお知らせします（太字は部長）

総務部	村上 玄也	鴨谷瑠美子
企画事業部	井伊 東吉	鴨谷瑠美子
編集部	山本希久子	穴吹 尚士
句会部	籠島 恵子	木本 朱夏
同人・誌友部	西内 朋月	穴吹 尚士
渉外部	坊農 柳弘	河内 月子
会計部	鶴田 遠野	籠島 恵子
発送部	川端 一步	
事務局	鶴田 遠野	

者14名 ①12回川柳塔まつ

その他

反省について、総会・記

常任理事会11月7日出席

念句会反省

者17名 ①12回川柳塔まつ

分担について

り会計報告 ②各地区川柳

予定 ④同人1名承認 ⑤

会代表者会議の議題検討

8日 9時30分から

③大阪川柳大会について

④高野山合祀について確認

⑤同人名簿の作成 ⑥各部

報告 ⑦その他 次回12月

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	12日(火)午後1時から 雪・詳しい・やばな	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尾崎尾浜川柳会	12日(火)午後1時から 欠ける・ホテル・自由吟	尾崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尾崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
東大阪市川柳同好会	14日(木)午後6時から 続く・スリル・消す・代官	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半締め切り 慌てる・戒める・上役・同い年	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	17日(日)午後1時半締め切り うどん・雑音・予定	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳藤井寺	17日(日)午後2時15分締め切り 十二・笑う	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳ねやがわ	17日(日)正午から トラブル・家計・冷静・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
南大阪川柳会	18日(月)午後6時半締め切り 重い・埋める・プライド・偽り	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から 守る・掃除・スタート・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳塔みぞくち	18日(月)午後7時半から チャンス・髪・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
高槻川柳サークル卯の花	21日(木)午後1時半締め切り 居留守・迷信・おもしろい 眩く・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
川柳クラブわたの花	22日(金)午前9時半から 塗る・舟・派手・あこがれ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの市民川柳会	24日(日)午後1時から ふうふう・鍋・パッジ「荷物」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
京都塔の会	26日(火)午後2時締め切り 箸・奪う・通過	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

12 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 2 時締め切り 惜しむ・将来・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 柱・世話・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 会 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時半締め切り 底力・乱れる・するする 自由吟	旭区 老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 会 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時から さらば・済み・嵌(は)まる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	4 日(月)午後 1 時半から 鯛う・雪・ぎりぎり	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	5 日(火)午後 1 時から 早い・普通・りつえ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	7 日(木)午後 1 時から 震える・道・追憶	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
川 柳 塔 みちのく	9 日(土)午後 4 時から いたずら・撫でる・めきめき	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土)午後 2 時締め切り 料理・芸・ふらふら・繋ぐ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島淞丘
川 柳 塔 打 吹	9 日(土)午後 1 時から 羽・肌・問う	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後 1 時から バランス・筆・慣れる・雑詠	山本コミュニティーセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま	10日(日)午後 1 時から 来期・湯・リフォーム「擬態語」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ふうもん 吟 社	10日(日) 締め切り午前11時 没句供養川柳大会	11月号 P.113参照 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後 1 時から あらまし・遙か・情報・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

編集後記

★早くも歳晩を迎えることになりました。関西の紅葉はまだあちこちに名残を留めています、北国では早や雪の季節では、今冬被害がでるほどの豪雪とならぬよう、ひたすら念ずるばかりです。

★十月号から裏表紙にオニザキのすりごまの広告を掲載させていただいています。スタッフで試食しましたが、香り共に好評、その上健康にもいいので是非ご利用ください。

★初歩教室初の年間賞が発表され、一月の本社旬会の席上表彰が行われます。受賞者の方は勿論多数のご出席お待ちしています。

★今月号発表一路集の三句のうち「ぼろぼろ」という出題に対して「ぼろぼろ」と思い違いをされた投句が

多く選者を悩ませました。折角の投句が選外では残念です。お気をつけ下さい。

★NHKの朝の連続ドラマを楽しみに見えています。特に十月から放送中の「芋たこなんきん」は、川柳のよき理解者でもあり、薫風先生と親交のあつた田辺聖子さんの原案、自伝小説であることから一層熱心に見えています。11月11日には路郎師の句が紹介されました。その上このドラマには相談役板尾岳人氏の長男板尾創路さんが主人公の先輩作家として出演しておられます。創路さんはこの度『板尾日記』を出版、その中に四篇の詩も掲載、マルチャレント振りを發揮されています。

★郵便局の手違いから11月号が一部地区30人に到着遅れがあり、ご心配おかしした事お詫び致します。

(希)

ひとこと

驚きの受賞

リタイア後十年、思い付くままに興味にボランテアに手を染めたが長続きしているものはない。

その中で唯一、川柳だけが十二月十五日の出句締切に間に合うようメールやFAXを駆使、煽てたり発破を掛け続けてくれる淳

司師匠あつてのことだと思ふ。そんな私に今回川柳塔賞準優秀作第二席という賞が頂けるといふ、とてもないニュースが師匠のメールから飛びこんできた。喜びより戸惑いの方が大きかった。川柳に巡り合えた事でお仲間の輪が海を越えて広がり、五七五と楽しく日々を見る心のゆとりができたことが何よりも嬉しい。

(坂上のり子)

○編集部の一員となりまして。宜しくご指導ご支援のほどお願い致します。

○半世紀近い昔の四月、某社の新入社員ながら、社内報(夕刊フジのサイズの新聞)を担当させられ、印刷の何たるかを印刷屋に教えて貰い、覚束なく原稿を書き、恐る恐る割付をしました。活版の文選の時代で、見出しや写真は写植でも、本文は活字棚から職人さんが活字を拾っていました。

○編集で始まった社会人生の活の掉尾を、川柳塔誌の編集のお手伝いで締めくくれる事は、神様の味なお計らいと感謝しています。

○昨年度は誌友拡大プロジェクトチームの事務局を担当していました。川柳会の運営や誌友の拡大に精力的な先輩諸氏のお話を伺い、共感すると共に、川柳塔誌が活動の中心を担っている事を強く感じました。

○その結果、今年度から各地川柳代表者の申込で(本社事務所受付)、誌友候補者に近刊の川柳塔誌を贈呈して、誌友になつて頂く活動が始まっています。皆さんの川柳会でまだ誌友でない方に、積極的にお奨め下さい。

○同人ひとりが誌友ひとり誘う活動で、川柳塔を元気にしたいと思ひながら、校正に励んでいます。(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

発表(2月号) 地名

都府道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「花粉」 (12月15日締切)

2月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

川柳塔(8句) 河内天笑選
水煙抄(8句) 奥田みつ子選
愛染帖(3句) 新家完司選
檸檬抄「花粉」(2句) 川上大輪共選
松本文子選
一路集(3句) 飼う「雪」 井伊東吉選
「雪」 谷口義選
「雪」 春木圭一郎選
「雪」 初歩教室「指」(3句) 三宅保州担当

2月号発表(12月15日締切)

3月号
檸檬抄「税」
一路集「駅弁」「咲く」
「年度末」
初歩教室「渡る」

本社12月句会

とき 12月8日(金) 午後1時開場・2時締切り
開催時間、締切り時間に注意下さい。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441
おはなし
兼題 「ちよつと」
「風」 呂 吉岡 楓 楽
「騒」 ぐ 高杉 千歩 選
「藪」 微 都倉 求芽 選
「転」 機 河内 天笑 選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社1月句会

8日(月) 午後1時から

兼題 「うっとり」「盃」「ラッキー」
「迎える」「一緒」

第25年度 夜市川柳募集

第7回「煙」平田朝子選
ハガキに3句 12月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇六年平成十八年十二月一日発行

発行人 河内 権治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六六二九一六九一四番
振替(〇九八〇)一五三三三八番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)